藤浪ろうけてたのまそよをこさしぬろね契ゐ此そ忘の松山

（四月）藤原尚隆一夜こぬ事侍しよ、五月六日、あやめ引けてけしきる、

ゐきそやなほやをの枕ひとり袮てけさまてろくる袖のうね袮を

返し

袖の上まろくるあやめのなろねね君ろよをひ此まくらにそもむく

（七月）此くわさ都松引露此置さる袋、筆まそへてつろをほとて、

いくろへり松みをく露つもりてろぬてろうミとハならんとそらん

返し

藤原尚隆

いく代満て松のとのそろねあつめたきせぬ筆此海をさゝへん

十一月中つろさ、藤原尚隆とさしむろひり歌よミ侍しとね、江雪

とれとろせ夜さむよなゐぬあそや又なこ江此さりの雪ようられむ

〔常徳院集〕（正月）藤原尚隆鶯のうさこひ侍しふ、

山鳥の尾上乃梅よ宿しめてなろ〳〵し日をうくひそろ鳴

八月初つろさよ見侍し、そりき山

心あてにゐろそろわろむそつ瀬山ひそら此露よ秋ハおゝれと

尚隆義尚ニ和歌ヲ請フ

源寛行義尚ニ和歌ヲ請フ

十月中旬題をさくりて、夕落葉

夕つく日さすやそ山の峯乃松のこまこすゑハ嵐らし吹也

十二月中旬、あふとハと云五字を上りをへてよ見し十首内、

逢とハいなその山此秋乃ろせ志くれぬ松の色もうらめし

源寛行、人丸名號此賛み愚詠歟よゐてと申侍々れそ、ろねてつうそし

侍し、

風のすろさあふきてをれハ敷嶋乃山としさろねとのそそこれ

九日、（甲申）勝仁親王御所御蹴鞠、

〔御湯殿上日記〕（○京都御所東山御文庫記録甲二十七）四月九日、○中日つ丼てよくて、御

まり宮の御ろさへろとあそそさせらるゝ、

〔親長卿記〕十七　四月九日、晴、申除服參内、（○親長ノ女親子卒スルコト、三月二十八日ノ條ニ見ユ、）於

御三間種々有御閑談、次親王御方、予、以量朝臣、源富仲也、

方當年無御鞠始、爲甲申日可遊云々、親王御

○諸家蹴鞠ノコト、便宜左ニ合敍ス、

本年御鞠始ナシ人數

近衛政家第蹴鞠

〔後法興院政家記〕十一　二月八日、（甲申、晴、○略）中今日幸爲吉日間、招少將雅俊（飛鳥井）

鞠始
聖護院道興應司政平等參會
一條冬良參會
甘露寺親長第蹴鞠人數

有鞠始事、鞠以後有盃酌事、三獻、前藤大納言、姉小路宰相(基綱)等在座、
十三日、己丑、晴、晩景有鞠興、少將雅俊來、鞠以後有一盞事、
十九日、乙未、晴、聖門令來給折紙、二疋、百關白被來、依招引也、持來一荷兩種、一盞後有鞠興、入夜又盃酌數巡、
廿一日、丁酉、晴陰、及晩雨下、(略)中若王子來問令張行鞠、(一條冬良)左幕下、雅俊等來、雨下間無程事終了、
廿二日、戊戌、晴、少將雅俊、若王子、伊勢下總守(貞致)等來、有鞠興、事終有一盞、入夜左大將被歸、
三月廿二日、戊辰、晴、有鞠興、
廿四日、庚午、晴、(略)中有鞠興、城齡撿挍來、
四月十二日、丁亥、晴陰、有鞠興、
十四日、己丑、晴、有鞠興、木幡執行、刑部等來、

〔親長卿記〕十七　二月廿三日、晴、藤中納言入道、飛鳥井中納言入道、若王子(藤中門弟)等携一樽來臨、庭前之花盛之故也、鞠張行、人數予、藤中納言(高倉永藤)入道、常祐、飛鳥井中納言入道(榮雅)、右大辨宰相入道、寂譽、頭辨、永康、雅俊、永宣、若王子等

也、今日爲見物物部秦六、土佐太平等來、出太刀、
廿六日、晴、招人々、鞠張行、人數藤中納言入道、飛鳥井中納言入道、右大辨入道、頭辨、永康、雅俊、賀茂輩、貞久縣主、諸平縣主、廣戶、物部見物之間召立了、今日羞湯漬了、
四月廿四日、晴陰、藤中納言入道、二樂院(雅康)已下八々來、鞠張行、俄事也、及晩雨下之間止了、
八月十三日、晴、鞠張行、人々來臨之處俄夕立降仍停止、
十六日、陰、(略)中今日鞠張行、入來人々、藤中納言入道、二樂院、中納言入道、忠顯、以量、永康等朝臣、賀茂輩、貞久縣主、武家輩本鄉與三郎(細川被官)、太平中務、
畠山尾張守政(尙)順、細川彌九郎已下見物人々見物、每度事也、
廿八日、陰、有鞠、藤中納言入道、二樂院、右大辨(賀茂)棟久、貞久等縣主、廣戶、本鄉、太平、
四宮、鴨居等也、入夜雨下、
九月十一日、晴、有鞠、先有朝飯、有二十首續歌、(親長第和歌會ノコト、二月二十四日ノ條ニ收ム、)入來人々藤中納言入道、中御門中納言、飛鳥井中納言入道、侍從中納言、永康朝臣等也、鞠之時棟久、貞久等縣主、物部父子、廣戶、鴨居、藤衞門等來、畠山尾張守見

物、鞠已後入來內給太刀、

〔實隆公記〕十 九月十一日、癸丑、晴、〇中略、甘露寺親長第和歌會ノコトニカ、ル、及晚有蹴鞠、見物非無其興、人數亭主、中納言入道、飛鳥井中納言入道、右大辨宰相、以量朝臣、永康朝臣、宗(棟)久縣主、貞久、遲來、廣戶、物部豐後守、物部秦六、齋藤々兵衞久等等也、

飛鳥井雅康第蹴鞠

〔親長卿記〕十七 九月十二日、晴、俄又有鞠、藤中納言入道、中納言入道、永康同雅親第蹴鞠

朝臣、廣戶、久等、庄藤三郎、予依所勞不久蹴、

十七日、晴、有鞠如先日、(去十二日、)

伊勢貞頼第蹴鞠

〔親長卿記〕十七 二月卅日、晴、詣藤中納言入道許、有鞠、(當年始也、)人數予、亭主、二樂院、江南院、(寂譽入道、)頭辨、忠顯朝臣、永康、雅俊、伊勢二郎左衞門、(貞頼、)貞久縣主、物部秦六、太平等也、

三月二日、晴、〇中略、晚頭詣飛鳥井大納言入道許、有鞠、一昨日依令約束也、人數予、藤中納言入道、二樂院、江南院、頭辨、忠顯朝臣、永康、雅俊、武家輩(伊勢次郎左衞門平貞頼、)賀茂輩棟久、貞久、諸平等縣主也、

六日、不定、於伊勢次郎左衞門許有予、(猶脫カ)依所勞不罷向、頭辨出了、

義尙、石淸水八幡宮ニ和歌三十首ヲ納ム、

〔常德院集〕(四月)九日、石淸水にこめ侍し卅首內、落花

風ゆゑのとなしやことさへむ門さしてちらぬ櫻まあハちらましを

復三十三首ヲ納ム

〇コノ後、義尙、三十三首ノ和歌ヲ石淸水八幡宮ニ納ムルコト、便宜左ニ合敍ス、

落花

〔常德院集〕(七月)八幡名號を上みをねて、卅三首歌社頭ヲ奉りしなるみ、

むらしこれ古のゝ澤まつミそをてかさミせよらな袖ぬらすらん

祐邑大友親豐ニ歿ヲ通ズ

日向伊東祐良、叔父祐邑ノ非謀ヲ疑ヒテ之ヲ殺シ、其一族ヲ自刃セシム、

〔日向記〕三 祐邑生害幷野村亂事

同翌(文明)十八年、丙午、祐邑日智屋ニ越玉ヒ、豐後(大友親豐)ニ入魂可有トノ使ヲ被遣、其故ハ薩摩(島津忠昌)ノ事ハ指向ノ敵ナリ、豐後ヲ味方ニ持玉ハヽ、國モ安泰ニ可有トノ御才覺ト聞ヘケルニ、彼義ハ御爲ニテハナク、吾爲ノ使ト人々申ス、其上右衞門佐ヲ始トシテ、日州十一ケ所ノ城主ハ、皆野村ノ一族タル間、祐國(伊東)公ノ嫡子六郎祐良公ヲ指置テ、祐邑ヲ守護ニ用ユヘキ內略モ可有トテ、同四月

祐邑己ノ爲メニ計ルトノ風說アリ

祐邑大友親豐ニ歿ヲ通ズ

佐一族ナリ　右衞門佐父子生害　野村亂

祐邑生害三十七歳法名

九日ニ祐邑ヲ生害ス、御年卅七歳、法名天叟幸公禪隆院殿ト申、武ノ嗜モ人ニ勝ケルニ、常ハ連歌ヲ好ミテ、人口ニ膾炙スル句モ多カリケリ、或時ノ發句ニ、

露ハヲキ萩ハマタヌル朝哉

餘多ノ卷トモ有ケルヲ取集メテ、後々加護八幡ノ社頭ヘ納メケルト云、然以後野村右衞門佐父子生害、其外十一ヶ所ノ親類ニ悉ク押寄セ、腹ヲ切スル、是ヲ野村亂ト申也、去程ニ六郎祐良代ニ成テ、彌國中ニ威ヲ振玉フ、京都ヘモ其譽有、今出河大相國義尹公ノ尹ノ字ヲ下賜、尹祐ト改、大和守ニ任シ玉フ、元祖犬房祐時公ヨリ、祐堯迄八代ニテ日向一國退治、サシモ代々弓箭ヲ取、其譽不輕、故今尹祐迄十代ニテ、彌近國ニ振威、御兄弟モ餘多有、次男ハ相模守祐梁、三男武藏守祐岳、四女相良宮内少輔長每御前、五女右松六郎三郎御前、惣テ尹祐ハ、武勇智謀優長ノ人ニテ御座ケレハ、名ヲ知タル者ヲハ、昵近付手ニシタカヘ玉フテ、軍功ヲ勵シ、惡逆無道ノ徒黨等ヲ討平ケ、兆民ヲ撫育セント被廻思慮ヨリ外ノ事ハ更ニ在マサス、

〔伊東氏大系圖〕

祐邑世系　加護八幡宮

祐堯　六郎、六郎左衞門、大和守、土持賀、雖爲祐武子、以爲嫡孫、受家督、

祐國　野村腹、又笑山觀公、法名重阿彌陀佛、光照寺、

祐邑　次郎、野村腹、法名天采常幸、善隆院、（イト四代当公）

尹祐　六郎、大和守、肥後國阿蘇大宮司惟乘爲聟、始稱祐良、

祐邑、文明十八年四月九日、於日州日智屋生害、卅七、是兄祐國戰死之後、依尹祐若年、爲傅立對國事於骨盡軍忠、國家治亂併所銘祐邑心腑、國人挾狐疑、卒及此義云云、惜哉、後奈良院享祿四年十二月、賜宣旨、號加護八幡宮、日州國富庄本鄉建一社、宥其靈、

〔參考〕

〔日向記略〕上　○祐良ノ父祐國、飫肥ニ陣シテ新納忠續ヲ攻メ、島津武久之ヲ救ハントスルコト、十七年閏三月八日ノ條ニ、武久、島津久逸ヲ飫肥ニ攻メ、祐國之ヲ援ケテ死スルコト、同年六月二十一日ノ條ニ見ユ、

十八年、祐邑日智屋ニ往テ、使ヲ大友家ニ遣シ、薩摩ヲ防ノ手立ヲナス、然ニ是ハ御家ノ爲ニハ非ス、吾身ノ爲ノ謀ナリト流言ス、其上祐邑ノ舅野村右衞門佐ヲ初メ、十一ヶ所ノ城主ハ、皆野村ノ一族ナレハ、祐

邑ヲ守護ニ立ル内略ヤ有ント疑ヒテ、四月九日、祐邑ヲ殺害ス、野村一族ヲハ、殘ラス腹ヲ切セケリ、尹祐公ハ武勇智謀優長ノ主ナリ、賢者ヲ近ケ、兆民ヲ撫育シ、軍功ヲ勵シ玉フ、殊ニ祐國公御戰死ヲ憤リ玉ヒ、一度飫肥ヲ退治セント謀リ玉フ、是ニ因テ、大友家ヨリ、藤北入道ヲ使トシテ、島津家ト和睦ノ事ヲ勸シカ共、尹祐公御承引ナシ、〇日向私史、異事ナキヲ以テ略ス、

〔日向古迹誌〕六臼杵郡　日知屋村

文明十七年、乙巳、伊東祐國祐堯ノ子、飫肥ノ楠原ニ戰死ス、時ニ其弟祐邑此城ニ居ル、十八年、丙午、使ヲ豊後ノ大友氏ニ遣リ、鄰好ヲ修ム、島津氏ノ喪ニ乘シテ、襲ヒ來ルヲ慮ツテノ事ナルニ、左ニハ非ス、吾身ノ爲ノ事ナリト流言スル者アリ、殊ニ祐邑ノ叔父野村右衞門佐ハ、威權盛ナル家老ニシテ、十一ケ所ノ城主皆其一類ナレハ、祐國ノ嫡男尹祐ヲ廢シテ、祐邑ヲ立ル内略モアランカトノ疑ヒアリテ、是歲四月九日、此城ニ於テ、祐邑ヲ殺ス、時ニ祐邑年三十七ナリ、

陵墓　伊東祐邑墓　本村ノ西富高村界ニアリ、伊東家譜ヲ按スルニ、祐邑ハ都於郡領主伊東祐堯ノ第二子ニシテ、祐國ノ弟ナリ、日知屋城主タリ、文明十七年、乙巳、祐國飫肥ニ戰死ノ後、祐邑國ヲ憂フルノ餘リ、使ヲ豊後ノ大友氏ニ遣ハシ、親睦ヲ求メケルヲ、此ハ吾カ身ノ爲メノ事ナリト讒スル者アリケレハ、自然祐國ノ嫡子尹祐ノ身ニ利アルマシキカト疑ヒテ、同(明)年四月九日、日知屋城ニ於テ祐邑ヲ殺ス、時ニ年三十七ナリ、其日祐邑早ク起テ、露ハオキ萩ハマタヌル朝カナノ一句ヲ吟シ居タル聲ノ下ヨリ刺客來リテ首ヲ隕セリ、

祐邑ノ墓

親豐祐良ニ忠昌ト和睦ヲ勸ムルモゼズ

明十七年、乙巳、祐國飫肥ニ戰死ノ後、祐邑國ヲ憂フルノ餘リ、使ヲ豊後ノ大友氏ニ遣ハシ、親睦ヲ求メケルヲ、此ハ吾カ身ノ爲メノ事ナリト讒スル者アリケレハ、自然祐國ノ嫡子尹祐ノ身ニ利アルマシキカト疑ヒテ、同年四月九日、日知屋城ニ於テ祐邑ヲ殺ス、時ニ年三十七ナリ、其日祐邑早ク起テ、露ハオキ萩ハマタヌル朝カナノ一句ヲ吟シ居タル聲ノ下ヨリ刺客來リテ首ヲ隕セリ、

十日、乙酉、伊勢北畠具方ヲ右近衞少將ニ任ズ、

〔歷名土代〕從五位下源具方（政鄕朝臣男、北畠）　同（文明）十八四十右少將、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　七月十日、〇中略北そとけのゐりて御ゆいまらう、御さいめんあり、三色御とる五らまいる、

〔北畠源氏系圖〕〇紀伊　材親權大納言、正三位、伊勢國司、號北畠、又云金國寺殿、〇中略同（文明）十八年四月十日、任右少將、于時具方、

〇具方、家ヲ嗣グコト、八月六日ノ條ニ見ユ、

十三日、戊子、相國寺勝定院、同院領出雲宇賀莊ノ還付ヲ義政ニ請フ、

〔蔭凉軒日錄〕四月十三日、天氣快晴、〇中略謁東府、〇中略又勝定院別奉行事、近年布施下野守（英基）也、以飯尾左衞門大夫（貞運）書立之、同院領雲州宇賀莊事、前年雖被

具方御禮ニ參內ス

義政飯尾爲規ヲ同院別奉行トナス

前年還補ノ判アレドモ今ニ去渡サズ

成御還補之御判、于今不去渡、重而被成御奉書可爲畏悦之由、自院以連署被白之、可命左衞門大夫之由有尊命、○中略件々以堀川殿白之、○中略就勝定(院殿)別奉行、雲州宇賀莊奉書事、飯尾左衞門大夫方江愚一行兩通、書以遣勝定院、

集證義政ニ進ム

十五日、庚寅、義政、相國寺鹿苑院ヨリ、十三佛及ビ千體地藏ヲ徵ス、

〔蔭涼軒日錄〕四月十五日、不參、天快晴、○中略自東府以調阿一行、鹿苑院入厨子十三佛有之、以前被御覽及、早々可有進上之命有之、又入厨子千體地藏相尋、同可令進上之命有之、

開帖ノ前日寂ス

十六日、不參、天快晴、齋前十三佛入厨子、千體地藏入厨子自鹿苑院來、以悰子進東相府、

建仁寺二百二十五世

十六日、辛卯、建仁寺永源庵永琮(合浦)寂ス、尋デ、義政、永琮ニ建仁寺坐公文ヲ與フ、

〔永源師檀紀年錄〕乾(文明)同十八年四月十七日、鈞帖ヲ以テ、合浦ヲ請ヤ、建仁寺ニ住セシム、文言ハ先例ノ如シ、開帖ノ前日ニ於テ、合浦琮長老遷寂ス、世壽五十六歲ナリ、

〔建仁寺住持位次簿〕不入寺二百廿五世合浦和尙名永琮、嗣惟忠恕、文明十八年丙午四月賜帖、同年四月十六日寂、

〔東山塔頭籍竝宗派〕永源菴

惟忠通恕

二百廿五世不入院　合浦永琮　文明十八丙午四月十六日寂、

二百五十四世不入院　東岫永遼

〔永源師檀紀年錄〕乾(細川)持有　九郎、刑部大輔、

合浦永琮長老　永源第五代、實雖爲第四代、弱之時大首座補任故如此、

〔蔭涼軒日錄〕四月十七日、天降雨、齋了謁東相府、○略中建仁寺御寄進永琮西堂建仁座公文事以書立伺之、

廿二日、天快晴、齋了謁東府、○略中永琮西堂建仁寺座公文、建仁寺御寄進內、兩通御判事將伺之、依連日御痛飮御寢、女中衆亦皆醉臥、以故徒歸矣、

廿三日、天快晴、以悰子白、○略中建仁寺御奉加建仁寺座公文永琮西堂公帖御判事、堀川殿御白次也、兩條皆傳鹿苑院、

〔永源師檀紀年錄〕乾(永享十年)同年十一月十一日、最勝(細川持有)院殿ノ息永源庵ニ入テ得

文明十八年四月十六日

越中金剛寺ニ住ス　安國寺ニ住ス　周驥作永琮住金剛寺山門疏

度ス、永琮喝食ト號ス、

同年十一月十五日、第三代永源第三代實夫通的西堂遷寂ス、〇中略今ヤ西堂遷化ノ時、琮喝食幼弱ノ故ニ、遺言ノ德秀載公ニ附ノ撫育セシム、永源庵ハ屋形ヨリ西堂ノ法弟殊大首座ニ補任燒香セシム、

同年（實德二年）秋、屋形ヨリ篠田中尾寺ノ住持ヲ當庵ニ請フ、〇中略仍大書記移任ス、此レ合浦琮成長ノ故ニ、永源庵ヲ讓ラシメンカ爲ナリ、

同（文明）六年、合浦琮公金剛寺ニ住ス鈞旨ニ曰ク、越中國金剛寺住持職、任先例可執務之狀如件、文明六年十二月廿六日　永琮首座　准三宮

同十一年五月六日、合浦禪師ヲ安國寺ニ請待住持ス、台帖ハ先例ノ文言也、

〔翰林葫蘆集〕合浦琮首座住越金剛

北方金剛窟、妙德當四月而下生、西天蠟人氷、能仁經九旬而禁足、長期短期是大圓覺、智增悲增非小因緣、某修整寡言、敦和容物、置還珠亭於合浦、價聲九曲連城、創傳衣菴於凌霽、法道千鈞一縷、護木叉嚴霜凜々、誦般若終日琅々、雪落泉南素馨、猶懷舊業、春殘越中紅藥、久嚮名區、稱空王殿上之狀元、超咸淳年後之行道、蒼龍吹篪白虎繩瑟、願聞玄音、翠龜負字赤雀啣書、仰祝容算、

景三作永琮壽像贊

〔補庵京華新集〕前住東山合浦和尚壽像贊　總之子、惟忠　永韓藏主請

英標山立、雅量海深、取松源者八世、享菩帚（德）於千金、佛眼普說、卍菴法語、是北磵所論也、乃翁道重于古、波離軌範、馬勝威儀、是東陽所則也、此老行高于今、菴曰傳衣、非世可議、浦以還珠爲國之琛、大藏五千、居虎丘位而秉弗、聖諦第一、領熊峰旨而安心、修造祖塔、借鳳樓乎、遊戲佛海、唉牛蹄涔、青鞋布襪、越上名山金剛窟、風行草偃、紅塵席帽、輩下古寺、尊勝幢、日照天臨群望々初晴月、法施々大旱霖、當金粟佛示病之時、端坐毘耶丈室、逢紅蓮府降帖之日、董薇建仁禪林、傳盛事斧藻師意、題陋贊金玉爾音、鳥喚花驚春已夏、一株韓木鬱森々、

龍集丙午文明十八年四月十七日　前相國橫川景三

十七日、壬辰義政、相國寺住持梵怡季睦ヲ罷ム、尋デ、等恩天澤ヲ再ビ同寺住持トス、

〔蔭凉軒日錄〕二月十六日、天氣快晴、〇中略勝鬘院桃源（瑞仙）西堂亦來、蓋當寺住持（季睦）退院事督之、

十七日、不參、天快晴、〇中略聯十句時桃源友竹來、季睦相國退院事談之、

四月十七日、天降雨、齋了謁東相府、相國寺住持季睦和尚依不例退之事、被白

之由達台聽、御免之由被仰出、

廿二日、天快晴、齋了謁東府、相國寺再住天澤(笠恩)和尚書立、○中略御判事將伺之、依連日御痛飲御寢、女中衆亦皆醉臥以故徒歸矣、

廿三日、天快晴、以惣子白相國寺再住之事、○中略公帖御判事、堀川殿御白次也、兩條皆傳鹿苑院、

廿七日、不參、天半陰、○中略自右馬頭(細川政國)殿、南部右京亮爲使、相國再住天澤和尚御點禮謝被仲之、乃遣惣子右馬頭殿私第、仲回禮、

五月一日、乙巳、不參、天快晴、○中略齋了、當寺再住天澤和尚來于當軒、蓋今朝自開山諷經始出頭、爲禮謝來云々、愚對面送之、

○梵怡相國寺再住ノコト、十七年十二月六日ノ條ニ見ユ、

十八日(癸巳)、當座和歌御會、

〔爲廣詠草〕(四月)十八日、禁裏御當座、

岡雪

埋もはゝ雪まも色のあらそれを一村高き岡の松かえ

祈戀

うき中にうゝは心のあめもらり朽をハ海りとも神もなひらし

受者ハ佛持院三井寺等ノ住侶

近衛政家同尚通結緣

道興灌頂佛供ヲ政家ニ贈ル

日野氏始メテ東山第ニ往ク

日野氏ハ綱代輿

十九日(甲午)、聖護院准后道興、山城大雲寺ニ灌頂ヲ行フ、

〔後法興院政家記〕十一 四月廿一日至廿四日、於大雲寺、被授灌頂云々、

廿四日、己亥、晴陰、自午刻時々小雨洒、參北野、平野、御靈等社、歸路參石藏殿、聖門自去十九上折紙、二百疋、入夜爲灌頂結緣、參本堂、亞相同之、又令同道實門聊聽聞、後歸宅、今日折三合、樽一荷進聖門、

廿五日、庚子、降雨、自午刻風雨甚、入夜止、巳刻地震、○中略自聖門、灌頂佛供三杯給之、

義尚、生母日野氏ト共ニ、義政ヲ東山第ニ省ス、

〔親鄕日記〕四月十九日、甲午、

一東山殿樣へ御所樣、上樣御成、

〔親長卿記〕十七 四月十九日、晴、○中略今日御臺始渡御東山殿、路次見物之、

先室町殿渡御、次出車、次御臺御輿也、綱代輿也、

〔實隆公記〕九 四月十九日、甲午、晴、○中略抑今日御臺御方室町殿等渡御東山殿云々、凡兼日經營以下盡善盡美、一時壯觀云々、

廿一日、丙申、晴、〇略中今日室町殿可爲御歌合之由、兼日被催之、俄渡御東山殿之間、延引云々、今夜御臺還御、

〔長興宿禰記〕下 四月十九日、甲午、晴、今日御臺（一位殿）渡御東山殿、御新造以□□御出也、獻代二萬疋被持參□□殿同御參、種々兼日御經營、一獻御贈物等御奔走、幕下曉天還御、一位殿一兩日御逗留、後日還御云々、

〔蔭涼軒日錄〕四月十九日、不參、天氣快晴、祖忌如恒、午后室町殿幷御內御成于相府、御伴衆細川淡路（勝春）次郎殿、同右馬助（政賢）殿、大舘彈正（尚氏）少弼殿、伊勢兵庫頭殿、木阿彌御內御伴大和佐渡（邦永）守、鹽冶尾張守、松田上野介、三上兵庫助（政實）、丹比左近（忠宗）將監、松波六郎（基秀）左衛門尉也、御內アシロニメス、於寶雲門前見物之、廿一日、夜戌刻還御、自御內二萬疋御折紙見進之、

廿一日、不參、天半陰半晴、〇略中依連日御痛飲御寢、女中衆亦皆醉臥、以故徒有御一獻云云、

廿二日、天快晴、齋了謁東府、〇略中戌刻御方御所、同御內還御云々、此日伊勢守殿歸矣、於殿中有宴、愚亦與之、今朝御內（江御）引物御練貫十重、香合一ヶ、剔紅金禰一端、紺地、唐紅絲三斤、段子三端、白（薄梅）、紅香爐一ヶ、胡銅食籠一ヶ、剔紅盆五

義政痛飲女中等皆醉臥

義政冨子ニ物ヲ贈ルル

義尚ニ扈從ノ人々

日野氏ニ扈從ノ人々

日野氏還ルル

獻代二萬疋持參

枚、桂漿堆紅引合十帖、以上調阿御使也、

廿三日、天快晴、〇略中往大藏卿局、伸御內東山御成事之賀、

〔大乘院日記目錄〕四 四月十九日、御臺東山殿ニ入御云々、此御用先日長谷檜被召之、

〔大乘院寺社雜事記〕百二 三月廿三日、

一自東山殿長谷寺之檜五本可堀進之由被仰出、松田對馬守數秀奉行也、十三日奉書、又廿日御催促奉書兩通難波持來了、則仰付之、明日可下云々、名所木共被召上之、

廿六日、雨下、

一難波新左衞門上洛、長谷寺返事上之、檜事可堀進云々、

廿七日、

一長谷寺より檜六本堀進之、人夫二人同申付之、明日德力可上之由加下知了、奉書事仰付清賢、

廿八日、

一檜進京都東山殿了、人夫四人、德力法師上之、

奉書ヲ下シテ檜ヲ催促スル所ノ木ヲ徵ス

義政長谷寺ヨリ檜ヲ徵シテ待ノ用ニ充ツ

檜六本ヲ進ム

廿九日、夜、雨下、
一木返事到來、河原者五十疋給之云々、不得其意候、
〔大乘院寺社雜事記〕百三　四月一日、雨下、
一長谷寺檜又三本可進上之由、對馬守書狀到來、則仰彼寺了、先日進上之內三本ハ無爲也ト、其餘一向根無之、或不付土云々、三本も色々河原者ニ申合留之、五十疋分給河原者了、
四日、
一自長谷寺檜三本堀進之、明日可進上于東山殿也、去月土用以後六本進之、其內不付土之由奉行申之間、又進之、名所木共被召之故也、先日五十疋進之了、
六日、夜大風也、
一檜返事到來、神妙御悅喜云々、京都無殊事、
十六日、
一慈恩院律師來、檜一雙兩種持參之、今日自京都令下向云々、爲番頭召下了、京都無殊儀、來十九日、御臺御方東山殿へ可有御成云々、室町殿申御沙汰也、爲此御用御庭等被作之了、如此御取亂之故、御拜賀方事、近日ハ一向不及御沙汰云々、〇義尙、右大將拜賀ノコト、七月二十九日ノ條ニ見ユ、
十九日、
一〇中略今日御臺御方入御東山殿云々、
〔政覺大僧正記〕九　四月朔日、丙子、晴、
一長谷寺檜木事、重而三本可堀進之由御奉書アリ、
十九日、甲午、
一今日東山殿ェ御臺渡御、
廿四日、己亥、
一去十九日、上さま東山渡御事御折紙二萬疋被持、其外女房衆悉小袖一重被下之云々、三日御逗留也、
二十一日、丙申、日吉祭、
〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　四月廿一日、はよしのまつりまて御神事、御まやうしんなり、夕ろさんろうの辨ろへるよし申されて、御まかり、

河原者　更ニ三本ヲ進メシム
日野氏ヲ迎フル爲メ庭ヲ作ルニ
日野氏義政ノ女中小袖等各一重ヲ遣ス
御精進

勅使葉室光忠參向

御内祭

〔實隆公記〕九　四月廿一日、丙申、晴、〇略中日吉祭、右大辨光忠參向云々、

二十二日、丁酉、賀茂祭、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　四月廿日、雨ふる、あふむろつらゐいる、

廿一日、〇中ゐふむろつらゐいる、

廿二日、ちとふる、かものまつりまて御神事、御まゐもらゐ、御うちまつりの御さゝ月三こんらゐ、宮の御ろさゐる、源大納言めして、□あふひともらけらるゝ、

〔親長卿記〕十七　四月十九日、晴、御蔭山云々、

廿二日、晴、賀茂祭也、社家之儀訴如恒、入夜參內、元長朝臣、番也、晝間御神事間不參、輕服之故也、〇親長ノ女親子卒スルコト、三月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔實隆公記〕九　四月廿二日、丁酉、晴、賀茂祭也、

〔續史愚抄〕四十一後土御門院中之下　四月廿二日、丁酉、賀茂祭無沙汰、但社家行

御戶開云、親長卿記、或記、

幕府褒貶歌合、

參會ノ人々

讀師海住山高清

發聲飛鳥井雅親

義尙小袖大口計ニテ出座

延引

〔十輪院內府記〕中　四月十八日、無殊事、自(二階堂)政行狀到來、廿一日可有褒貶御會、可參之由也、可存知之由請文、長氏奉書也、

廿二日、大樹褒貶也、晝時分著小直衣參入、早參之由防(二階堂政行)鴨河判官會尺、人々可參之由觸催之歟、其後人々參集、大納言入道、榮雅、海住山大納言、侍從中納言、姉小路宰相、雅俊等也、彈正少弼、、講師、海住山讀師、發聲入道也、披講之後、各申存知分、以前去七日夜被召集歌被番左右也、余一首負、一首勝了、抑都鄙云云、歲のさり若可爲立春事歟、歲暮をさりとハ難申哉之由申出之、仍人々同心、此歌後被付作候者、爲廣卿歌也、家人定有子細歟、可尋也、其後有暮飡、其後一獻之後御出座、御小袖大口計也、御盃等慇懃有御禮、三獻之盃余可始之由、頻被仰、然而堅斟酌申了、余有歡樂之氣、仍早出了、其後猶有獻云々、

〔實隆公記〕九　四月廿一日、丙申、晴、〇略中今日室町殿可爲御歌合之由、兼日被催之、俄渡御東山殿之間延引云々、〇義尙及ビ日野氏、義政ヲ東山第ニ省スルコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

廿二日、丁酉、晴、〇略中午後參室町殿前內大臣、通、大納言入道、海住山大納言、下官、姉小路宰相、雅俊等祇候、去十四日當座卅首和歌爲十五番歌合當座褒貶、

飛鳥井雅親判詞ヲ加フ講師大館尚氏

義尚和歌

十五番歌合

一番　近衛政家

飛鳥井雅親

大納言入道書判詞、講頌之儀、讀師海住山大納言講師尚氏也、政行、宏行等候末座、衆議了、大納言入道當座書判詞、事了賜盃飯、有一獻、小時可有御出之由、申入之處、大樹御出座、御小袖御大口計也、盃酌數巡、自他及沈醉、夜更退出、

〔親長卿記〕十七　四月廿二日、晴、○略中今日室町殿有褒貶、可參云々、申故障之由了、

〔常徳院集〕（四月）廿二日、褒貶歌合ヲ、首夏

木々もとやかとりの衣袖ひけて袮覺此間との露此まさらせ

〔殿中十五番御歌合〕

判者前大納言入道榮雅

一番

左　春　會坂關

杉むらハうゐをれもてゝ逢坂も春ハ霞此關と見えぬ榮

右　沙彌榮雅　小鹽山

小松原とやほろ〳〵とみえてゝなりをしぬ此山乃春おも明ろさ

左歌、相坂の關此杉むら埋まて、かそこの關此名み立ぬるこゝろ、首尾よくとゝのゐてよろし、右うさ、脂燭一寸まてもなき歌様なり、おとふ小松原小鹽、小此字（重脱カ）あるへし、かさ〳〵是非み及ふ、ろらを、左乃勝にて侍るへし、

二番　近衛前關白（政家）

左　芹河　式部卿宮（貞常親王）

せり河やこゆきも今ハ遠此世此そるをろおしてをり霞哉

右　老曾森　左大臣（西園寺實遠）

今年猶ゐろ身おいその森此ろを一しねむ羽此名殘をそれをふ

左、せり河の御幸、ゆへ〳〵しく侍り、下句やろをあハを侍らん、

右、おをも下句同前の心地を、なをらへて持みや、

三番　左大將冬良

左　鳥羽　春ハをゝ花のふろこやをとなく鳥羽田のこなこをり霞ろ羽

右　志賀花園　左衞門督爲廣

さくからに浦半此なこの面影もむろしみにねふおろ此そ羽そろ

文明十八年四月二十二日

四番　徳大寺前内大臣
五番　萬松軒等貴
勘修寺教秀
飛鳥井雅康
徳大寺實淳

左乃歌、下句いろみそやきおゐ、右此うさ、五文字そふとしたるやうに侍ゟと、歌此さほよろし、又定家卿のうさみ、さゝなミやおろ此花そのかもむ日此あらぬ匂ひみうら風そふくと侍るやらん、かやうにうさもとるとハなしみおをへるおゝろの侍るなり、いろさま勝侍るへし、

四番

左　野路　徳大寺前内大臣

さゝ那ミとおゟも見えたり野ちにさとや風ふきたつる春此あけ雪

右夏　神山　沙彌宗世

いふひくさもむくてあまさに神山の椎柴かくゟ誰ろさそらむ

左歌、よろに祢也、右うさ、さ衣み神山のおゐ柴かくゟおのへハろと侍るゟ、第二句おもむそく侍ゟと、勝侍るへきみや、

五番

左　清瀧河　萬松軒等貴　宗山

夏衣織てやきまし清瀧のなミろおらいと風をそゝしね

右　辛崎　權大納言教秀

夕風や那ミ此ちさとみかよふらむ一木もそゝしからさねろ松

左の清瀧河、夏衣織てやきまし、かろ山分衣み思ひ侍へらゟさるろよろしく侍り、右此うさ、とろる難ハ侍らねと、左勝侍るへし、

六番　中院通秀　甘露寺親長

左　秋　鴨川　前内大臣

秋みとやそゝほの木末うりろひて月も色那るかゑろ河なミ

右　眞野入江　按察使親長

そりなミもをとそさましき夕ろ那まろゝ入江をゐさる秋風

左右共無可、無不可、勝劣難決乎、

七番　周全　高倉永繼

左　嵯峨野　周全

色みそむ衣お玉此をミなへしなむくさろ野の露此明不ろ

右　小倉山　高倉永繼　沙彌常祐

出ぬまに不とハろきのミをくら山ふもと此野への月おさやけさ

左、衣裏眞珠の緒み、女郎花をそへらゟて、あさるさろ野の露此明不

八番　飛鳥井雅俊
堯盛
九番　大館尚氏
海住山高清

のみ、なむくそろさをいさむる心も侍るや、右、小倉山乃ふもとの野へみ光を先さてゝ、山本み月を待まゝ海さも侍へし、左ろハあまとも、玉比光ハ月みもいさゝろ増里侍ぬ面し、

八番

左　栗栖野
から人やいまかへるらむうりらなくくるすの小野比あれ比夕くま

雅俊

右　桂里
そむ月のかつら比里比秋風やところからな波雲そらふら満
栗栖のを比ゝ秋の夕くま、桂比さとの秋比よの月、いつまも景氣おゝ
しく侍里、

堯盛

九番

左　宇治川
見里させハうちの河風ふねならし霧里けいつる秋乃志そふを

尚氏（大館）

右冬　高嶋山
あらぬ日々雪み積て梢鹿比かよふ跡見るをろしま比山

権大納言高清

右、あらぬ日ハと打出されある、如何と聞え侍り、左、聞ふくき所も侍らも、勝侍るへきみ了歟、

十番　冷泉政爲
廣澤尚俊
十一番　二階堂政行
三條西實隆

十番

左　田上河
聞つらもあしろ比床の友ちとり田上河みいく夜なくら満

権中納言政爲

右　比良山
今朝よりハ氷にとりるさゝ波もかへるをとなれむらろ里風

尚俊（廣澤）

十一番

左　戀　打出濱
いろみせむつゝむとそれと打出比むまの名もうれ袖のさゝ歟ミ

政行

右　床山
むらハし歟我近江路と待し夜も今ハむなしき床の山らせ

権中納言實隆

左ハ打出濱の名を袖のなミさみかまち、右ハ近江路の名をむなしき床みうらむ其體むとしく無差別、

文明十八年四月二十二日

十二番　姉小路基綱
河内宏行

十三番　伊勢貞頼
中山宣親

十二番

左　方田浦

逢ミるもかゝ田ゟうらによるふなのとろおきえみも身をや捨まし

（河内）宏行

右　守山

いろみせむうゑ名ハをゐゐをる山ゟやまぬ思ひのろひもなき身を

右、うゑ名をる山めつらしけなし、左、歌ゟ體やさしからねとも勝侍るへし、

十三番

左　篠原

夕まくゟ袖よりあまる白露ゟまゟみみさるゝ野ちゟ篠とら

（伊勢）平貞頼

右　伏見野

それと又ふしミの里み馴みゝむろ床のミゟあゟまくもたし

左歌、かさねる詞ゟやうにも侍ゟとも、猶ゟのみみさるゝ篠原なとゝゟきさるよくそ侍るよし聞侍し事也、右歌、誰と又ぬしミゟさとよろしく侍、可爲勝歟、

十四番　勸修寺政顯
才法師

十五番　結城尚隆
義尚

十四番

左　井手里

ほゝミえぬゝをひも今ハ我袖のなミさゟ色み井出ゟさゞ人

才法師

右　波都賀師杜

人めなを身ハをつかしゟをり始て露きえかへる袖もうらめし

左うさ、めつらしきふしハ侍らねと、右みハまさり侍なむ、

十五番

左　安川

袖乃ゐミな拔せねろをて安河や數かく水み戀ゐさりけゝ

（結城）藤原尚隆

右　浮田杜

露もうし時雨もけらし身を秋のうゑ田ゟ杜み袖ハくりゞも

（義尚）右大將

左歌、やゝ河やと侍るよりゟをりうさいさゝろ思ひえさるやうに侍り、右うさ、露もうし時雨もけらしゟといひゟをりて、上句艶みきゟえ侍ゟハ、尤可爲勝、

文明十八年三月十六日、各々詠進之、仍後日被書遣判詞、作者之書樣等事、

文明十八年四月二十二日

勸修寺大納言家、于時傳奏被之畢、（ホノマヽ）

○コノ後、幕府、復褒貶和歌會ヲ行ハントス

〔十輪院内府記〕中　七月一日、○略中自大樹明日可有褒貶、可參云々、所勞之由申了、

延引

二日、○略中御會延引也、其間加養生可參之由、自大樹被仰之、

〔實隆公記〕十　七月一日、甲辰、小雨洒、○略中大夫判（三階堂）官政行奉書到來、明日可有褒貶御會、可令豫參之由武命也、虫所勞未快之間、非自由故障之由申之、○略中二階堂送消息云、明日御會延引、定日重而可相示云々、

二十三日、戊戌、幕府、峯彈正忠ノ、松木宗綱家領伊勢智積御厨ヲ押妨スルヲ退ケ、宗綱ニ之ヲ安堵セシム、

〔理性院文書〕○坤　○山城

伊勢國智積御厨事、就峯彈正忠押領、去年被成奉書之處、于今不渡付云々、違背御下知之條言語道斷次第也、所詮一段御成敗之上者、速退彼等妨、任當知行之旨、向後彌可令全領知給候由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年四月廿三日　（假名藏厨）加賀守（花押）

宗綱勅裁ヲ請フ

直垂ヲ與フルノ例ナシ

義政及ビ義尚諸寺ニ物ヲ贈ル

中御門（松木宗綱）兵部卿家雜掌（假名元連）沙彌（花押）

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　五月十九日、○略中松の木ち行まつきて、ちよくさせ申さるゝ、まさおほせへきよしの事おゐせらるゝ、おほせのことくおほしめすいつまてもまいらせしまてもまいらせらるゝ、

○幕府、松木宗綱ノ訴ニ依リ、山城大慈庵ノ、伊勢智積御厨年貢ヲ違亂スルヲ停メ、宗綱ニ安堵セシムルコト、十五年四月十一日ノ條ニ、大慈庵、更ニ寺領御厨三分一ヲ宗綱ニ押領セラルヽヲ幕府ニ訴フルコト、本年七月十五日ノ條ニ見ユ、

義尚、鹿苑院ニ直垂ヲ贈ル、

〔蔭涼軒日錄〕四月廿三日、天快晴、○略中自御（尚）方御所、御直垂一具賜于鹿苑院、廿五日、天半晴、○略中小河御所御直垂、謾皆申賜無先規、先規之時宜大舘少弼殿委曲相談、

○コノ後、義政及ビ義尚、諸寺ニ物ヲ贈ルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔蔭涼軒日錄〕四月廿四日、天快晴、○略中小補（第三）軒賜御折三合、以拜受折紙見進

ル折　白瓜　普廣院　阿古陀瓜

之、

廿五日、天半晴、〇略中自東相府白瓜小折一合、被獻鹿苑眞前、拜受折紙如恆進上之、

廿九日、天降雨、〇略中橫川和尙爲賜御折禮謝來于當軒、〇略中自西府白瓜小折一合見獻鹿苑院眞前、拜受折紙進上之、木阿奉之、

五月二日、天快晴、〇略中自相府白瓜小折一合被獻普廣眞前、調拜受折紙、調阿方渡之、

三日、不參、天降小雨、〇略中自東府白瓜小折一合被獻勝智院眞前、調拜受折紙、左脇參河守方江渡之、

十二日、不參、天快晴、〇略中自西府阿古陀一籠被獻普廣院、及深更之故、先置此方也、

十三日、天氣快晴、〇略中自東府阿古陀一籠見獻鹿苑眞前、拜受折紙乃見進之、普廣院阿古陀拜受折紙、今旦獻西相府、

十四日、不參、早旦天洒雨、自夜半洒之也、〇略中阿古陀一籠自東府被獻普廣眞前、拜受折紙進上之、

茄子　梅染ノ帷紋ハ桐葉　近江瓜　勝智院　崇壽院　大和瓜　勝定院　慶雲院　相國寺方丈

十七日、天洒雨、〇略中茄子一折自東府被獻鹿苑眞前、拜受折紙如恆

廿三日、天氣朦朧、〇略中了春行者謁東府、賜梅染帷一領、紋桐葉也、

廿四日、不參、天氣朦朧、〇略中自相公御折三合賜之、乃調拜受折紙進上、調阿奉之、

廿五日、不參、天朦朧、晚來以椶子伸御折拜賜之御禮、蓋依不例不參也、

六月四日、不參、天快晴、〇略中自東相府江瓜一籠鹿苑院、同一籠普廣院、拜受折紙如恆、

十四日、不參、天快晴、〇略中自東府江瓜三籠見遣勝智院、調拜受折紙進上之、

十九日、天快晴、〇略中自東府和瓜一荷充被進鹿苑院、普廣院、等持寺、勝智院、拜受折紙各進上、自西府和瓜一荷充被進鹿苑院、崇壽院、拜受之折紙各進上之、

廿日、不參、天快晴、〇略中和瓜一荷充自東府被遣等持院、勝定院、慶雲院、各獻拜受之折紙、

廿一日、不參、天快晴、〇略中自西府和瓜一荷充、見遣相國方丈、勝定院、普廣院、拜受折紙皆如常、

廿二日、不參、天快晴、〇略中齋了自東府和瓜一荷充見遣相國方丈、崇壽院、拜受

折紙如恒、

廿四日、天快晴、〇略中自東府御折三合見遣鹿苑院、乃調拜受折紙進上之、

廿五日、不參、天快晴、〇略中和瓜一荷充、自西府見遣長得院、慶雲院、調拜受折紙進上之、

廿七日、不參、天快晴、〇略中自西府和瓜一荷充、被遣兩等持、拜受之折紙如恒、歲阿奉之、

七月四日、不參、天快晴、〇略中自小河御所和瓜一荷被遣南禪寺、拜受折紙如恒進上之、

六日、天快晴、〇略中丹瓜一荷鹿苑寺維馨(小桂)和尙、同一荷蔭凉某、調拜受折紙調阿方江遣之、

七日、不參、天氣快晴、〇略中進昨日自相公所賜之丹瓜酬節以一盃、盃中者數日前自菅里贈之所謂天野酒也、自東相府丹瓜一荷被遣小補軒、拜受折紙如恒例、

十一月八日、不參、天快晴、〇略中晩來往瑞泰軒有小宴、時兎大夫在座、宴將始之頃、自小河御所以於阿彌被下蜜柑御折一合、及薄暮謁小河御所仲忱謝、大御

丹波瓜
鹿苑寺梵
桂蔭凉軒集
詵

長得院

等持寺

南禪寺

蜜柑

乳江謹白御禮、相公時御寢也、

十二日、不參、天快晴、〇略中自東府黃柑一折被遣横川、乃報之、拜受折紙如恒、

晦日、不參、天洒小雨、午後自東府江豉五十把被遣鹿苑寺維馨和尙、同五十把被遣崇壽院横川和尙、各調請取、調阿宅江可被遣人由報之、

十二月十七日、不參、天快晴、齋了自調阿折紙到來、江豉五十包被遣栖老軒、拜受折紙加恒、〇略中自東相府江豉五十把拜領、乃調拜受折紙遣調阿方、〇略中夜來試相公所賜之江豉肴之行盃、茂叔、春湖、寮衆皆同宴、

十八日、天快晴、〇略中齋了謁東府、〇略中仲昨日所賜江豉之謝、

廿四日、不參、天氣朦々、不晴、不雪、不雨、〇略中自東府御折三合被遣等持院、乃遣折簡報之、調阿奉之、

廿五日、不參、天快晴、〇略中自等持院御折拜受之折紙被獻東府、

廿八日、天快晴、〇略中等持院月翁(周鎔)云、去廿四日賜御折忝之由申之、

黃柑

近江味噌

栖老軒

等持院衆僧等持寺ノ例ニ依

二十四日、記、義政、等持院ノ請ニ依リ、明年ヨリ同寺都管職ヲ略スルコトヲ許ス、

〔蔭凉軒日錄〕

四月廿四日、天快晴、〇略中謁東府、〇略中等持院衆僧連署供台覽、

リテ請フ

蓋自來年可略都管之訴訟也、以等持寺之例白之、命寺奉行可成奉書之由有
台命、左京大夫殿御申次也、乃召等持院出官等夥監寺傳台命、
廿七日、不參、天半陰、剛岳居士年忌、召飯尾大和雜掌、就等持院都管職事可成
奉書之台命傳之、蓋去廿四伺之、寺家連判訴狀歷大和方一覽也、使者引田五
郎左衞門尉也、
廿八日、不參、天快晴、○中略就等持院都官（管）職略之事、飯尾大和調奉書等持院出
官持來、一衆歡喜踊躍、

飯尾元連奉書ヲ出ス

宣胤五月二十五日上洛ス

國ノ儀無爲領狀

二十五日、庚子權中納言中御門宣胤ヲ越前ニ下シ、同國守護朝倉氏景ヲ諭
シテ、御料所ノ年貢ヲ納メシム、尋デ、宣胤、歸洛ス、

〔實隆公記〕九　四月廿五日、庚子、雨降、○中略中御門中（宣胤）納言越前下向云々、
五月廿七日、辛未、晴、○中略勘修寺亞相入來、被携藥鑵、中御門黃門同來此席、去
廿五日自越前上洛、國之儀無爲領狀、珍重自愛□相語者也、

〔親長卿記〕十七　五月七日、朝間晴、早旦參內、○中略、月次和漢聯句御會ノ條ニ、不參、○中略中御門中納言爲御使下向越前、

〔宣胤卿記拔書〕明應三年二月十日、今日下寺侍於越前、內裏御料所、御年貢

三千疋ヲ進上シ爾來例トナルル

去年分不致沙汰之間、早々可申遣之由、此間度々被仰下之故也、粮物三百疋
昨日給之、又綸旨（宛所愚臣也、）被下之、副奈狀見遣、號河北在所於國有兩所、然近年以小所
定御料所申付之間、御年貢難澁致訴訟也、此御料所事、亂以來一向不致沙汰
之處、先年余爲御使下向、申含之間、嚴重可致沙汰之由捧請文、先爲御禮萬疋
進了、然其年秋歟、（年貢以前、）朝倉（氏景、當時景父、）早世了、○氏景卒スルコト、七月四日ノ條ニ見ユ、子貞景者
年少被官任雅意、其年三千疋進上以來年々以三千疋爲皆納、雖被成武家之
奉書、曾不承引、結句點定小所、及鬱訴之條希代事也、

三條西實隆、義政ニ物ヲ贈ル、

〔實隆公記〕九　四月廿五日、庚子、雨降、○中略花瓜一折進上東山殿了
○コノ後、實隆、義政ニ物ヲ贈ルコト、便宜左ニ合敍ス、

花瓜

〔實隆公記〕九　六月廿七日、辛丑、晴、○中略佳例瓜東山殿、室町殿兩御所進上
之、春日局同遣之了、

義尙ニモ贈ル

〔實隆公記〕十　七月一日、甲辰、小雨洒、○中略自御牧瓜到來、○中略御臺御方、同申
（次高倉局、）大閤等進之了、

義政室日野氏ニ贈ル

二十七日、壬寅幕府、政所寄人清貞枝ヲ段錢奉行トシテ、伊勢ニ下ス、尋デ、

集證貞枝ノ來報ヲ謝ス

貞枝、同地ニ卒ス、

〔蔭涼軒日錄〕四月廿七日、不參、天半陰、○中略又清八郎左(貞枝)衞門尉爲段錢奉行可下勢州、昨日來報之故、遣悰子彼第、伸其禮、

〔東寺百合文書〕ワ廿一口方評定引付 文明十八年 八月二日、

東寺奉行貞枝ノ卒去ニ依リ其後任ヲ議ス

寶緣 教濟 覺永 融壽 俊忠 慶清 嚴信 宗承 圓忠 杲明

祐源 榮舜 俊雄 公尋 公遍

經歷

恩賞奉行

寺奉行清八郎(貞枝)於勢州死去治定之間、已前寺奉行之事、飯尾加賀(清房)守競望申間、於于今者、自寺家可有領狀歟否事、對馬(松田數秀)守可有談合云々、已前者清八郎依支申無領狀者也、○義政、東寺寺奉行ヲ定ムルコト、正月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔親元日記〕八 文明十七年八月五日、癸未、

十地院別奉行

奉行衆 ○中略

清八郎左衞門尉貞枝○中略

以上十七人恩賞方衆、合點分四人無出仕之仁也、

〔蔭涼軒日錄〕二月廿七日、天氣半陰半晴、○中略齋罷謁東府、○中略十地院御領(○中略、義政、十地院ニ同院領三條烏丸ノ地ヲ安堵セシムルコトニカ、ル、二月二十七日ノ條ニ收ム、別奉行清八郎左衞門尉

知足軒別奉行

也、

五月七日、天快晴、○中略寶壽院領屋地事、與知足軒相論、去年及訴陳、未及落居、○中略依知足軒支證明鏡之旨、可白沙汰之一行事、彼別奉行清八郎左衞門尉請之、

〔大乘院寺社雜事記〕百四 九月八日、

一御前奉行自京都注下之、

清八郎左衞門尉貞枝(シゲ)○上略

〔尊卑分脈〕諸氏 清原

貞秀 八郎左衞門尉、和泉守、

貞枝 八郎左衞門尉、

○幕府、貞枝ヲ伊勢ニ下ス日詳ナラズ、姑ク蔭涼軒日錄ニ據リテ掲記ス、貞枝、父貞秀殁スルニ依リ家ヲ嗣グコト、十五年八月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕七之部 清貞枝 文明十八年四月二十七日

花押

賀茂重則
日野政資

二十八日、癸卯、正四位下鴨祐武ヲ從三位ニ敍ス、

〔親長卿記〕三十 傳奏奉書案

正四位下鴨祐武縣主、宜敍從三位、可被宣下給之由、被仰下候也、謹言、

四月廿八日

藏人辨殿

〔親長卿記〕十七 四月廿八日、晴、鴨祐武上階事、○中略奏聞、勅許、

〔鴨氏世譜〕鴨縣主祐武 文明十八年丙午四月廿八日、敍從三位、

○賀茂重則、日野政資、葉室光忠等敍位ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親長卿記〕十七 四月廿八日、晴、○中略重則正四位事奏聞、勅許、

〔歷名土代〕正四位下藤政資 同文明十八年四月廿八日、

同十八四廿八、

○東寺百合文書 廿四十一之五十三 山城

十二月七日書狀

御禮ニ參內

葉室光忠
轉法輪三條實香
高倉永康
中臣祐松
持明院基春

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

きうの御れいにまいる、

四月廿七日、○中略日野ヽ右中辨一

〔歷名土代〕

正四位上藤政資 同文明十八年十一七、十八才、

正四位下藤光忠 同十八六八、

同實香 同十八十二、

從四位下藤永康 同十八三廿六、

中祐松 同十八三廿、

藤基春 同十八三廿六、

〔狩野亨吉氏蒐集文書〕七 ○京都帝國大學所藏文書所收 宣下案條々

文明十八三廿六、

正五位下藤原基春 持明院少將也、

宜敍從四位下、

藏人ヽ

〔實隆公記〕九 三月廿六日、陰雨時々降、○中略基春四品事、今日勅許、上首俊

藤、雅冬、顯基、永康四人也、同日事申請者、重而可有御沙汰云々、

〔親長卿記〕三十傳奏奉書案

永康四品、基春朝臣同日事、可令宣下給之由、被仰下候也、謹言、

五月卅日　　藏人權辨殿

〔歷名土代〕

從四位下藤實統　同十八七廿、改一望、

同雅俊　同十八七廿、

〔親長卿記〕十七　八月十六日、陰、民部卿來、仰云、雅俊（飛鳥井少將四品事）被超越實統（ニテ）朝臣申同日、可爲如何哉、雅俊去年叙正下五位、爲早速歟、

予申云、實統朝臣（三條大納言公治息、正下事、是又去年申了、凡早速歟、已被超越之上者、

雅俊四品早速改不可然、可被下同日之事有何事哉、

〔歷名土代〕

從四位下藤公連　同十八七廿一、

同俊名　同十八七廿三、

正親町三條實統　飛鳥井雅俊　洞院公連　坊城俊名

〔親長卿記〕十七　七月廿三日、晴、夕立俄降、○（略）中大藏卿（經茂、藏人左少辨）來、俊名今日四品賢房補五位侍中云々、

〔後法興院政家記〕十一　七月廿六日、己巳、晴陰、朝間小雨灑、○（略）中去廿三日賢房被職事間、俊名叙四品云々、

〔歷名土代〕

從四位下藤　忠久　同（文明）十八十二、同十二日、刑部卿、

正五位上同　家幸　同十八、、、

同　宣秀　同十八、、、

正五位下中臣祐園　同十八三廿、

中　康顯　同十八四廿八、

藤　家脩　同十八六廿六、

藤　家季　同十八七廿六、

善　敏康　同十八、、、

中臣祐勝　同十八十二十四、

從五位上槻　時元　同十八四廿一、

萬里小路賢房　清閑寺家幸　中御門宣秀　東地井祐園　中原康顯　藪原家脩　同家季　町野敏康　中臣祐勝　小槻時元

中原師親
藤原敦直
廣橋守光
西坊城長胤

東坊城和長
中臣祐澤
大炊御門經名

中　師親　同十八五、、
藤　敦直　同十八六十二、
藤　守光　同十八七十一、
菅　長胤　同十八十一、、

〔狩野亨吉氏蒐集文書〕

（七〇京都帝國大學所藏文書所收）

文明十八六廿八、

菅原長胤

宜賜敍從五位下、去文明十五年三月六日位記

藏人ゝ

〔實隆公記〕

（日歟御免云々、）等伺候、

十　七月十日、癸丑、晴、殘暑甚、及晩參內、敎國、俊量等卿、長胤敍爵事去廿五

〔歷名土代〕

從五位上菅　和長　同十八十一、
中臣祐澤　同十八十一十四、
藤　經名　同十八十二、、

藤原基數
廿露寺敦長

世尊寺行季
東地井祐園

藤原公博
中條政秀
藤原宗數
中臣祐維
同祐智
同延家

同　基數　同十八、、、
從五位下藤　敦長　同十八正廿五、

〔親長卿記〕

十七　正月廿五日、晴陰、○略中愚老孫子（廿露寺敦長）三歲、申敍爵、（付民部卿奏聞、）勅許、畏入候由、參常御所申入了、

〔歷名土代〕

從五位下藤　行季　同十八三、、同四月一侍從、
中臣祐園　同十八三廿、
藤　基春　同十八三廿六、
藤　公博　同十八四一、
藤　政秀（中條）同　同十八七一、左衞門少尉如元、
藤　宗數　同十八八廿三、
中臣祐維　同十八十一十四、
中臣祐智　同十八十二十四、
同　延家　同十八十二十四、

近江守護京極高清部下下坂與一、同注記ヲ襲ヒ、其第ヲ火ク、

下坂秀隆宇治ニ籠居スル與一出頭ス

與一下坂莊ヲ領ス

夜中大道往來ノ事

〔江北記〕文明二年庚寅當國動亂之事、

一文明十七年、秀(下坂)隆者宇治へ引籠候間、弟與一爲名代、御屋(京極高清)形樣へ出頭いさせ候、種々各無事之扱異見ゟより如斯也、

一右申候秀(下坂)雄中郡へ罷越ときゝ注記事者同道を放、多賀兵衞四郎大成(宗直)を令同道、下坂庄代官職相抱、彼の庄競望不相果候間、淺井藏人(直種)、今の備前守(冬政)親事也、彼依合力ゟ、及大儀ゟ、下坂屋敷を責る者也、是ハ文明頃之事也、然る處ゟ、多賀方ゟ如本意可申付由扱共候間、其心地候之處に、そゝまして時宜不相果候間、下坂私宅へ夜討を入燒落し者也、是ハ文明十八年四月廿八日之夜の事也、注記ハ次郎、其後右馬允ゟ成ての時事也、與一事ハ、淺井藏人聞也、然間從三雲御出張候間ハ、丁野ゟ令住宅者也、

二十九日、甲辰周防長門豐前筑前守護大内政弘、分國内禁制五條ヲ定ム、

〔大内殿掟書〕

禁制

一夜中大道往來之事、

先御代御禁制事舊畢、異相不審者等、可加制止也、但旅人事者、糺其宿可

薦僧放下猿引ノ事非職人被官寄宿ノ事路頭夜念佛停止之事巡禮者五日以上逗留スベカラズ

許往來也、

一薦僧、放下、猿引事、可拂當所并近里事、

一非職人、非諸人之被官者、他國仁於當所不可寄宿事、

一路頭夜念佛停止之事、

一巡禮者當所之逗留可爲五箇日也、過五箇日者不可許容事、○也過五箇日壁書ニ據リテ補フ、五字、大内家

右五箇條者、十九日有衆評被相定之上、堅可守此旨之由、所被仰出也、仍下知如件、

文明十八年四月廿九日　　伴田大炊助

富　掃部頭

五月大　乙巳朔　晝

一日、乙巳、御祝、

〔御湯殿上日記〕（○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收）五月一日、あさ御ゆ（湯）ども、御いとひいつものことし、きう上らゐ（略）の御ゆいり、○中よるの御いはゐ（祝）いつものことし、

二日、丙午、幕府、赤松政則ノ、冷泉政爲所領播磨細川莊ニ兵糧米催促ノ使者ヲ入部セシムルヲ停止ス、

〔冷泉系譜〕（細川庄下知狀寫）

冷泉中納言（政爲）家雜掌申播州細川庄事、爲諸役免除之地、守護使不入之處、近日相懸兵粮米讀責云々、甚不可然、所詮向後可被停止使者入部之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八
五月二日

赤松兵部少輔（政則）殿

（松田）數秀
（諏訪）貞通

諸役免除守護使不入地

冷泉中納言家雜掌申播州細川庄事、爲諸役免除之地、守護使不入之處、近日相懸兵粮米讀責云々、甚不可然、向後可被止使者入部之旨、被成奉書畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八五月二日

別所大藏少輔（前治）殿

松田對馬守　數秀
諏訪信濃守　貞通

冷泉中納言家雜掌申播州細川庄事、爲諸役免除之地、守護使不入之處、近日相懸兵粮米讀責云々、甚不可然、向後可被止使者入部之旨、被成奉書畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八五月二日

浦上美作守（前宗）殿

數秀
貞通

冷泉中納言家雜掌申、播州細川庄事、爲諸役免除之地、守護使不入之處、近日

相懸兵粮米譴責云々、甚不可然、向後可被止使者入部之旨、被成奉書畢、可被存知之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八五月二日　　數秀
　　貞通

櫛橋豊後守殿

細川庄冷泉殿御家領幷御寺分事、爲諸役免除之地上者、守護使不入之儀、任先例被停止訖、此旨可被存知者也、執達如件、

文明十八八月八日　　則季（後藤）
　　則伊（櫛橋）

別所大藏少輔殿

細川庄冷泉殿御家領幷御寺分事、爲諸役免除之地上者、守護使不入之儀、任先例被停止訖、此旨可被存知者也、執達如件、

文明十八八月八日　　則季

細川庄冷泉殿御家領幷御寺分等事、爲諸役免除之地上者、守護使不入之儀、任先例被停止旨、去八日奉書令存知者也、仍執達如件、

文明十八八月十二日　　則伊
　　則職（判）

小寺藤兵衛尉（前懸）殿

冷泉殿御雜掌

冷泉殿御家領三木郡細川庄幷御寺分等之事、爲諸役免除之地、可停止其綺旨、去八日被成奉書訖、向後其旨可被存知者也、仍下知如件、

文明十八八月十七日　　則治（判）

佐々木四郎左衛門尉殿

三日、丁未、京都清水寺ノ請ニ依リ、同寺本尊ノ開帳ヲ行ハシム、〔親長卿記〕三十傳奏奉書案

清水寺戸帳事、早令開帳、可遂成風功之由、可令下知給之旨、天氣所候也、仍執

啓如件、

文明十八年五月三日　　左中辨親長(花)

謹上　當寺別當僧正(雅圓)御房

表書也、

謹上　東院僧正御房

清水寺願阿紙ヲ獻ズ

願阿甘露寺親長ニ依リ内々開帳勅許ヲ請フ

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

四月二日、雨ふる、○略

中ろんろしよりきよ水のくもんいをいらそるとて、とりのこ五十まゐ、うちくもりらん、

〔政覺大僧正記〕九

四月廿四日、己亥、

一難波修理亮下向、清水寺開帳事、爲彼寺造畢、勸進沙門十穀申云々、內々以甘露寺申處、勅許無子細歟、然者別當ヨリ取繼可申候條、可然由被仰出候間、只今申候、彼寺別當東院僧正所ニ申遣、則甘露寺エ書狀ヲ遣被申者也、先規等雖稀免勅許之上者、無子細歟之間、被出一行ヲ了、則千疋分東院ヘ折紙ヲ遣、難波沙汰也、

〔大乘院寺社雜事記〕百三

四月廿四日、

一難波新左衞門尉昨日下向、自清水寺申大聖開帳事云々、別當僧正ニ申遣間、勅許可畏入之由、甘露寺方ヘ書狀被出之、明日可上洛云々、避遁事也、爲

本堂造營申入事也、

○清水寺造立事始ノコト、十四年八月十八日ノ條ニ、造營成リテ、本尊ノ遷座供養ヲ行フコト、十六年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

信濃小笠原光康卒ス、子家長嗣グ、

〔越前勝山小笠原家譜〕乾

- 政康　童名土用犬丸、豐松丸、彥五郎、右馬介、治部大輔、大膳大夫、從五位下、信州刺史、
  - 宗康　童名五郎、大膳大夫、從五位下、信州刺史、
    - 光康　童名六郎、遠江守、從五位下、信州刺史、
      - 家長　童名六郎、左衞門佐、從五位下、甲州刺史、
        - 光長　小四郎、刑部少輔、
  - 光康　爲宗康嗣、

光康　應永二十二乙酉年、生于信州伊奈郡松尾館也、以父政康、兄宗康之遺書、領掌惣領職、其書曰、○後揭ノ小笠原文書ニ同ジキニ依リ略ス、

文安四丁卯九月二十四日、天龍寺供養隨兵、

寶德年中

文明十八年五月三日

天龍寺供養隨兵

綸旨

享徳、康正、長祿、寛正之間、依將軍之命、發向關東、令屬新田治部大輔進發越後、退治村上兵部少輔、爲木曾加勢、討捕濃州凶徒、抽戰功勵忠節、義政將軍賜感書、

義政書

同比

義政書

一通

文明十八丙午年五月三日卒、七十二歲、法諱溪堂法建大居士、

三通

九通

〔寛政重修諸家譜〕百八十八 義光流 小笠原 清和源氏

政康

宗康五郎、大膳大夫、信濃守、從五位下、　母は某氏、

光康伊那六郎、遠江守、信濃守、從五位下、

母は某氏、父政康、兄宗康の遺書をもりて、總領職をたもつさとまねき、享德、寛正の比あひさ、慈照院義政乃命により、關東へ發向し、新田治部大輔尚純へ屬しまゐ、越後國にわもむき、村上兵部少輔某、高梨彌太郎某を退治し、又木曾の援兵と称りて、美濃國の凶徒をうちやぶり、戰功抽ぬきんまゐ、忠節をもはげまし、義政より感狀三通を賜ひ、且管領細川勝元、細川政國、畠山政長命狀うけて書を贈まねまよりさねまをへきむを、義政より書狀たまひ、ろりこれら此とにより、細川勝元等よりをくまねところの書、すへまゐ五通あり、又足利成氏退治として、すミやろまで進發し、軍功を勵をゑきむを、義政より書狀贈らゐる、文明十八年五月三日卒ほ、溪堂法建と號す、

家長六郎、左衛門佐、甲斐守、從五位下、　母は某氏、

光長小四郎、刑部少輔、　母は某氏、

有馨寶珠寺、　母は某氏、釋門に入、

〔小笠原文書〕二

こんといろらへこへ候事、目出度候、諸事にいて、いろらの事ハ六郎こまらせ候、あいたろらい候へく候、さうちて當家の事ハ、五郎、六郎兩人ならてハあいたろらい候ましく候、

正透（政康）（花押）

身の事ハ祢んふつ申へく候ハゝ利まて候、ゝやうゟ申候へハとて、よ
きある事、八まん、すゟも御せうらん候へ給候、以上、
ゑんや與五郎こへ候、そせうともの事存候、いつれも身の事ハこゐととて
ももさて候、ひとりゟらへもち候おさまも、こその正月五日こかんしきゐ
して候、そゐおこそこのみ入ゐそ、身のあとお御つき候へく候、けゟやう、そ
の間身ゝおやにて候物めしくす人々ゟゆみやおとり候まて候、かさのこ
とく候ハんまゝに候、いまも身ゝあと御うけとり候ハゝ、ゟたし申へく候、
さやうゟ候ハゝ、いそき御こへ候て、御うけとり候へく候、こやうし、くゟ、ゑ
よゟやう一ふんものこさすゟたし申候へく候、そのうちの事もまつかん
まん候へにて候はゝ、おやまて候物、ずくし候ことくのささおも御付へく
候、ともかくもそのきにてあるへく候、そゐと身とのあゟひの事、いかゟ人
申ともせういんあるましく候へく候、いつかたおいまゟけてなと申まて
もなくて候、謹言、

三月十一日

宗康(花押)

宗康名字國所領一切ヲ譲ル

六郎殿へ

○光康、幕府ヨリ東征ノ兵ヲ催促セラルヽコト、康正元年十一月二十日ノ條ニ、村上兵部少輔、高梨彌太郎ヲ討ツコト、寛正六年六月九日ノ條ニ、信濃島田村八幡宮ヲ修理スルコト、文明九年七月二日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔千曲之眞砂〕七　伊奈城　永享十二年庚申、小笠原信濃守政康在結城戰場、次男大膳大夫宗康従之、○略中又弟六郎光康任遠江守、領伊奈城、又曰、寶徳元年、伊奈光康預信州刺史、○略中又曰、小笠原宗長、貞宗ニ至テ、始テ松尾ノ名ヲ出セリ、小笠原政康ヨリ六郎光康迄居伊奈城ト云ハ、松尾城ノ事也、

伊奈城ニ住ス

四日、戊申　幕府犬追物アリ、

〔親郷日記〕五月四日、戊申、
一於上御所御犬追物あり、白川(伊勢貞孝)殿御參、同兵庫(同貞陸)殿御參、

伊勢貞宗同貞陸等參仕ス

五日、己酉　賀茂競馬、

〔後法興院政家記〕十一　五
文明十八年五月四日　五日
五月五日、己酉、降雨、○略中今日可見物競馬之由、申合

近衛政家雨ニ依リ見物ヲ止

聖門幷實門處、依降雨令停止了、

節供御祝、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　五月三日、○略、中上らぬよりまねゐ

いる、

（頭書）めしくら人御まくらのうもやうぬふく、山くまよりまねゐ色々いつもの

四日、○略、中けさいつものとくくらゐ、御くむりころのとし、上ろさより二百ゐいらきらるしゝ、きんく

ゐん院へつろハさるしゝ、むろまちとのへ御くもさゐ、くゐんしゆ（教秀）寺御つろ

ひまてらゐ、なろさ祢（西坊城）よりまねゐ五十らゐ、としゐちいさねも廿ろひてらゐ、

雨ふる、

五日、あさ御ちろ月らゐ、御ゆめも、上らぬ、新大もけ殿御ゐいり、御きつくゝ

ふもつけられも、とちら御いゐ井あり、○略、中きう上らぬ御ゐいり、新大もけ

殿よりゐきらゐ、

〔實隆公記〕九　五月五日、己酉、雨降、早朝浴蘭湯、梳髮、佳節幸甚々々、午後參

內、依當番也、入夜御祝如例、參候人々源大納言、下官、滋野井前宰相中將、民部

卿、以量朝臣、賢房也、於勾當局有小盃酌、舊院上﨟有被相談之事等、

宮女粽ヲ獻ズ

山國莊粽ヲ獻ズ

義尙ニ藥玉ヲ賜フ

西坊城長胤粽ヲ獻ズ

參內ノ人々

六日庚戌、足利義滿忌辰、義政、鹿苑院ニ詣ラントシ、鴨河洪水ニ依リテ止ム、

〔蔭凉軒日錄〕四月廿五日、天半晴、○略、中齋了謁東府、○略、中來月初六鹿苑相公

御年忌、御齋御成事伺之、必可有御成之由有命、乃傳鹿苑桂宙西堂、○略、中鹿苑

院云、去年當院年忌御成無冷麵云云點檢目錄則有冷麵之由、傳鹿苑院、

廿九日、天降雨、齋了謁東府、○略、中來月六日鹿苑院殿御年忌御成御燒香御齋

書立以獻之、

五月二日、天快晴、○略、中鹿苑侍衣喜首座來、報來六日御成御齋御相伴、又御相

伴給仕慈藤喝食晚來報之、

四日、天降雨、終夜不罷及巳刻、○略、中前剋於常喜愚問東川美丈曰、去年五月六

日鹿苑御成、給仕衆著袷乎著帷乎、答曰、皆著袷、余一人著帷、蓋以愚命如此云

云、愚唉曰、來六日見著袷可也、川亦一唉矣、

五日、天降雨、○略、中午時謁東相府、白鷺明日鹿苑院御成事、○略、中堀川殿御白次、

六日、不參、天降雨、寅刻起、行事幷看經如恒、早旦能倫行者爲白御成案內、謁東

相府、愚者不參、蓋以去年之例也、東方白則輿而往鹿苑院、入昭堂歷覽佛前、眞

鴨河ノ水溢レ五橋危シ

林光院ハ去年ヨリ住持ヲ闕キ其俸ヲ以テ堂舎ノ修理ヲナス

公興本領ト稱シテ違亂ス

鹿苑院瑞智訴狀披露ヲ集證ニ載ス

公興方ノ奉行中澤之綱ニ奉書ヲ加判セズ

集證之綱ニ加判スベキヲ誤

前、同御棧敷、入方丈、又歷覽御后架、御所間、客殿、於御所間與院主(瑞智)雜話、院奉行飯尾加賀(清房)守來奉待御成、院主幷愚老於御所間對面能倫行者、以走之力者報愚云、相公曰、鴨河水溢、不利于濟涉也、五橋亦其勢太危、雖無御成事、若不苦不可有台行、如何之由、可相尋于愚之有命、愚乃傳台命於院主、同諸老、雖無御成、不可苦之返答白之可也、仍遣能才請客頭河濱、傳命於能倫、鳴半齋鐘集大衆、諷經齋會、愚半齋以前歸矣、往方丈幷普廣院伸禮、自鹿苑見贈齋三汁七菜、冷麪、菓子五種也、給仕喝食悉著袷也、

七日、天快晴、〇中略齋了謁東府、白堀川殿言、昨日依大水、無御成、鹿苑院始立大門、〇鹿苑院東大門建立ノコト、十六年四月二十九日ノ條ニ見ユ、以不供台覽、院主不滿也、

〔親鄕日記〕五月六日、庚戌、

一鹿苑院可有御成とて、御時を雖爲用意、依供(洪)水無御成候、

七日、辛亥、義政、鹿苑院末寺林光院ノ訴ニ依リ、菊亭公興ノ、同院領攝津米谷村ヲ違亂スルヲ止メシム、

〔蔭凉軒日錄〕五月四日、天降雨、終夜不罷、及巳刻、〇中略就林光院領攝州米谷菊亭家競望、院主有訴狀渡與、愚曰、來六日可達台覽云云、

七日、天快晴、〇中略齋了謁東府、〇中略次鹿苑院末寺林光院、自去年闕住持、住持所受之俸以之葺佛殿上、又補方丈破處、嚴重之成敗也、仍彼院領攝州米谷之事、鹿苑相公御寄進以來、寺家當知行無相違、然於依御拜賀、〇義尙、右大將拜賀ノコト、十七年八月二十八日ノ條ニ見ユ、自菊亭家號本領及違亂、太無謂、凡諸寺院領皆有本主者也、本主申賜者諸寺家領以之爲引懸必矣、然者寺領一所亦可無之、堅被仰付于院奉行、被成奉書可然云云、鹿苑院一行供台覽、〇中略此兩條謹白之、可命寺奉行之台命有之、〇中略及歸召飯尾肥前守雜掌、米谷事競望停止之奉書事命之、鹿苑院江亦報之、雜掌渡邊源三、〇中略就米谷事披露、鹿苑(瑞智)院主爲禮謝來降、八日、不參、終夜降雨、及巳刻快晴、〇中略晩來詣鹿苑、伸昨日來降禮謝、十四日、不參、早旦天洒雨、自夜半洒之也、〇中略就林光院攝州米谷村事被成奉書、競望方者菊亭家也、故菊亭家與寺家兩所江被成奉書、別奉行飯尾備前守(之綱)也、敵奉行中澤備前守也、加判以中澤備前守書上不可加判形之由白、以故自鹿苑出一行於愚方、加判事爲上意可被仰付之由望被申、其一行到來、以栴首座遣中澤方、

十五日、天洒雨、〇中略鹿苑院一行以栴首座遣中澤備前守宅曰、此狀不及供台

ス　之綱義尚ノ命ニ依リ加判セントト答フ

義政之綱ニ加判セシム

覽、成奉書、加判可然、若曰不可加必此狀、可供台覽云云、○略中中澤備前守返答云、米谷村奉書加判事、雖爲上意、歷西府尊聽可加、爲私不可加由白、就御拜賀之事、諸篇東相公不可有御存知之命有之、然間訴訟之仁可申有御糺明可被仰付之命有之、以故菊亭家致訴訟處不及糺決、被成奉書、不及覺悟之由有返答、以此旨達鹿苑院、

十七日、天洒雨、○略中午後謁東府、○略中林光院領攝州米谷村御奉書加判事、敵奉行中澤備前守不可加判形之由白、其謂者已及訴陳、出目安出支狀、則有御糺決、任理否被成奉書者、其時者可加判形、不及御糺明、以一方向之御沙汰被成奉書、則爲敵奉行加判事不及覺悟云云、中澤所申理之必然也、自寺家所白反之、凡諸寺院領無不有本主由緒然於一所有御許容、而及糺決者、恐無不訴訟、然者以此在所爲其例致訴訟者、寺領一所亦可無之、不能御許容、則何糺決之事有之乎、謹白之、相公曰、然也、加判事堅可被仰付中澤、又諸寺領當知行在所、雖云號本主由緒相望、不可白次之旨、以飯尾新(貞運)左衞門尉可被仰諸奉行、乃召此兩人堅被仰付也、件々以堀川殿白之、及歸以丹公傳鹿苑院、院主相逢歡喜踊躍云云、

廿日、天快晴、○略中鹿苑院主語愚云、米谷村奉書加判事、中澤備前守戰々兢々加判形、相公御成敗嚴之至、珍重珍重、

九日、癸丑、紫野今宮祭、幕府、神馬ヲ同社ニ寄進ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

御物いミらる、

おほし、(ほる)

九日、○略中々ふも御物いミらる、

〔神馬引付〕一　文明十八年

一今宮　一疋栗毛、糟毛、

五七　祭　(伊勢貞陸)兵庫殿御をくり狀、御使古市次郎、

○幕府、神馬ヲ東大寺八幡宮ニ寄進スルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔神馬引付〕一　文明十八年

一東大寺八幡宮　一疋栗毛、

八六　(伊勢貞陸)備中殿御をくり狀、御使燭阿彌、

東ヘ　御師

○伊勢貞宗、神馬ヲ日吉社ニ寄進スルコト、便宜左ニ合敍ス、

伊勢貞宗神馬ヲ日吉社ニ寄進ス

〔親郷日記〕三月九日、乙卯、
一白川殿先年日吉社御宿願、御神馬七疋内一疋（月毛、印雀日緒、）被引進、樹下殿へ以
愚状申遣、

人數

十日、甲寅、尊敦親王御稽古ノ爲メ、連歌御會ヲ行ハセラル、

臨御アラセラル

〔御湯殿上日記〕（庫）○京都御所東山御文記錄甲二十七所收
うふる、
けいことて、御れん歌御ちさあり、御人は源大納言、兵部卿、ミん部卿、頭辨、權
（五辻宗仲）
そけ、庭田の少將、きよくら人、ふんちまひはなり、御ネつく二宮の御方の御
さゝ、宮ゟ御ろさもなる、く御まもハしめより御いてありて、御きゝ申さらり、その御をしめま御句ろすもゐまさ御さゝあり
しほしてちと御さゝあり、
あ、御ねとくまゝなゝ〳〵申さるゝ、千ま万き廿と御めてさし〳〵、御さし
きにて御さろ月ゐいりて、みな〳〵まさふ、
ハるゝ、
十二日、○中略二宮の御ろさ、御寺まて御れんろ御さゝありて、御てん御申ゐ
り、

尊敦親王青蓮院ニテ御連歌ヲ行ハセラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親長卿記〕十七　五月十日、晴、雨時々下、二宮御方有御連歌、頭辨參仕、
○コノ後、尊敦親王、連歌御會ヲ行ハセラルヽコト、便宜左ニ合敍ス、

御學問所ニテ行ハセラルル人數

〔御湯殿上日記〕（庫）○京都御所東山御文記錄甲二十七所收
けいこの御れん歌ありて、御てうしいさするゝ、
〔實隆公記〕十　七月五日、戊申、天晴、○中略午後參內、依當番也、二宮御方御連
歌、於御學問所有此事、兵部卿、滋野井、民部卿、源宰相、新宰相、以量朝臣、賢房、源
富仲、文地丸等祗候、入夜源大納言參候、百韻遲々終其功、
〔御湯殿上日記〕（庫）○京都御所東山御文記錄甲二十七所收
ん歌あり、御てうしいつる、
〔實隆公記〕十　八月十一日、癸未、晴、行水、二宮御方御連歌也、依內々仰參候、及
昏退出、
〔御湯殿上日記〕（庫）○京都御所東山御文記錄甲二十七所收
御れんろあり、

六月十一日、○中略二宮の御ろさ御
よるふる、
七月五日、二宮の御ろさの御きん
ハるゝ、

九月廿三日、○中略二宮の御ろさの

御月次
執筆五辻富仲

〔實隆公記〕十　九月廿三日、乙丑、晴、今日二宮御方御連歌云々、予候其人數、仍不參、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　九月廿六日、廿三日の御れんがよこ〳〵御ちさあり、

十月廿日、二の宮よ御ちさの御月なミの御連歌あり、人數いつものとし、

〔親長卿記〕十七　十月廿日、晴、依召參內、二宮御方御月次（連歌）也、於御學問所在之、源富仲、執筆、有若亡命、

〔實隆公記〕十　十月廿日、壬辰、晴、當番第二請取也、參內之處、二宮御方月次連歌也、於御學問所、有此事、親王御方、源大納言、按察、予、滋野井、民部卿、源宰相、山科宰相、文地丸賢房、源富仲執筆、等也、入夜終百句功、

〔親長卿記〕十七　十二月五日、晴、依召參內、二宮御方御月次連歌也、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　十二月九日、○略ひるハ御まんがう、

ゐい〳〵のおとこさちをうまこう、なかうよ御さかう月なが、二宮の御ろさよりまいらるゝ、

〔實隆公記〕十　十二月九日、庚辰、晴、今日二宮御方御連歌云々、雖有其催不參、

義政集證ニ書セシムル集證ノ病故ヲ以テ辭スルニ依リ景三ニ命ズ

大字ニ改メシム

參、

十二日、丙辰、義政、景三（橫川）ヲシテ、寶鏡寺ノ額字ヲ代書セシム、

〔蔭凉軒日錄〕五月十二日、不參、天快晴、○略中自東府以榮阿有台命、寶鏡寺之額、愚書以可獻之由有命、愚白、中風以外起、雖爲台命、不書之旨謹白之、重而以榮阿曰、然者可命橫川、橫川及昏黑書以來、有小宴、雜話移刻、彥龍亦同途、

十三日、天氣快晴、齋了謁東府、○略中寶鏡寺額之字、橫川所書供台覽、字小也、可改書之命有之、○略中自東府直行小補、寶鏡寺額之字大書而可被進之由命之、

十四日、不參、早旦天洒雨、自夜半洒之也、○略中寶鏡寺額草案、橫川所書以悰子供台覽、如此草案唐帋清書以可進上云云、仍傳台命於小補、

十五日、天洒雨、○略中齋了、橫川携寶鏡寺額之清書來、乃謁東府、彼清書供台覽、自愚方可進寶鏡寺之旨有命、以悰子進之寶鏡寺、堀川殿副狀有之、○略中晚來小橫（迫）來曰、寶鏡寺額供台覽否、台慮如何、愚曰、相契于台慮、乃被遣之寶鏡寺、自愚方以悰子奉贈之、

十八日、不參、天降雨、○略中自養花瑞雲溪來、被報來廿四日寶鏡寺御佛寺煎點、

義政ノ印磨滅シテ別リ難シ

額之御印磨滅而難別如何、愚云、明日謁東府白出御印、印以可進云云、

十三日、丁巳、幕府、攝津守護細川政元ヲシテ、長鹽彌四郎ノ同國江口關務ヲ違亂スルヲ退ケ、飯尾元連ニ之ヲ安堵セシム、

〔飯尾文書〕

飯尾大和入道宗滕申攝州江口關事、早退長鹽彌四郎違亂、沙汰居宗滕代、可被全關務之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八　五月十三日　（朱書）「背面花押アリ」

（松田）數秀　判
（諏）元定　判

細川典厩（政元）代

○政元、彌四郎ノ江口關務ヲ違亂スルヲ退ケ、元連ニ之ヲ安堵セシムルコト、十七年十二月二十三日ノ條ニ見ユ、

備中守護細川勝久ノ被官石河某、同成之ノ被官上野某ト、相國寺玉潤軒領同國河邊ノ代官職ヲ爭フ、是日、幕府、相國寺ノ訴ニ依リ、石河某ノ競望ヲ退ケシム、

〔蔭涼軒日錄〕

五月九日、不參、天快晴、○略中玉潤軒軒主棟季（六棟）材來云、軒領備中國河邊鄉下方事、讚州（細川成之）被官上野肥前守取寺家補任、代官一回勤之、任滿間、去年季（祐給）睦住持之時令再任、石河左京進望代官職、寺家不能許容、然間强入部彼在所、太無謂、已及弓矢、達上聞、守護（細川勝久）幷石河左京進、上野肥前守方江被成下奉書、可爲寺家大幸云云、愚云、賜連署可達台聽云云、

石河某强ヒテ入部シ弓矢ノ沙汰ニ及ブ

十一日、天快晴、○略中齋罷、棟季材持連署來、有小宴、午時謁東府、○略中自玉潤軒所白之連署、將致達台聽袖之、雖然白次皆不參之故、徒歸矣、

十三日、天氣快晴、齋了謁東府、○略中又玉潤軒別奉行以飯尾加賀守書立伺之、同彼軒領備中國河邊鄉下方代官職事、自寺家、任讚州被官上野肥前守、守護被官石河左京進成競望、强入部、剩及合戰之所所可被成御奉書之由、玉潤住持棟季材東堂、普天庵東堂（等明）文淵以連署訴訟、其狀供台覽、命飯尾賀（清房）州可成奉書之命有之、乃召加賀守雜掌木村入道傳台命、奉行御領掌也、愚證狀一通渡之、

養政飯尾清房ヲシテ奉書ヲ出サシム

清水寺成就院願阿寂ス、

〔親長卿記〕　十七　五月二日、晴、參清水寺、次詣願阿上人庵室、所勞之間、爲相訪也、

甘露寺親長願阿ノ病ヲ訪フ

十五日、雨下、○中略清水願阿上人死去云々、

〔大乘院寺社雜事記〕百三　五月十六日、

一清水寺勸進聖十穀去十三日入滅了、別當力者十四日行向彼寺之處、於五條橋上、昨日入滅之由聞付之、自其罷歸了、聖申子細在之之間、相尋之處、如此云々、不便々々、弟子伊勢者在之、可續之歟云々、色々辭退之云々、

〔親長卿記〕十五　文明十六年六月廿七日、晴、今日清水寺遷坐也、○中略、全文ハ十六年六月二十七日ノ條ニ收ム、抑當寺修造事、寺家一向不存知、願阿上人七條時衆也、去年給上人號、以勸進造營也、仍彼上人悉皆申沙汰也、去年上人號事先例、師以予申之、

〔碧山日錄〕三　寬正二年二月十七日、戊子、客曰、願阿役其徒、日々出屍於鴨河之瀆及油路坊之隙地、爲叢塚穸之、且建高顯樹以薦其靈也、○饑疫ニ依リ、人多ク死スルコト、寬正二年是歲ノ條ニ見ユ、余問曰、願阿何許人、且發大慈心、以作此施耶、曰、彼越之中州人也、其家世業漁、蚤覺有殺生之報、出家修道、從入淨社、只一意馳西而已、又見佛宇僧廬之癈圮、則必修之、五條坊之長橋、其斷久矣、往來苦揭厲、遂求信士之大施大建之、雖屬夏潦溢漲、築其中流者、屹然不絕、人皆稱之、今年又化財賑民葬死、其非慈意感發於性情者、誰克有之乎、余曰、此咸菩薩悲願力也、不能孤調

弟子伊勢ノ者

清水寺修造ハ願阿一人ノ勸進上人號ヲ賜フ

越中ノ人殺生ノ報ヲ覺リテ出家スル佛宇ノ廢圮ヲ修復シ五條橋ヲ架ス

筑紫ノ人トノ談ヲ四條橋ヲ架スルノ談ヲ南禪寺佛殿再建ニ百貫文ヲ寄進ス

大德寺住持宗肅御禮ニ參內

自救之至也、可謂願上人名副其實者矣、

〔臥雲日件錄〕二　三月四日（寬正二年カ）、喚智瑞行者來剃髮之次、予問六角堂施行之來由、瑞曰、願阿彌曰于公方、望救餓人、公方出百貫文爲助、就六角堂南大慈院北、造假屋者百二間、初三日、先可施粥、其後菜羹耳、每日八千人之設也、願阿彌築（疑）紫人也、先是架四條橋、去年又施百貫爲南禪再造佛殿之助、如此善利多々、匪啻今施餓人、能成檀波羅蜜者、其名曰願、々波羅蜜亦成就焉、顧不偉乎、

○饑饉ニ依リ、願阿、幕府ニ請ヒテ、廬舍ヲ六角堂ノ南ニ造リ、飢民ヲ救濟スルコト、寬正二年是歲ノ條ニ、清水寺ヲ再興セントシ、其資ヲ諸國ニ募緣スルコト、十一年三月是月ノ條ニ、勸進ノ爲メ九州ニ下ルコト、同年十二月二十七日ノ條ニ、其功ヲ褒セラルヽコト、十四年八月十八日、清水寺造立事始ノ條ニ、同本堂ノ造營成ルコト、十六年六月二十七日ノ條ニ見ユ、

十六日、庚申、〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　五月十六日（ひるよりへる）、○中略大とく寺の（宗憲）さうちうく申さるゝ、御れいとて御あふぎ一本ことさらそんし十帖もちてまゐる

十六日、庚申、大德寺住持宗肅ノ奏請ニ依リ、同寺ニ勅額ヲ賜フ、

花園天皇ノ勅額ハ享徳ノ火ニ災焼失ス

いらるゝ、御さいめんあり、(廣橋雅行)源大納言申さるゝ、

勅額草

外題

〔龍寶山志〕(一編年略紀)　同(文明)十八年丙午、後土御門帝重賜靈光塔額、依妙心(宗派)西浦和尚所奏、初額花園帝宸墨、失于享徳之火、(大徳寺火クルコト、享徳二年八月二日ノ條ニ見ユ、)

〔史料蒐集目錄〕(〇大正十五年京都府)　大徳寺

龍寶山大徳寺什器取調帳の分

一後土御門天皇靈光勅額草　一幅

(外題)後土御門院　西浦和尚　住山小比丘宗粛置

(裏書)今上皇帝宸翰

文明十八年夷則如意珠日

住持小比丘宗粛置之、

〔參考〕

〔龍寶山志〕(二堂殿)　方丈

靈光額　後土御門院宸筆

〔京都府寺志稿〕(四十大徳寺一)　上禪宗

靈堂(桁行二間、梁行二間半、)　五坪

後醍醐天皇ノ勅額ハ應仁ノ兵火ニ罹ル

鹿苑院瑞智諸寺院ニ代リテ義政ニ謝ス

令諸正茂等集證ニ謝ヲ述ブ

景茝禮謝

開山大燈國師ノ塔ナリ、示寂後其遺命ニ依リ、遺骨ヲ火葬シ、靈堂ヲ建テ、雲門菴ト號ス、後醍醐帝宸筆ノ額ヲ賜ヒ、靈光ト云フ、應仁ノ災ニ罹リ、今靈堂前掲グル所ハ後土御門帝ノ賜フ所ナリ、

十七日、(辛酉)義政、幕府奉行人等ヲシテ、寺院領競望ノ輩ヲ退ケシメ、又同訴訟ノ執進ヲ禁ズ、

〔蔭凉軒日錄〕　五月十八日、不參、天降雨、(〇中略)諸寺院領競望輩事、不可有御許容、萬一雖云致訴訟、一切不可自次之由、可命諸奉行之旨、昨日自東山殿被仰付飯尾大和入道(元連)云云、吾宗榮在斯時也、蓋昨日以愚所白如此台命有之、彌可奉祈壽考萬年者也、以此旨、乃奉告鹿苑院、院歡喜踊躍云云、

廿日、天快晴、(〇中略)齋了謁東府、諸寺院領嚴重被仰付之御禮、鹿苑院(瑞智)主代諸寺院被參、無御對面、

六月三日、不參、天快晴、(〇中略)東福當住月建(令諫)和尚、建仁當住秋柏(正茂)和尚來、伸相公諸寺院領競望仁不可有御許容由、被仰付諸奉行嚴重之御成敗珍重之謝、

廿一日、不參、天快晴、(〇中略)南禪住蘭坡(景茝)和尚來、伸諸寺院領競望不可有御許容之謝、

實隆點ヲ加ヘテ義尚ニ返ス

義尚使ヲ以テ實隆ニ謝ス

奉加帳ニ加判ノ人々

義尚、三條西實隆ヲシテ、自作ノ俳諧歌二十首ニ點ヲ加ヘシム、

〔實隆公記〕九　五月十七日、辛酉、雨降、○中略及晩俳諧二十首和歌、可進愚點之由、自室町殿被仰之、則付墨進上、御使佐介也、

十八日、壬戌、雨降、午後霽、○中略佐介來、昨夜點御詠等有合點、殊可喜思食□、夜前爲御使可來之處、路次難治之間、今朝來之由示之、懇謝遣□了、

十八日、壬戌、大和當麻福滿寺造營ニ就キ、太刀ヲ御寄進アラセラル、尋デ、廷臣モ奉加ス、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　五月十八日、山とのくまのいりのうちふくまん寺のさうゐのさめよ、御ねうの申とて、ふもふる、あらハしとり御申まて、御あちろひていさせらるゝ、

〔十輪院内府記〕中　五月廿二日、和州福滿寺勸進聖來、對面、奉加帳加判、禁裏、伏見殿、二條前殿（政家）（西園寺實遠）、近衞前殿、左府（尚通）、愚老也、仍殘右府分加判、抑准后（義政）、竹園上下或有所存歟、然而式部卿親王之下二條加判了、

廿三日、○中略勸進聖來、一紙半錢奉加勸之、付奉加帳了、

是ヨリ先、興福寺一乘院教玄、東北院任圓ト山城西院莊ヲ爭フ、是日、大乘院尋尊、之ヲ仲裁ス、

義尚任圓ニ吉野西院ヲ別ヲ與ヘ莊ヲ押フ

任圓上洛

〔大乘院寺社雜事記〕九五　十　文明十七年二月十九日、

一吉野月別事、東北院知行分、自京都舊冬奉書到來、於學侶及種々沙汰了、未一決、依之一乘院領西院庄事、自公方被押之云々、事實事歟、凡以外次第也、

〔大乘院寺社雜事記〕九六　十　文明十七年三月十九日、

一東北院僧正任圓三四日前上洛云々、一乘院與吉田（兼俱）月別相論事出來、伺上意云々、兩方所存以外相替云々、御門徒中迷惑也、凡可爲如何哉云々、

廿日、

一一乘（教玄）院殿上洛、

教玄上洛

任圓西院莊ヲ押領ス

〔大乘院寺社雜事記〕九七　十　文明十七年四月一日、

一去月廿日以來一乘院殿在京、西院庄事自東北院僧正押領之故也云々、近日可有御下向歟云々、

十八日、

一奏舜相語、一乘院與東北院間事、予無一途儀、以隆乘寺主被仰高山駿州、御榼等被下之、畏入、則又柳等持參御禮申入之、公方向事ハ爲自分難成旨返

事申之云々、御在京也、

〔政覺大僧正記〕八　文明十七年四月廿一日、辛丑、

一一乘院未在京云々、西井御公事邊歟、東北院ト御相論也、以外東北院惡行也、

〔大乘院寺社雜事記〕九七十　文明十七年五月三日、夕雨下、

一成就院ニ行向、東門院被參申、一乘院與東北院事色々雜說在之、

廿九日、土用、

一風呂在之、東院僧正被參申、中飯以下寺務被仰付之、色々被賞了、畏入云々、

東門院慶英律師參上、

東院相語、一乘院殿與東北院間事、色々東北院方事取申方有之、雖然一切不可有御承引云々、門跡御道理也、於東北院者一紙證文不可有之、一向無理之申沙汰、珍事々々、門跡事ハ御手ニ入分悉皆二百計有之、本々ハ八百計有之、其後六百文、近來ハ二百計事也、不可御事闕、自然京都以下內外惣別事ハ二百計之內御沙汰也、

西院庄事、自東北院押領、門跡御分ハ三十計也、內侍原分本八百計者也、龍田分ハ修南院知行東院知行分有之、惣而大儀之御領也、只今自東北院可知行之由、雖申之不可得事也云々、

任圓ノ申分ハ非理ナリ

西院莊任圓得分

六月廿六日、

一一乘院御公事、以東院慈恩院、自東北院歎申入云々、門主一切無承引之由傳聞、尤事也、

任圓和議ヲ申入ルカ敎玄聽カズ

〔大乘院寺社雜事記〕九九十　文明十七年七月一日、

一一乘院與東北院吉野別當得分相論事出來、去三月比ヨリ、一乘院御在京、于今無爲之儀無之、千万東北院惡行也、訓英得業內々申沙汰故、東北院如此致其沙汰云々、凡希代不思儀々々々、

十九日、

一訓英得業來、泰俊事內々伺申、泰弘所存之趣巨細仰聞之了、其次寺訴事條々尋仰之、大略不可成事也、此所々御寄進事ハ、非御下向之時、一亂中ニ等持寺事、西方ニ在之寺之間、于時一疋之御寄進也云々、可及大訴之由、及其沙汰云々、此條當時之事候間、不可然旨、巨細仰聞之了、不限此事、大儀子細共在之、閣何等、限此一事大訴、且又不可然事也、

任圓ノ非分ハ訓英ノ申沙汰

文明十八年五月十八日

晦日、雨下、

一東北院自京都下向云々、六月十八日上洛了、寺訴事ハ一切不可成旨必定々々也云々、東院慈恩院ハ未在京、不可思儀事也、閣東北院、爲兩人可申沙汰條且如何、

任圓京都ヨリ歸ル

八月廿二日、

一一乘院殿昨日御下向也、今日奏舜御禮ニ參申、自京都御事傳者共給之、則御禮狀進之、

一東北院與一乘院殿御公事、丙々自東北院申古市(澁垂)云々、聞付之間、東北院非儀子細共、巨細宗觀方へ仰遣之、古市ニ可入魂旨仰了、仲人可申事不可然事也、此門跡與東北院間事、于今古市無申旨、剩他門事指出可縺之事不可然事也、就德失一方へ可付事ハ一段也、仲人ハ不可然、

任圓古市澁垂ニ告グ

仲人ヲ依賴スベカラズ

廿三日、

一昨日一乘院門徒共被召之、東北院惡行子細被仰付之、無力、就院家可被仰御所存也、御房人共被仰付子細在之、御房中涯分可致奉公、自然又寺門集會有之者、得其意可加評定云々、定日ハ重而被仰出之之由、各仰畏入旨與

尋尊一乘院門徒ニ非ズ

任圓ノ分ヲ說ク

憲律師以下申之畢、門跡御沙汰尤之次第也、不及力事也、寺門滅亡之基歟、

教玄ハ任圓ノ吉野月別ヲ停メントシ任圓ハ之ヲ得ントス

廿六日、

一良懃相語云々、一乘院殿與東北院間事、宗藝五師以下色々取合申、兩方儀一切不事行云々、一乘院御意ハ吉野月別事、一切不可有御許可云々、東北院ハ是非ニ可給云々、西院庄事不可成綺之由仰之、東北院ハ可放之由雖可申入、上野之五郎不可退上者、是又不可叶之由、東北院申切、肝要東北院之所存ハ西院も可給、吉野月別も可被下之由申分也、仍宗藝以下不及力云々、越智(澁垂)ニ罷出可取合申之由、自宗藝方申遣云々、返事此事ハ公儀ニ及御沙汰事也、私仲人外聞不可然之由申切、古市ハ兩方儀申通上者、人一人も不可出之之由申云々、御房人等被召仰畏入之由申云々、

任圓吉野月別ト西院庄ヲ得ントス

越智家榮モ仲人ヲ辭ス

廿七日、

一東北院自昨日日中以後院中城構ニ用意、大門外出(垂)帳以下見事也云々、令招一乘院方風情希代事也、魔障也、

東北院城構用意

廿九日、

一昌懷得業申給、一乘院東北院間事、古市幷西方申子細在之間、仲人事計略

澁垂古市

胤榮ト仲介ニ勤メ

一乘院門徒等長講堂ニ神水集會

ントス

之、先東北院へ昨日申遣之云々、不可成歟否事ハ不存云々、世上以下ニ付テ、此御公事難義之由を面ニ立之云々、今案佐川申合歟、

一在京之兩院、朔日可有下向、自學侶各五百疋上之云々、下粮物也云々、

卅日、

一一乘院殿ニ進書狀、公事自何方雖申入、於于今者、聊も不可有許要之由云々、尤御儀也、

一一乘院御坊中連署事被仰出云々、不得其意比興之次第也、更以御坊中之不可詑所存事也、

九月三日、風大雨下、

一一乘院殿御公事、公方入御耳之間、近日可御奉書出也、松殿可持參旨申下、廿九日書狀也、珍重々々、

五日、

一一昨日一乘院門徒神水集會在之、於長講堂也、東北院之間事也、

〔大乘院日記目錄〕四　文明十七年九月九日、東院僧正、慈恩院律師自京都下向、去六月十八日上洛、御八講次寺訴故也、東北院僧正ハ七月晦日寺訴事、

任圓京都ヨリ歸ル

不可成之由申下向了、其後一乘院殿與確執也、

〔大乘院寺社雜事記〕九十九　文明十七年九月十日、

一寬乘得業來、色々物語、東北院與御公事、近所之間迷惑不可過之云々、尤事也、令與成者、可成火（大カ）事條勿論也、

十二日、

一松殿申下、一乘院問事、近日御奉書可到來云々、可持參旨申、巨細又一乘院殿ニ內々意見申了、

廿二日、

一一乘院問事、先日學侶集會大略訓英得業申破、其故ハ吉野德分も、西院も、共以東北院へ可付之之由訓英申、惣衆ハ然者折中儀不可成、只一向ニ可付理於東北院之由、各不能覺悟トテ、學侶折中儀ハ、各令計略了云々、訓英申所尤也、惣學侶申所又尤也、其故ハ訓英與一乘院ハ、就佐保田事、第一公事在之、又東北院事、悉皆惡行方之奉行也、仍今評定尤也、惣學侶ハ、此事與成爲寺社惣別無勿躰、三之物ヲ一も東北院申付、自他無爲儀、爲寺門外聞實儀不可然之間、各無爲計略可沙汰處、如訓英評定者、時刻到來とて止之

訓英吉野月別ト西院莊トヲ任圓ニ付センストス

學侶ハ事ノ興成ヲ三分ノ憂ヒヲ任圓ニ付センストス

了、此條又尤也、

廿六日、

一訓英得業來、東北院迷惑之子細相語之、巨細又相談了、就中君殿庄事、不得其意旨述之了、

〔大乘院寺社雜事記〕 百 文明十七年十一月四日、

一一乘院與東北院公事、自室町殿、色々ニ東山殿ニ取口申之處中、於南都御落居之由、自寺門以事書申入之間、云東山殿、云室町殿、以外御腹立、於于今者、被失御面目之間、何もかも不可入、西院庄事ハ上野之五郎ニ可取納之由、自室町殿被仰遣之間、令申沙汰、自室町殿、東山殿へ取申され了、如此無爲上者、廣澤方(曾我)紙遣之間、令申沙汰、自室町殿、東山殿へ取申され了、如此無爲上者、廣澤方二百貫文事ハ、何よも可給之由申之、率爾之儀以外之由、松殿相語之云々、此方取合ハ、慈恩院律師之所行也、可如何沙汰候哉、今日北少路(小)ト良禪ト令上洛云々、

七日、

一自一乘院殿御書在之、東北院方御公事、此間執□申方雖有之不事行歟、近日可有一途也、必定可破云々、

十二月五日、

一一乘院殿御公事、於于今者珍事次第、近日春圓大相語旨聞之、上野五郎西院庄ニ課稅ヲ催促ス

院事、在々所々嚴密催促、以外次第也云々、

〔大乘院寺社雜事記〕 百二 二月一日、

一東北院僧正社參云々、一乘院殿與公事、凡珍事々々、

三月十一日、

一自十五日、於東北院、可有幽贊談義也、自學侶申故僧正爲讀師云々、寺門祈禱之由云々、學侶之內私(曲)典者共申沙汰、更以非寺門祈禱也、東北院與一乘院殿公事有之、內々與成之時、如此及談儀之沙汰、去年因明談儀も此儀也、今度一乘院殿奉公之修學者共、可丁聞用意內談有之云々、

任圓春日社參詣

廿八日、

一昌懷律師方より一乘院殿東北院間事、巨細申給之事在之、可思案之、

一一吉野月別事、東北院書狀事、

一一西院庄無爲之計略、東北院令上洛可申沙汰事、

〔大乘院寺社雜事記〕 百三

四月三日、

一一乘院殿東北院公事、巨細仰昌懷方返事了、

五月朔日、

一傳聞、昨朝自一乘院可有沙汰、東北院支度之處、大雨下之間俄ニ延引、然則又東北院令存知之間、致用心云々、御勢共自方々寄來、自道歸了、不及是非之御沙汰之間、人以不知之、興憲律師、營尊律師等各令祗候云々、凡一寺之大篇也、可成如何哉、珍事且不可過之、東院僧正同心之者也、當時ハ一寺之棟梁四天也、東院僧正、興憲律師、營尊律師也、一寺各此門徒共也、然而此四人一方主ハ東北院僧正惡行之帳(狀)本也、

一方ハ門跡方東院僧正、興憲營尊也、天魔之所爲、不思儀々々々、又下惡行ニハ、東北院方訓英擬講、慶英律師、昌懷律師等也、

門跡方尊藝律師、堯藝擬講、兄弟、

可參輩ニハ、

東北院方佐川一門、一乘院御恩足也、然而一向東北院方、

門跡方木津執行、同一座、悉以可致奉公云々、椿井之越前公懷祐、堯藝之弟也、越

尋尊教玄ヲ訪フ

任圓ニ吉野月別ハ今後附セズ

尋尊西院莊ヲ任圓ニ附スルニ教玄カ附スルカ決シ爭ヲ鑛メントス

昇寺一門、高山一門、秋篠也、近日沒落衆也、

十四日、雨下、

一召良勳、一乘院殿ニ進書狀了、昌懷、慶英等申合、越智子細必定之故也、

十六日、

一一乘院殿返事到來、

十八日、雨下、

一行向一乘院殿、御共清圓、泰弘、力者一兩人、御童子一兩人、內々儀板輿也、各小衣也、東北院與間事、此內內々申合之、尙々不事行之間、色々申宥、其子細ハ、

一吉野別當得分之內、此間被下東北院分、爲院家不可被下之由仰之間、室(東山)町殿申入及御口入さ、此事自今以後ハ、東北院不可成望之由出狀事、

一依此事、自公方西院庄事、被下東北院了、代官上野玄番允(兼十同ジ)自去年致知行了、自東北院、申入公方、可退玄番允事、如元一乘院殿可有御知行間事、今度自東北院、以喜多院、令申德大寺姬君歟則喜多院令上洛、可申沙汰事、此兩條爲無爲之時ハ、一圓門跡御理運被成下上者、此趣爲當門跡可令

計略之間、物忩之儀、先以御延引、可悦入之由申之了、以尊藝律師、隆乗寺主也、予西御所ニ在、門主御座常御所、

御返事兩條分不足也、此上ニ西御塔（三十石供、六）可被召放之事、侍法師河内備中公兩人住屋可有破所事、此分無子細者、今月中物忩沙汰可有御故實云々、予返事何も可計略得其意、然者御延引必定云々、喜入之由申了、慶英律師召具之間、此子細仰合畏入旨御請申、其後一獻有之、歸禪定院了、

此仰ハ不可成事也、其故ハ落居之極位ハ、自公方被思召開、西院事被返付之上者、公方御成敗以後、又此上ニ是非不可然事也、此方計公事ハ、如今事可被仰も無子細歟、公方御成敗以後ハ、不可得事也、先以承事間、可計略之由申了、下地ハ兩條無爲之上之御所望也、至成無爲付者、枝未沙汰不入者也、

十九日、夜雨下、

一權別當法印光臨、昨日儀恐悦旨、一乘院殿内々御使之由云々、御念比承悦存了、殊更權官方恐入之由仰了、

任圓教玄之ヲ不足トス

廿日、今曉雨下、

一昨日於了弘五師之所會合、東北院へ色々申合、會合人數慶英、昌懷、隆乗寺主、光秀以下西院下司小泉可召下云々、河内公色々申子細在之、

廿一日、

一一乘院殿御公事、巨細仰遣喜多院、得其意云々、

廿三日、雨下、

一一乘院殿より内々御催促云々、則昌懷方ニ申遣、古市ニ巨細以光秀仰畏入云々、

廿六日、小雨下、

一〇中略一乘院殿東北院御公事、寺門大儀之間、自當門跡、御折中ハさ樣之儀御取亂候、重而自是申之由、爲奉行申返事了、

一泰弘相語、東北院内者共、門跡より御折中之間、先以畏入、中々上下悦無是非云々、

尋尊仲裁センコトス

任圓モ承諾ス

六月十七日、夕立、

一一乘院公事、岸田參申言上云々、申狀可有御延引、西院庄事ハ細川ニ申合、

可達御所存云々、吉野事ハ自元無相違其外ハ又何事可有云々、

廿日、

一一乘院殿間事、岸田申請、大略無爲ニ成下、吉野月別越智方へ一ヶ年分可給之云々、

廿九日、

一一乘院御公事當月中事申上之、然而今計略之處中也、今且可得御意旨、以慶英律師泰弘申入之者也、

〔大乘院寺社雜事記〕百四　八月十八日、雨下、

一一乘院殿音信、昨日御下向云々、東山殿御對面也、公事每事無爲云々、

廿一日、

一西院庄事、上野玄番允一乘院殿御使追立之、仍喜多院僧都未在京也、珍事々々、當所務可知行用歟、

廿二日、

一自一乘院殿御文到來、西院事公方奉書、名主中ヱ一通、十六日、同上野玄番允方へ一通、同細川右京兆方へ一通、則廿日細川遵行玄番方へ一通、廿日名主中へ一通、

西院非ハ教玄ニ屬ス

廿五日、

一一乘院殿御渡也、樻三荷、折二合被持之、今度御公事無爲御禮也云々、御共內侍原辨、良勳、春源也、御湯漬（濟カ）一獻等進之、

廿七日、

一於一乘院殿住侶濟々被召之、一獻給之云々、今度御公事間事無爲故也、

〔政覺大僧正記〕九　五月十八日、壬戌、

一一乘院東北院ト御公事邊事、爲御中人大御所、一乘院渡、慶英律師、尊藝律師參向、御共衆清圓寺主、泰弘寺主、光秀內々儀御板輿也、今月中事被申延云々、兩方取合之儀者越智、昌懷律師、了弘律師以下沙汰之、

六月十七日、辛卯、

一岸田罷上、一乘院御公事邊事也、

〔政覺大僧正記〕十　八月十三日、乙酉、

一一乘院御公事邊無爲之間、今日御上洛云々、

十八日、庚寅、

一一乘院昨日御下向云々、東山殿御對面、御奉書以下成下、御公事邊悉以無

教玄尋尊ニ仲人ノ勞ヲ謝ス

教玄上洛ス

義政教玄ニ面シ奉書ヲ出ス

爲云々、當門主等仲人隨一也、事外之悦喜之由、彼自門跡御書アリ、

仲人ノ禮

廿五日、丁酉、

一一乘院渡御、今度御公事邊御仲人ノ禮也、仍御樋三荷、折二合被持者也、御湯漬、其後舟ニテ遊覽、其後三獻被進之、內侍原辨、良勳、春源御共也、東門院參、

教玄近衞政家ヲ訪フ

〔大乘院日記目錄〕四　八月廿五日、一乘院殿入御、今度御公事無爲御悦云々、

〔後法興院政家記〕十　文明十七年閏三月十七日、戊辰、晴、一乘院被來、此間對東北院有公事篇、爲談合所被來也、

六月廿六日、乙巳、晴、東院僧正、慈恩院得業等來、就一乘院公事篇、有申子細、

廿七日、丙午、晴、一乘院與東北院公事篇儀、東院慈恩院等依有申子細、早旦向一乘院宿坊（關白亭）、種々雖令口入、無承諾之儀、被相語趣、聊又有其謂歟、則歸宅、

八月廿日、戊戌、夜來降雨、昨今京都靜謐也、晚景一乘院被來、有一盞事、明日俄南都へ下向云々、與東北院相論事、可及大儀云々、

〔後法興院政家記〕十一　八月十三日、乙酉、晴陰、去曉雷雨、晚景又雨下、〇中略晚景一乘院被參東山殿、有對面云々、西院庄如元被返付之由、被成下知了、

公事落居、禮謝ノ爲メ教玄上洛ス

上野玄蕃頭西院莊ヲ教玄ニ渡付ス

十七日、己丑、陰、時々雨下風吹、一乘院被下向南都、

九月十三日、乙卯、陰、自巳刻雨下、〇中略及晚北少路、隆乘上座來、西院庄事、昨日上野玄蕃頭去渡地下間、珍重之由申之、明日下向南都云々、

〔宣秀五位藏人御教書案〕

十九日、癸亥、近江極樂寺ヲ御祈願寺ト爲ス、

當寺爲御祈願寺、可被抽寶祚延長□懇祈之由、天氣所候也、仍執達如件、

文明十八年五月十九日　　權右少辨判

極樂寺住持上人御房

三福寺末寺

三福寺御禮物獻上

以源（庭田雅行）大納言被仰下三福寺末寺江州大森極樂寺也、五十疋、茶十袋持來、

〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

五月廿二日（よるもせふく）〇略中三ふく寺より、こくらく寺の御きくもんをよのちよくさいをしくささるゝ御ぢ廿とて、御

戀五十首續歌

あふき、こゐろさんしらん、にほさより文そひてらん、

二十二日、丙寅、水無瀨宮法樂和歌御會、

〈御湯殿上日記〉○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　五月廿二日（よるうせふく、）みなせとのゝ御ネうらくは、戀のおんさいまて五十しゆの御つきうさあり、ろをてより御ゐいていてゝゝふろさある、

〈後法興院政家記〉十一　五月廿日、甲子、朝間小雨洒、○中略自禁裏被下御短尺二首、乍見隱戀、無相語戀、水無瀨御法樂云々、來廿二日被仰下可詠進之由、

廿二日、丙寅、陰、入夜雨下、二首御短尺令詠進之、

廿六日、庚午、陰、風吹、時々雨灑、水無瀨戀五十首和歌申出之令拜見、於御短尺者被奉納云々、寫本也、

〈實隆公記〉九　五月十九日、癸亥、雨降、午後晴、○中略晝間有召之間參內、水無瀨御法樂戀五十首大納言入道題、題言、御人數等被定之、予支配之、事了於常御所庇傾一盞、欲退出之處、細川屏風平家給扇流、可一見之由、被仰之、於黑戶見之、有其興、小時退出、

廿一日、乙丑、入夜雨降、○中略抑冷泉中納言入來、明日公宴兩題歌等相語、

廿二日、丙寅、晴、○中略及黃昏被下勅書、今日水無瀨御奉納一座寄書、可沙汰進上之由、被仰下□御短冊料帋等賜之、畏而奉之由申入了、

廿三日、丁卯、霽、晚夕立雷鳴、雨脚及夜、○中略昨日寄書今日進上之、

〈柏玉集〉下　留形見戀　文明十八五廿二水無瀨殿御法樂、飛鳥井大納言入道合點、

形見ともまた此ふちりをとゝめすハ猶うき事のねをやそへまし

〈常德院集〉（五月）廿二日、公宴水無瀨殿法樂五十首、乍隨不逢戀

うねちきりむそひもやらぬあけまねのとくる氣色ハいつて見えゝん

戀自我下人

山ちりのなけき此程をれもふゆは宿此々ふりを立そふる物我

右題十九日賜之、廿一日詠進之、御一座之樣戀難題五十首也、作者廿二人各二首詠之云々、

〈爲廣詠草〉（五月）廿二日、水無瀨御法樂とて、內裏よりめされし二首、偽教在所戀、

たのめしハ跡なき雲の山風も松をやとりのならひまらもや

戀學問妨

うね中ま數そふ文乃色かへて學ふる道ま心うめむや

近衛政家詠進ハ水無瀨宮ニ納メラル

三條西實隆等ニ細川屏風ヲ拜見セシメラル

實隆ニ一塵寄書ヲ沙汰セシメラル

勝仁親王御歌

作者二十二人

冷泉爲廣詠進

義尙詠進

〈續本朝通鑑〉百七十四　後土御門天皇五　五月丙寅廿二、勅歌人二十二輩、詠五十首、納於水無瀬社、

〔水無瀬御影堂奉納五十首和歌〕

奉納五十首和歌御製　不知名戀

勝仁親王

いひ出むあれとやいはん身乃不とおうきをまるより忍ふおもひを

飛鳥井雅親　榮雅　祕知音戀

わろまのふことをハいうしゝ祢うそてん紘をさり不との友ハあまとも

道永法親王　道永　時々聞戀

おり〳〵ハ軒たの荻乃をとま北さぬおもろけをさそふ秋ろせ

近衞政家　政家　乍見隱戀

ろひまみをせしともまらていゐさらに世をうつせさ乃身をやろへゝん

邦高親王　邦高　見被疎戀

うしやさゝわろさくち木とみえしよりろ夢しこと葉もられそしめけん

義尚　義尚　乍隨不逢戀

西園寺實遠　實遠　不遇戀

うきちきりむそひもやらぬ總角のとくるゝしきハいろてみえまん

轉法輪三條冬子　舊院上臈　憑深言戀

おとのむをさハりまなしてわろちきりあさちろ原ハみちそまえぬる

堯胤法親王　堯胤　疑行末戀

いとゝ猶おゝろひろまてわそまし止ひし椎柴たのゐさらめや

大炊御門信量　信量　不憚人目戀

みなを川ふろきちきりもおのまゝよありてゆくへき世とハたのまそ

德大寺實淳　實淳　不知身程戀

せろしさゝそてゆく水乃あれをもきめてよそめまことハりやきん

准后尊應　尊應　過門不入戀

うき身そといとハるゝをもおらすけの祢さくや人まさされそめまん

中院通秀　通秀　見家思出戀

とはゝこそまてともいためわろ門のまへわさりするまゝのさなてし

すきろてまさちもとまらしあまをつる宿のふちなころゝらさりせそ

文明十八年五月二十二日

小倉季熙　觸事思出戀
冷泉爲廣　蓬生の露をわ家しもさく藤ややとのこすゑまでへなりなん　季熙
勸修寺教秀　偽教在所戀
たのめしハあとなきくもの山ろせを松をやとりのならひまらすや　爲廣
甘露寺親長　見偽書慰戀
いつハりとおもひもわらてまもしさゝ心とけゑし人の玉つさ　教秀
冷泉政爲　送書待戀
ふみゝてももしうさろハゝまのくれおきそのうけもし又そあやうき　親長
四辻季經　返迎車戀
いさつらまめくるハうしやをくるまのくるまもをそくなにう待なん　政爲
滋野井教國　度々延約戀
まのくれとたのむるさにもくるしきまたいつハりの日うまてとや　季經
勾當内侍　隔物談戀
うちなけく人をそれうと心あてまいひよるネともうきへとて哉　勾當内侍
　祈神不逢戀
にねまうくちきまおき身の祓きことをさこそをろに神なきゝけめ　教國
三條西實隆　詣古寺祈戀
後の世まてをならふるちきりをもろをのミさけのうねていのらん　實隆
姉小路基綱　迎不遂戀
袖の色も人もまとなるわまもうらうまゆくのへまな枝やまネまん　基綱
飛鳥井雅俊　隔一夜逢戀
玉くしけふさなをハあけぬるにゆきてうらみんと思ひし物を（首略ス、）　雅俊

文明十八年五月廿二日

御製　二首　親王御方
式部卿宮　二首　大樹
仁和寺宮　二首　加持井宮
近衞前關白　二首　天台座主
舊院上﨟局　二首　勾當内侍
西園寺〻〻　二首　大炊御門〻〻

文明十八年五月二十二日

宗祇住吉社法樂和歌

德大寺〻　二首
勸修寺　二首
飛鳥井〻入道二首
下冷泉〻　二首
三條〻　二首
小倉〻　二首
雅俊　二首

飛鳥井雅康

〇諸家法樂和歌及ビ同連歌ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔爲廣詠草〕（正月）十日、宗祇僧住吉法樂とて、二樂（飛鳥井雅康）軒方より、殘雪

住吉や浦ハあれさる春風ハ霞なミこそ松の一むら

還不逢戀

今はうのかさミ此月もかたりなり涙や人の心なるらん

五月十六日、住吉法樂とて、

住のえや霞もあへぬ松風ハ波よりなひく雪乃一むら

二條（持通）殿より春日法樂とて、早苗

二條持通春日社法樂和歌

中院〻　二首
甘露寺〻　二首
滋野井〻　二首
四辻〻　二首
上冷泉〻　二首
姉小路〻　二首

善法寺亨清法樂和歌

打むはしゝまつの田歌乃ふし立や先とり分る早苗成らん

寄風戀

吹しおは野分こゝらしそれよりもむなしき物よいとふ心は

柚川筏

宮つくりいやおれなミ忩くらしくさす筏の早瀨ゆくのを

〔親長卿記〕十七　正月十四日、朝晴、入夜雨下、〇中略詣亨清法印許、毎年法樂也、五十首（兼題、有披講、予讀師、召講師、良世、發聲、雅俊、雅俊歌之時予發聲、次有三獻、及大飲及晚歸畢、今日送乘與之、

近衞政家夢想法樂連歌（近衞房嗣）房嗣ノ命ニ依ル

〔後法興院政家記〕十一　三月十五日、辛酉陰、自午刻雨下、有法樂連歌、夢想、自禪閤（近衞房嗣）樣被仰付、

古方丈三十三回忌燒香

廿三日、己巳晴、有法樂連歌、自禪閤樣被仰付、

六月十六日、庚寅晴、有法樂連歌、自石藏殿被仰付了、

義政、京都寶鏡寺ニ詣ル、

〔蔭凉軒日錄〕五月廿二日、不參、天不快晴、〇略中午後東相公御成寶鏡寺、蓋來廿四日古方丈三十三年忌也、預爲御燒香御成、可有御一獻云云、相公御伴衆

畠山中務少輔殿、細川治部少輔(政誠)殿、一色兵部少輔(政具)殿、山名小次郎(豊重)殿、伊勢因幡(貞誠)守殿、周阿彌、

廿三日、天氣朦朧、相公自寶鏡寺還御之時刻未明開城頃云云、

二十四日、戊辰、御不豫、

〔實隆公記〕九 五月廿四日、戊辰、雨降、禁裏左御足大指御蚊觸出現云々、青侍依召進上之、指而不御苦之由申之、

幕府遣明使、肥前奈留浦ニ著ス、是日、義政、使節永幷(屋脱厦)ヲ遣シテ、其歸京ヲ促ス、尋デ、遣明使上洛ス、

〔蔭凉軒日錄〕文明十七年十二月十九日、○略 中 渡唐兩居座之注進狀到來、廿日、○略 中 渡唐衆注進狀到來、飯尾大和(元連)方披露、以後愚亦可令披露之由白之、廿二日、不參、渡唐兩居坐注進狀自栖老軒來、可供台覽否之事、以栴子相尋飯尾大和、則去廿日致披露、但遣唐船無爲著岸于日本地之由白之、自餘之事未及披露之由白之、齋罷以棕子彼注進狀遣汲古(伊勢貞宗)、可披露否之事相尋于汲古、廿四日、○略 中 自兩居座嚴西堂、松(光松)首座方注進狀到來、無爲歸朝、停舟於肥前奈留浦、雖然正使子璞(周璠)和尙自去五月頃不例、同七月朔、於寧波府遷化、御物等事

遣明船ノ歸路ハ南海ト瀨戶內ノ二アリ

遣明使注進狀到來

御足指御蚊觸

翌日未明歸還

伴ノ人々

正使周璋寧波ニテ寂ス

者不可有相違之由白之、定飯尾大和可令披露云云、○略 中 愚竊話堀川殿曰、歸朝舟先規自南海路歸洛、然者來年四五月頃可令歸洛、自中國海路推舟、來正月末頃可令歸洛之由、注進僧申之、愚爲不然也、今自中國歸洛者、備之前、中、後、播州四ヶ國有大亂、以故兵船上下不斷、若渡唐船過海者、恐兵船觸之歟、二月三月遲遲不苦歟、如先規推舟於南海者可歟、非白相公私語也、堀川殿以愚私語達台聽、則相公曰、台慮與愚慮同、雖然伊勢守、大和守所白、中國海路可爲無爲、可有御任之由白之、然者以其分可成奉書旨命之也、彼注進僧召寄之、中國路無爲歸洛之事、能可致計略之由、可傳台命之由被仰出也、

十八年正月五日、○略 中 渡唐兩居座返事相調遣天源院、

四月廿一日、不參、天半陰半晴、○略 中 自東相府以飯尾新左衛門(元連)被仰出、就唐船歸洛遲々、以使節可被督之、其仁體揄可然者書立可進上云云、自伊州亦可被白云云、

廿三日、天快晴、○略 中 就遣唐船歸洛、九州使節事相尋汲古、右京亮殿曰、早々可然仁體事相擇、以書立可有談合于汲古之由被白云云、

廿五日、天半晴、○略 中 齋了謁東府、先往鹿苑院、以九州使節永幷西堂、梵初西堂

幕府奉書ヲ出シ瀨戶內ヲ航セシム

備前播磨等ノ亂ニ依リ瀨戶內ヲ避ケンカ

義政集證ヲシテ遣明歸洛ヲ促ノ使節ヲ選バシム

集證永幷梵初二人ヲ使節ニ

選ブ
義政永帊ニ定ム

永帊幕府ヨリ大内松浦兩氏ニ加下知ヲレンコトヲ請フ

書立歷鹿苑一覽、遂往勢州宅、以右京亮殿彼書立、歷汲古一覽、自汲古相副右京亮殿謁東府、以書立供台覽、上首帊西堂有御爪點、帊西堂以前雖有御定于居座、依脚氣御免許、以嚴西堂被爲其交代、其後脚氣取直、去々年勤乘拂賜公帖、然間書立之、爲使節器用者也之由謹白之、故有御點、汲古亦懇々先談之也、汲古云、出立之事者、使節之事申受方可辨之云云、〇略中自普廣院召僧永善侍者來、九州使節書立、御爪點渡之、傳台命、晩來承賀首座來云、彼使節迷惑之由白之、又彼書立案文以栴首座遣飯尾(元連)和州宅、

廿六日、不參、天晴、〇略中午後就九州使節事宜竹翁來臨、仍招小補、勝鬘有宴、雜話移尅、及黃昏皆醉歸、

廿八日、不參、天快晴、齋了廈屋帊西堂來云、九州使節事太難義也、雖然台命難拒、大內松浦等堅被加御下知者可然云云、

廿九日、天降雨、齋了謁東府、九州使節永帊西堂可應台命之由白之、但雖督出船之事、不可承引、然者可失面目、自勢州遣內書於大內松浦方、堅申付可令出船之由、被仰付者可然歟、相公曰、以其旨可命勢州、直往汲古、右京亮方、他適之故先歸矣、

義政伊勢ヘ下向ス
貞宗ヲ大内松浦兩氏ニ私書ヲ遣ハシメントス
貞宗ノ内書ヲ義政ヘ出スヲ當トス
細川政國永帊ノ爲メニ建長寺坐公文ヲ望ム

五月一日、乙巳、不參、天快晴、〇略中謁大聖寺有宴、〇略中以椶子諭勢州曰、九州使節永帊西堂廿八日來于當軒云、使節事雖爲難義可應台命、然者自勢州大內、松浦兩所江、以內狀嚴見督出船可乎之由白之、以堀川殿達台聽、相公曰、然者內狀之事可命伊勢守云云、乃往勢州私宅、尋右京公則他適也、以故徒歸矣、以此旨椶子達右京公、則乃達汲古、汲古云、兩所江內狀事可應台命、雖然我內狀許者可爲聊爾、大內方江被成御內書者可然乎、逐而可白談云云、椶子來于大聖寺、宴中諭愚、〇略齋前自右馬頭殿、以天竺中署、同景徐翁廈屋西堂建長寺座公文事被督之、愚亦擊節、可白沙汰之由答之、

二日、天快晴、〇略中午後與廈屋同途赴汲古宅、汲古出京、於河原相逢、往白河宅尋右京公、則適他、廈屋還興、

三日、不參、天降小雨、〇略中齋前遣椶子於白河、以右京公諭汲古曰、九州使節永帊西堂、爲禮昨日雖企參、他適之故徒歸、今日可被參如何、汲古答曰、昨日出京之故不能對面、今日午後來了可對面云云、又御內書事自出、可遣大內方云云、又永帊西堂建長寺公帖事、此使節事者非大義事內議也、雖然老體云、典厩望云、達台聽可也、余亦同心之由可白之云云、午後廈屋往白河、自愚方遣一力於

養ニ政、永ニ建、長寺ニ帖ヲ、公ヲ與ヘフルヲ許スス

右京公宅、汲古乃對面云云、○略中今午遣栂首座於飯尾和州宅曰、九州使節永
幷西堂可應台命、仍大內方松浦方江遣伊勢守之內書可也云云、此由去月廿
九日披露之、乃可白伊勢守之台命有之、勢州曰、我內書計者聊爾也、被遣御內
書於大內可也云云、幷西堂亦大內雜掌與文首座相尋國之時宜、則大內事者、
雖爲何事、爲上意者可應尊命、可致忠節、殊被下御內書者可忝存、松浦方江被
成御內書者、大內方無曲可存云云、此由達汲古、則愚及與和州可相議定云云、
又幷西堂建長寺公帖事、右馬頭殿以使者內々被相望之由達汲古、則是亦可
然云云、此條々達飯和、飯和曰、大內方江御內書事尤可然也、松浦方江亦先規
被成御內書之事儘有之云云、又幷西堂一級事、亦尤可然云云、
四日、天降雨、終夜不罷、及巳刻、○略中午時謁東府、鴨水太深過腰、輿而涉之、幷西
堂建長公帖事、內々義右馬頭殿白之、然間相尋汲古幷飯和、則皆可然云之由
白之、相國公帖事者御停止爲御法、然間建長可然之由白之、御免之由有台命、
乃傳之鹿苑院、○略中遂往鹿苑院、報幷西堂建長公文之事、○略中以故幷西堂一
級御免事、可被達右馬頭殿之由說與演書記、○略中前刻堀川殿謂愚、昨自伊勢
方、以右京亮可被遣大內之御內書、可被遣松浦之奉書等事白之云云、

梵初周ニ章正使代ノ奉書ヲ望ム

五日、天降雨、○略中午時謁東相府、○略中永幷西堂建長寺公帖御判白之、堀川殿
御白次、○略中幷西堂爲公帖禮謝來、
七日、天快晴、齋前心月西堂來云、九州使節下向時、璋書記當身御奉書一通所
望也、其謂返表一大事之物也、正使護持以可歸洛之處、遷化如此、然者璋書記
護持彼返表、早々可令歸洛之旨、被成御奉書可然云云、○略中齋了謁東府、○略中
又璋書記方江護持返表、早々可歸洛之旨、可被成奉書、此兩條謹白之、○略中周
璋書記方江奉書事命和州之由、傳心月西堂、與文首座語廈屋云、大內方江被
成御內書者、可被載使節之名字、先是就河內合力之事、被成御內書、建仁寺祖
兆西堂使節不載其名字、以故大內方不審有之、蓋御內書布施下野守調之、不
知御內書之時宜如此歟之由、文首座白之由、於殿中語伊勢右京公、傳之汲古
者可也云云、
十三日、天氣快晴、○略中召九州使節之雜掌云、大內方江御內書、今日御判可出
由、伊勢右京公話愚、文箱之事同御內書料帋相尋處、右京公曰、以前自公方亦
自私文箱出之事無其例、料帋事者自往古相定、而引合也云云、以此旨諭使節
之、使兆藏主、

幕府奉書二十八通ヲ出ス

細川政元使者ノ發參ヲ延引セシム

十五日、天洒雨、齋前廈屋東堂來督御內書事、話云、松浦肥前守(弘定)當年廿二歲、曾渡唐之時美少年也、取龍首座逢著之云云、喬年如此話云云、

十六日、天半陰半晴、〇略中自伊勢右京公以一行云、大內方御內書幷汲古內狀相調、使節之侍者來者可渡之旨、可相傳云云、乃傳普廣廈屋方、

十七日、天洒雨、齋前自廈屋方以僧諭云、彼御內書昨日往勢州宅請取之、入夜歸、以故昨日閣之、卽今爲一覽贈之、御內書一通小高檀帋被遊之、大內左京大夫殿云云、勢州內狀一通、同前一覽之後寫之、以返之、依鶴都寺請、遣一行於璋圭甫記室、

十八日、不參、天降雨、〇略中遣九州愚書一通兩居座慶嚴西堂、光松首座、一通南昌菴首(甫)龍首座二合船之居座、一通正使代周璋書記、一通友派藏主希宗、一通全融藏主、文擧承衞侍者方渡之、御奉書廿八通、飯尾大和入道宗滕調之、勢州內狀二通、松浦肥前守號平戶、同彈正少弼號田平云云、

廿日、天快晴、〇略中廈屋和尙來相府曰、昨日十九可發軫之由白、雖然未相調事件々有之、以故今日可發軫之事決定之處、昨夜自九郎(細川政元)殿、以安富四郎右衞門尉被白子細者、九州下向之事先々可被延引云云、廈屋問曰、可延引之趣如何、

四郎右衞門尉曰、不識、等緣藏主傳九郎命、可被尋緣藏主歟云云、以如此延引事可達台聽之故、往勢州宅、則右京公在殿中之故、謁殿中也、右京公曰、如此之子細、幸愚參侍被達台聽者然也、愚云、此事自最初不知始末、以汲古命差使節仁體耳、然者卽今使節被白處、自汲古御白可然乎、右京公曰、縱自汲古可有蔭涼披露、必可謂然者不及問汲古、被達之台聽可然云云、於爰謹致披露云、永帊東堂白、雖昨日十九發足治定之由白之、就奉書等有不相調子細、以故昨日不發足處、昨夜自九郎方、以安富四郎右衞門尉發足可延引、可達上聞之子細有之云云、爲如何、以堀川殿白之、相公曰、就急事差下使節也、何爲九郎相留乎、非可九郎存知事云云、永帊東堂重白上意之趣無餘義、雖然普廣院自往古九郎爲檀那、定住持之事、亦自九郎方相定也、可破彼義事難々、況透彼分國可下國、於國若相支者自國可致注進然者彌可爲延引如何、相公問愚曰、爲如何可然乎、愚云、九郎屋形自面向被仰遣者事不可達、以伊勢右京公、飯尾新左衞門尉、爲兩使、右馬頭、安富兩所被仰出可然乎、相公曰、然也、然者愚以此旨可白付兩人、愚云、愚白之聊爾也、於殿中直被仰付嚴重之義也、乃召右京公、新左衞門尉、

廿一日、不參、天快晴、〇略中午後赴等持寺、〇略中愚留守飯尾新左衞門尉爲東相

公御使來云、就自九郎殿被留九州使節永州東堂之事、伊勢因幡守、飯尾新左衞門爲兩使、往右馬頭殿傳台言、右馬云、台言之趣可達九郎云云、然上者使節之東堂先々早々可發足之由、愚行以可督由有台命云云、及愚歸、以柏首座傳台命於廈屋、廈屋曰、右馬頭與相議而御返答可白云云、

義政使節發軫ヲ督促セシム

廿二日、不參、天不快晴、早旦廈屋來云、昨日自相公早々可發足之命、相語右馬頭殿、右馬頭殿曰、昨日以兩使、自東府蒙仰、子細未達九郎、今日之事先々延引之樣、可白愚之由、意見有之、以故愚今日者不謁東府、

廿三日、天氣朦朧、〇中略晚來廈屋衞侍者來、有宴時自九郎殿有返事吉也、廈屋云、明日齋了、必可發軫云云、夜來雨如繩、

廿四日、不參、天氣朦朧齋了遣惣子於普廣院、督發軫云云、〇中略廈屋發軫之事、以惣子謹白東府、伊勢因幡守殿被白次、愚兩三日以痎氣不謁也、

永帥發軫

晦日、不參、天半陰半晴、召看方丈、傳宗悟侍者藏主之命、自大內方雜掌興文首座、以秀嚴藏主云、先年文明十四年、就渡唐之事、大內方江被成御內書、其案文爲愚一見來之、蓋渡唐事者、自往古大內方司之、這回者自泉堺調船、首龍首座、諸篇司之、以故大內方江遣御內書、於後々遣唐船之事者、可被仰付于大內之氏之ヲ司ル

遣明使ノ事ハ往古ヨリ大內

御文言也、然間今又望渡唐之仁有之云云、然者自大內方如御內書可司之也、万一又余仁司之者、大內可失面目云云、

六月一日、乙亥不參、天洒雨、〇中略自兩居座方注進狀到來、去月十二日出肥前國平戸津、同十三日、至筑前國安威島著岸云云、同使節廈屋和尙注進狀到來、於堺津可待遣唐船否、又可出船否、依返答可致覺悟云云、

二日、天氣快晴、齋了謁東府、奉伸宗悟侍者藏主之謝、兩居座注進狀之趣幷使節注進狀之趣、致披露、唐船無爲開岸、御祝著之由被仰出、使節事者早々出船、於途中以逢唐船可爲期之命有之、

三日、不參、天快晴、齋前調兩居座返章、同使節返章兩通渡之、蓋兩居座注進狀、去五月十四日之狀、今月初一日到來、使節注進狀、去五月晦日今月朔到來、

十三日、天快晴、〇略中午後謁東相府、〇略中唐船赤間關迄到來飯洛、不可有幾程珍重之由白之、〇略中今度就唐船事使節下向之由、自大內雜掌文首座方申下之間、大內近邊造路奔走之由、有其聞之由白之、

七月三日、不參、天氣快晴、〇略中自兩居座方注進狀壽藏主持來、狀云、五月十八日、長州赤間關著岸、同廿二日、大內方爲禮謝往、六月朔、大內方對面兩居座、其

永帥ハ早ク船ヲ出ニシ途中ニ遣明使ヲ逢フベシ

遣明使ハ五月十二日ヲ平戸ヲ出デ十三日筑前ノ安威島ニ著ス

遣明使五月十四日ノ注進狀六月一日ニ到著赤間關マデ到來

周防大畠ニテ永帆ト會ス、海賊多シ
遣明使和泉堺ニ歸著ス
公物運上ノ警固ハ大畠ヨリ水上ハ山陸路ハ細川政元ニ命ズ

後防州大畠留滯、與大內居所二日程、於其中間上使廈屋和尙相逢、海上海賊多浮云云、

六日、天快晴、○略中午後謁東府、遣唐船今月四日泉州堺津著岸之由、上使廈屋和尙、居座壽嚴西堂、光松首座連署注進狀、今晨壽仁岳持來、彼注進狀供台覽、○略中上使居座返章、以丹公贈天源、

七日、不參、天氣快晴、齋前心月西堂、携璋書記狀來、心月竊語曰、喜侍者上洛事、依龍首座公事如此、然者璋書記、喜侍者之荷物等、可押取之由、客衆皆同心企之、雖然自璋書記方致調法、先屬無爲、自然時者可得其意之由云云、

十一日、天快晴、○略中齋罷謁東府、○略中廈屋和尙注進狀不及供台覽、客衆中江(段元)被成御內書、爲上使可被相觸于客衆也、故上使事傳彼台命於客衆中、以後可有歸洛也云云、冷泉殿、伊勢右京公相議云爾、

十三日、天快晴、早旦謁東府、○略之事、若爲河上、畠山右衞門佐(義就)殿江警固之事可被仰付、若又爲攝州陸地警固之事細川(政元)殿江可被仰付云云、相公曰、與勢州可相議、件々以御阿茶白之、卽行勢州宅、以右京公傳台命、勢州云、兩居座之注進狀一覽、此方江亦有居座之注進狀、文言同前、其文言過書(所カ)警固之事云云、此文言餘虛空也、以故不及披露、注公物之員數、重而可有注進由、令返答云云、愚曰、公物許者不可有過分義如何、勢州云、然者兩居座之荷物、可爲公物一具、但被尋先規、可被申下、愚曰、兩居座幸先規時宜能可存知之間、可相尋兩居座云云、兩居座之返章相調下之、愚與勢州問答一々載之返章、

十五日、天快晴、○略中兩居座注進狀趣、伊勢守傳台命、則伊勢守云、注進狀云、過書(所カ)警固云云、文言虛空也、注公物之員數、重可有注進之由申下云云、愚返事亦如伊勢所申示之、

十七日、天快晴、齋前兩居座注進狀、壽藏主持來、○本書八月、九月、十月ノ記事ヲ闕クヲ以テ、遣明使上洛ノ事ヲ詳ニセズ、

〔蔗軒日錄〕

人

五月廿三、晴、○略中東福光精侍者南遊大明、今在當寺之門前、此日遣使董招之、因知此人、前日飯播刕亡何飯當津、一昨廿一日發船、往肥之平戶、迎東飯首座之入京云々、

卅日、晦也、快晴、○略中柏上主以狀告曰、入明之舶今在大內公管內防刕之地、著津在近日云、可喜々々、

大船三艘　堺ノ人々造明船ノ歸著ヲ喜ブ　薬屋五郎次郎明ヨリ歸ル　客衆ノ船ヲ出デテ家ニ入ルヲ許サズ　犯スモノハ罰錢三十貫文　噠ニ依リ光松ノ委明ノ黄隆桂悟ノ語ヲ序ス　錄ニ

七月四日、帳中久臥、以心地不快也、大唐飯朝之船此日著岸、圖郡喜之、○中略是日午時飯國大船三艘著于當津、南北歡聲喧甚云、子西至話而去、由爲至喜舟之入津云、僧衆至、皆賀船之著津、是中岩禾上自吟聯句一千句、朝上主藏之云、一寺之僧出而見船、

五日、晴、○中略忠熏入薬屋五郎次郎之宅、賀飯國云、○中略是日五郎次郎方至矣、喜船之無難飯國、使熏往東歸（光松）之邸、賀飯國、崇德喆上主開詩筵、題官船自大明飯朝云、○中略南方進貢船、今月四日、申刻三艘入津、不許客衆一人出船而入家、犯法者罰錢三十貫云、同五日以前物入置于光明寺、人聲如雷喧、入夜燒燭、其光亙天、午后東飯松首座至、話移時許多、苦勞不可道云々、及居坐龍某之妻、在防與定林會面、了庵入防、恐徒有勞乞、如何々々、○中略子西至、話今湯川新兵衛入送子西荷、乃使充招子西、々々至、喜甚、以荷物托於忠書記之寮而去云、

六日、晴、○中略子西至、充子同往川新爲前夕、送唐荷之禮云、○中略謝東飯昨日之訪、大雨下、話及唐之事、和翁之眞（僧錄作贊）寅上主出之、斯立之像迫眞云、話及了庵（桂悟）之語、唐人作序之叟、寧波府之大人作之云々、○中略夜間光明寺喧甚、爭唐財者乎、九日、晴、入八專、利寅上主、光精侍者至、二人與東飯同南遊云、寅上主投以唐紙、

彦四ノ父五十二歳ニテ無事ニ歸國ス　大似光松ヲ招ク　明ノ僧錄司光祐　五郎次郎大似ニ北絹茶碗等ヲ贈ル

唐筆、唐墨、可喜々々、○中略彦四至、父五十二歳無難而飯舟、紫色北絹一端半、四角之墨一挺、筆三管之內、一筓有圭角、一々可觀焉、○中略寅上主爲使至、明日十日設齋應之、

十二、晴、招□（來カ）飯首座而侑水飯、達首座、寅上主、堯侍者、椿侍者四人隨焉、東歸墨一挺、鍮盞子十枚、達公墨一挺、各以南物爲投焉、可喜々々、癸卯之冬、以書所求諸額入□所謂季弘八分、希弘隸字、季洪古文、水晶宮西峰庵松筠深處、皆大明前翰林學士、王臣所書、實扶桑之光華、墜衲之奇珍也、仍諸士夫作送行詩呈東歸、一々誦之、大明今之僧錄司宇光祐、侍者曰天助、醫僧守東於富春、調合嘉禾散、舊知之嘆也、

十三、晴、○中略是日薬屋五郎次郎次郎送以北絹一端、色黃、大茶碗皿二十個、子西云、儞的（ニチ）强盜（キャントー）人、詈人之言、日本豪盜（イン）ト云心ナリ、銀曉（ショ）得（フテ）不曉得、唐ニハ絹子ノミ、北ノ字不加、

十四、晴、○中略遣充往薬屋五次方、謝昨南物見送之盛意云、

十五、晴、○中略與大安于唐船之叟云、

十六、晴、○中略大全至、薬店次五次至、不及多話而退云、

金陵城中ニ日本人ノ入ルヲ許サズ

唐荷ヲ渡ス

桂悟語錄ノ序

十七日、晴、略○中子西至、唐話如前、

廿二晴、略○中午后招東皈而入浴、々后小酌、子西臨席、話及江南之事々、金陵城中禁日本人而不許入、頃首座持卬書四幅而至、唐人所卬寶珠庵祕之云、

八月一日、快晴、略○中由爲至秀書記與良侍者同至、良者珍藏室之弟子、入大明皈朝、以唐紙三片幷墨一挺表執贄之禮云、

十月三日、略○中是日渡唐荷云、夜兩奉至云、唐荷以紛冗不請取、五次預狀有諍論叓云、

四日、晴、赴諷齋后音忠利三人茶話及唐荷叓、

十四晴、略○中是日唐荷渡於寺家、三四人出而領之、可喜、

鄰交徵書

一三篇　日本東福了庵和尙語錄序　黃隆（○上略、全文ハ永正十一年九月十五日ノ條ニ收ム、）

爰有了庵之社友東歸座元、大明成化甲辰歲（二十年）、承彼國命、浮舟越海、不辭險阻、而來貢我皇上、沐文明之化、際禮遇之隆、遍歷兩京名寺、博覽南北勝境、□今年乙巳（文明十七年）、返邸四明、言旋而歸、則其目之所接、耳之所濡、心之所契、不亦廣且大而道德倍常乎、亦僧中之表表者也、余觀書暇時、東歸座元命僮持一帙來、展之卽了庵和尙平日語錄也、求予序諸首、余觀之三再、余亦嘗究心於釋學者、不覺心目豁然、自忘其倦、不忍釋手也、嗚呼休哉、後之人觀玆語錄、則知了庵之爲人、觀了庵之爲徒、則又足以見大疑之爲師矣、遂書之以爲序、

大明成化乙巳歲孟秋旣望、賜進士出身中憲大夫四川按察副使四明黃隆序、○眞書龍眠庵藏、

遣明使ノ使者入洛

歡甫再ビ入洛ス

景三詩ヲ賦シテ周璋ニ送ル

〔補庵京華新集〕

寄圭圃璋（周璋）書記詩　走筆

去歲乙巳（文明十七）居座使者入洛、特領手教、就審一號船著肥五島之岸、予喜甚、便裁還答付使者、々々已發矣、遺憾不少、越明年丙午、歡甫侍者又入洛、重煩一緘、喜之又喜也、歡甫艱難來歸、如見初晴□月、幸莫大焉、抑正使大和尙遷化彼方、國人惜之、況於予乎、無朝無暮、漣々不絕者無從之淚耳、然而靈光巋然足下有在、乃父以爲不亡慰藉、々々卽日便風告急卒、依見寄子英詩韻、代書一篇、以寓速歸之意云、

別來顧我識公皤、喜聽舟過五島波、風月無情四明士、先師痤履謂之何、五月十五日、小補景三呈圭圃老人船窓下、

○義政、周璋ヲ明ニ遣シ、銅錢ヲ求メシムルコト、十五年三月是月ノ條ニ、幕府、日向守護島津武久等一族ニ、其分國沿岸ニ於ケル遣明船ノ警固ヲ命ズルコト、同年四月九日ノ條ニ、遣明使、明主朱見深ノ復書ヲ受

クルコト、十七年二月十五日ノ條ニ、周瑋、寧波ニ客死スルコト、同年六月三十日ノ條ニ見ユ、

二十五日、己巳、幕府、攝津守護代藥師寺元長ヲシテ、山城法輪寺領攝津安滿杢本莊內ノ地ヲ同寺ニ渡付セシム、

〔法輪寺文書〕○山城

嵯峨法輪寺虛空藏領攝州安滿杢本庄內衞門尉跡、神戸三郎左事、一亂以來退押領輩、不日可被沙汰付寺家雜掌、若有子細者、不日可被注申之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八
五月廿五日

（畠山）守護代　（藥師寺元長）

貞通（花押）（諱訪）
元定（花押）（諱）

二十六日、庚午、嘉樂門院、御夢想ニ依リ、愛染明王ノ版木ヲ獻ゼラル、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

五月廿六日、ほんらしのとうねんとのより、御夢よりて、あいきんのもんき被ついらきらるゝ、

幕府、三條西實隆ノ訴ニ依リ、越後守護上杉房定ヲシテ、苧座ノ外濫リニ青苧ヲ賣買スルヲ禁ゼシム、

〔實隆公記裏書〕

（三）二條侍從中納言家雜掌申苧座衆等言上青苧商賣事、帶綸旨、御判御教書以下之證文、自往古爲（座カ脫）致成敗之處、近日本座衆之外、甲乙人越後國府中、恣令賣買云々、言語道斷次第也、所詮速停止新儀、如先々本座衆等、全商賣可專公役之旨、可被下知之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年五月廿六日　（諱訪貞通）信濃守

沙彌

上杉相模（房定）守殿

實隆本座衆ノ外賣買ヲ禁ジ公役ヲ專ニセシメントス

（三）二條侍從中納言家雜掌申苧座衆言上青苧商賣事、綸旨以下帶數通文、無他妨、爲座中致成敗之處、近日甲乙人等、越後國於府中、恣令賣買之由、自然事實者、爲座衆歎申之段、尤無（理）與儀、所詮速被退新儀商人、任嚴重支證之旨、如先規本座衆等、全商賣專公役仕候樣、被御下知候者可然候、猶以一段可被仰付候事肝要候、恐々謹言、

文明十八年五月二十六日

伊勢守貞宗

五月廿六日

謹上　上杉相模守殿

幕府、伊勢貞陸ヲ山城守護職ニ補ス、

〔古文書〕第三集　大御所様御判

山城國爲料國守護職事、所宛行伊勢兵庫助貞陸也、者早守先例、可致沙汰之狀如件、

文明十八年五月廿六日

〔大乘院寺社雜事記〕百二

三月十二日、

一、京上人夫二人御檻被上候、此次遣書狀於慈恩院律師方了、山城國守護職事、伊勢守可奉行歟云々、隨而狛野庄加地子事、可傳達伊勢守方之由仰上了、寺社本所領請口事、則伊勢者共可沙汰用意候云々、

因幡應福寺、鹿苑寺住持梵桂（維馨）ノ推擧ニ依リテ、同寺ヲ安堵センコトヲ義政ニ請フ、尋デ、義政、之ヲ許ス、

〔蔭涼軒日錄〕

五月廿六日、○略中就因幡國應福寺安堵御判所望、鹿苑寺維（梵桂）馨和尚吹噓狀來、鹿苑相公御祈願寺御判在之、彼支證山名時氏有寄進狀、正平十六年云云、黠撿年代紀、無此年號、蓋南方之年號歟、普廣院有論語板本、其終有年號正平甲辰、考支干、則貞治三年甲辰丁之乎、

六月二日、天氣快晴、齋了謁東府、○略中因幡國應福寺安堵御判之事白之、維馨和尚證狀有之、同鹿苑院（瑞智）惟明和尚證判等有之、鹿苑院殿御祈願寺御判、山名光孝寺殿時氏寄進狀幷播磨（山名滿幸）守殿寄進狀、其外支證數通供台覽、相公曰、已前安堵之御判無之、然於今始安堵御判事如何、愚云、雖已前無之、始被成御判其例儘有之、殊此事者鹿苑相公御祈願寺御判有之上者、非爲始之義歟、相公曰、然者可被成御判云云、可命飯尾加賀（清房）守之由白之、及歸召飯尾加賀守雜掌木村入道、應福寺安堵御判事命之、同召寺家雜掌、御判物以下支證數通返之、愚一行亦同渡之、蓋遣飯尾加賀守證狀也、

廿九日、天快晴、○略中今朝於東府御門逢伊勢右京（貞陸）公、○略中又因州應福寺安堵御判事督之、

七月廿三日、不參、天快晴、○略中因幡國應福寺安堵御判、自飯尾加賀守方到來、乃召紳瀑岩座元渡之、以前者鹿苑相公御祈願寺之御判一通有之也、初白安

義滿ノ祈願寺　正平十六年山名時氏寄進狀　普廣院ニ　正平十九年ノ板本ニ論語アリ

義政ヨリ飯尾清房ニ命ジテ安堵出サシム

文明十八年五月二十六日

堵御判也、

廿四日、天快晴、○中略晩來謁東府、因州應福寺領安堵御判御禮千匹、杉原十帖、折紙以冷泉殿供台覽、

應福寺義政ニ禮物ヲ進ズ

大内政弘、分國内寺領ノ訴訟ニ就キ、其中途ニ貢租ヲ押置スル事等ヲ禁ズ、

〔大内家壁書〕

就寺領沙汰出來之儀、被押置中途土貢事、準武領不可被用御公物、縱雖爲中途神事行事、勤料以下入目等者、不可止先例、但至餘得分者、可被備公用之、自今以後各可存知此旨由、依仰壁書如件、

文明十八年五月廿六日　　右衞門尉奉　弘康

大炊助奉　弘（有憚）

下野宇都宮成綱、茂呂山ヲ同國成高寺ニ寄進ス、

〔宇都宮氏家藏文書〕上

奉寄（密附）付成高寺茂呂山事

右於永劫不可有相違、至於累孫、可守此儀者也、仍爲末代龜鏡之狀如件、

文明十八年五月廿六日　　（宇都宮）藤原成綱（花押）

成高寺

勾當局ニテ講談ス

二十七日、辛未晴盛ヲ召シテ、往生要集ヲ講進セシメ、翌日、上人號ヲ賜フ、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

五月廿七日（はるゝ）、○中略勾當つぼねまて、

まんきいまうしやうようさんきさせらるゝ、あんをん寺殿、おろとの御ふいり、新大をゝとの御ちとやをゝ所なり、夕さゝもさんき申さるゝ、ふしゝ殿も御ふいり、とさゝぬない〳〵のおとこさちもてちやうもんあり、

廿八日（とをる）、さんき昨日のとし、ゑつとくおゝしめして、上人まさるゝ、頭弁ろきてたゝハをゝ、さんきのあいだハひま新大をけ殿御さとまて、ゑんとんろいりやう、

夕さち（をる）、

廿九日、ゝふも御さんきあり、あハひまつぼねまて御ちやのこまて、御ちや御所〳〵へらゝ、く御にもらゝ、おとこさち女中もらゝ、ゑまへまてらゝ、まつくまんきよなり、ふしゝとのも御ふいりあり、けさきちやう所まて、十禅んをゝ御うけなり、

文明十八年五月二十七日

議定所ニテ十念ヲ受ケサセ

ラル 結願
伏見宮邦
高親王第
ニテ講談
ス

中院通秀
聽聞

三條西實
隆聽聞

御教書

卅日、御さんきけさまてする〳〵と申さるゝ、めてたし〳〵、ひほよりふしゝとのまてさんきらるゝ、女ともうゑ少々御ゐりあり、

〔十輪院內府記〕中 五月廿八日、供僧如恒、自民部卿許、自昨日於禁裏眞盛上人講尺往生要集、可丁聞歟之由、內々被仰云々、仍著直衣參內、於長橋局有之、下姿衆多參落底、已始行之後參候、殊勝命信心了、

〔實隆公記〕九 五月廿八日、壬申、霽、○中略午後參內、智禪院往生要集講尺、自昨日始行、於勾當內侍局有此事、諸人群集、已講始時分也、事了各退出、予猶祇候、夕座可令聽聞也、○中略又講尺聽聞、事了退出、于時小雨降、眞盛上人號事、昨日被仰之歟、頭辨御教書一見之間記之、

往生要集可令講尺給之由、天氣所候也、仍執達如件、

五月廿七日、 左中辨元長 奉

謹上 眞盛上人御房

廿九日、癸酉、陰、早朝洗髮、晩頭參內、往生要集講聽聞之、則退出、

卅日、甲戌、霽、早朝參內、法談聽聞、今朝結願□頗催信心、殊勝々々、

六月二日、丙子、雨降、○中略眞盛上人往生要集講尺、自一昨日至今日終功、則又

洛中洛外ノ諸人信敬ス

西教寺ニ徙ル

有圓頓戒、爲聽聞也、小時退出、

〔長興宿禰記〕下 六月廿七日、辛丑、晴、今日眞□(元長)□律僧也、上人號宣下云々、頭左中辨□□朝臣奉行之、彼御房東山黑谷籠居僧也、念佛修行進退、行躰異于他、殊勝希代由、世以稱之、於禁裏御前往生要集法談、受戒之儀等被申□近□洛中洛外之諸人、成信心敬之、不斷不臥、一滄戒行、如法之聖也、仍天子御信敬給上人號云々、

○眞盛、召ニ依リ、往生要集ヲ講進シ、又御生母嘉樂門院ニ授戒ノコト、十七年十二月八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔眞盛上人年譜〕(文明)十八年、丙午、(年四十四)是年四十有四春正月、祈祝大黑天神而驗矣、曰、於衣食二事、我當爲檀那早出世利生、二月、彼岸初談往生要集於坂本生源寺、機緣時至、遐邇之彼法澤宛如蟄龍忽飛騰而起雲致雨、三月、應山門橫川戒心谷之請、徙居于西教寺、(舊傳云、西教寺者慈慧大師開基之道場、慧心僧都建立之伽藍云云、師承舊而徙、以爲念佛弘通之淨刹、初別建一派之法席也、修淨業、說圓戒、實先德修法之本朝高僧傳云、此寺慈慧、源信肇基、繼緒遐賀、源空修法之地、爾來爲墟、盛乃入寺說戒、念佛堂閣僧房四十餘所未至數全備焉)夏五月、夢中詣于一叢社、有天童授與一裹曰、此是淨六根之藥也、

蛤江大明神

早服普度群生、我稱蛤江、寤後猶覺身心清淨而餘味之在口吻焉、若於夢中但見妙事、法華安樂行品、其斯之謂歟、一時移法席于湖東笠原之村、路傍有神社、不異夢中之所見、乃問社士曰、蛤江大明神、本地藥師如來也、

相鄉相冬申狀

二十八日、壬申、山城松尾社神主相鄉及ビ權神主相冬ノ訴ニ依リ、同社領越中松永莊預所職相賀ヲ罷メ、相鄉ヲ以テ之ニ替フ、尋デ幕府、相鄉、相冬ニ同莊ヲ安堵セシム、

幕府松永莊ヲ相賀ニ還付ス

〔松尾神社記錄〕○一京都帝國大學所藏

松尾社神主相鄉、相冬等ハ、
右子細ハ、當社領ゑつ中國松永庄の事、あふこよりけんてうの御神領とゝ
て、毎年五月卅ヶ日御供幷十一月御神ふくの御ゑさ等ハ御料所たる處、今
度一亂中ニふけの御所よりくゑんむニ一たんあつけ下され候といへと
も、天下御ふいの折ふし思召ゑけられ、社家へ返し付られ候ゝせつ、同社(ニ脫)け
おいて、元の禰宜すけよしかさてうちニ申かすむる條、御きうめいにおよ
ハす、彼すけよしら方へ先付らるゝ間、其おりふし相鄉、相冬子細を可申と
いへ共、いまゝかんにん仕候、然ニ今月日供相賀けんたい、ちら比のくせ事

相賀日供ヲ闕怠ス

相鄉相冬ニ附セラレンコトヲ請フ

候、去文明十一年よりちきやう仕おら、同十三年の五月よりの神やくを
きんする事、是又さらニゆへなし、其段ハちやうくゑんの御奉書ニ見へた
り、殊去年まてふいニ所務仕、今當月日供たいてん言語道斷のよし、彼すけ
よしをちやうくゑんへめされ、さいさん仰らるゝといへ共、せういんいさ
さす候て、日供けんたい□也、所詮本領主と申、ませうめいけいと□(申、か)□(さ、か)
□□□□(もつて)相鄉、相冬に一日も早くゑんしをなし下され八、同ふけの御下知
等を申うけ、則日供てうまんまん可仕、取分當月五月事間、日供を取とゝのへ、い
よ〳〵天下たい平御くゑんまやうまゆの御いのり比たんせいをぬきん
てゐてまつるゑし、然者此おもむき御そうもんにあほらんらため、粗此
ゝまんて言上如件、

白川忠富奏聞ス

文明十八年五月日

如此まさゝめて、伯殿へ出候へハ、則伯民部卿殿へ入をそへられ候て、民部
卿申入候處、ゝんふ卿殿より御そうもん候也、然ニゑんしをなさるゑく候
間、民部卿殿へ案文をまさゝめ候て□□(遣候て、とゝ)のへ候て、相鄉方□
□殿より給也、此時柳一荷、さらなハひさい三まい、こふ十を、同百疋おり

文明十八年五月二十八日

文明十八年五月二十八日

ろミ□□殿へ出了、同民部卿殿へおけらさ〳〵、ひさい三まい出了、相郷□也、伯殿への百疋祈禱事ほんしこ付候てハ、先々もおきよし申候へ共、所領一所もいほやうの事候間、めてたくと色々申され候、□分如此、

上ハ書也、謹上　神祇伯殿　　左少辨俊名

松尾社領越中國松永庄預所職事、相賀日供闕怠之間、所被補社務相郷也、可令存知給候旨、天氣所候也、仍執使(達)如件、

五月廿八日　　左少辨俊名

謹上　神祇伯殿

ほんしをおし下され候時、うけ文可仕之由の□ちやうこて候由□被申候間、如此調進候也、

當社領越中松永庄事、權禰宜相賀此間無故知行仕、殊至去年所務無爲いさしおらら、今月日供及闕怠條曲事也、然相郷爲本領間、其子細申上處へ被聞召分、綸旨被成下上者、□日今日兩日分日供調進仕者也、仍彼庄知行罷在、萬一於以後日供等無沙汰候ハヽ、彼在所於可被召放、此趣權神主相冬ニ堅可

加下知候、仍請文如件、

文明十八年五月廿九日　　松尾神主相郷在判

御奉行所

松永事付て公方様への申事、先北御所さまへ如此目安をもつて申入候、それを今御ちの人へ、北御所よりまいらせられ候て、社務相郷如此申候、これハほうんよきおく候と申候、とに文明十一年のとしより、此あまり方へ、相郷申かけたる事候と申、殊此月日供を元の禰宜すけよしと申物、ゆへなくけつたい候上ハ、相郷方へ御奉書をおさせられ候へと御申候間、きこしめしほけられ候とおほせ事候て、則社家奉行飯尾新さ衛門を公方へめし□(よ)□(サカ)られ候て、早々奉書おし相郷ニ申付候へとの上意おり、□おほせ出され候事五月廿一日なり、かしこまり候よしをハ御(返歟カ)事申上候、但新さ衛門おやこ子申事ニハ□(此カ)儀ニかきらす、當時の御公事何も此御所様より仰出され候事をハ、東山の御所へ、そつと〳〵うらゝいい申て候ハてハ、御奉書のおし候事いらゝゝ由申候て、則東山殿參うらゝいい可申心中ニて候、御申次ネり川の御つネをもつて申入候處ニ、御きけんあしく候おりふしにて候とて、御

文明十八年五月二十八日

申入なく候間、先々罷歸了、然間大いりさ過へハ申入候、そやまんしをハなされ候、又ハ五月の事ハさふにより候間、當社奉行事候間談合候、まつ大和（假屋元連）守入道おりろさ廿九日ニ取候て、廿九日、卅日兩日供てうしん候也、暮々此ハ大事のき、北御所様へ申入候事、文明十一年の時申如此候間、當年も如此日供をとゝのへ候て申入候了、

松尾社神主すけ鄕、同元の神主相冬等ゟゝまんて言上、

右まさいハ、當社領ゑつ中北くに松なゟ此まやうゟ此事ハ、あふこより、けんてうの御神領ニまて、まい年五月卅ケ日御くう、ならひゟ十一月此御ふくの御日さとう此御料所たるところ、こんと一らん此中くまんむまあつけ下さるゝといへとも、てんろ御ふいのおりふし、おほしめしまけられ、社けニ返し下さるゝませつ、同社家まおひて、元の祢きすけよしかさてうち

ニ申上候條、御きうめいニおよます、彼すけよしろ方へまつ付らるゝ間、すけさと、すけ冬そのおりふし、まさいさい〳〵申上候といへとも、社家ニ返し付らるゝ事、まつもつてめてさくおほしめし候間、いまの事ハかんにんいさし候て候、北御所さ過よりおゐせられ候間、御いにまさらいいまかんにん仕候、さ候ところニ、こそまてまよむふいこいさしなゟら、この月の

□すけよしけつたい仕候間、こんこたうたんのまたいなり、かんようハゐん領主と申、ませうめいけいと申、かさ〳〵もつてすけ鄕、すけ冬におほせ付られ候て、日くてうまんいさすゑく候、とにこん月の事ハ五月と申、又ハ御ともいろまへの、御事ニ候へハ、日供神事ふいこてうまん仕候て、御きたうこれニすくゑらす候、同ハ一日もさう〳〵おほせ付られ候て、すなハち日くてうまん仕、いよ〳〵御きたうのせい〳〵をぬきんてたてまつるゑきもの也、仍ゟゝまんて言上如件、

文明十八年五月日

今月廿一日ニ小川の御所さ過より仰出され候へ共、東山殿御意をうけられ候間、御奉書をおそなゐれられ候間、まつ如此おりろミを取て、日供廿九日卅日兩日てうまん候物也、

松尾社五月日供退轉之旨彼及聞食候、不可然候、如何様可有調進之由被仰出候也、恐々謹言、

五月廿九日　文明十ノ十一廿九日　宗勝在判

幕府ノ奉書

文明十八年五月二十八日

當社神主殿〇中略、相郷及ビ相冬宛ノ幕府奉書ニカ、ル、後掲ノ松尾神社文書ニ同ジ、

上ハ書也、
守護代　沙彌宗勝

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀令退轉之間、被返付當社神主相郷、權神主相冬等訖、早可被沙汰付彼代之由所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年六月十一日　これハ當社奉行飯尾大和守　沙彌在判

これハ飯尾ひせんかみ　肥前守在判　〇中略、齋藤基守宛ノ幕府奉書ニカ、ル、後掲ノ松尾神社文書ニ同ジ、

守護代

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀令退轉之間、被返付當社神主相郷、權神主相冬等訖、早年貢諸公事物以下、如先々嚴密可致其沙汰之由被仰出也、仍執達如件、

文明十八　六月十一日　當社奉行飯尾大和守　宗勝在判

飯尾ひせんのかみ　爲脩在判

當所名主沙汰人中

齋藤二郎左衞門尉基守

上書　遊佐新右衞門尉殿　御宿所

尙々、宜御返事なと候て、可直務之由可被申候、代官職事如此間、石黒太郎左衞門尉殿無煩候者肝要兎角被申て、御遵行可相拘候、但可御意仕候、

就松尾領事、御下知案文五通始御遵行事致披露可調進候、但此在所事、前官務長（小槻）輿宿禰知行刻、社家へ還補時節可有直務之由、堅被申候處ニ、彼代官職事石黒二郎右衞門入道殿被持候、如何樣よも調法を憑入之由、熱田與次郎殿、入江遠江守殿種々被申候間、色々以内儀申候處候、然者拙者可被□由被申條、堅請文を仕、此十餘年從社年貢等取次于今無煩候、然今度於社家、就神供闕怠、被成御奉書候哉、年貢事者、國よりも無沙汰候ハす候、又拙者も不難澁仕候間、如此間可申談心中候、我ら拘（惜）仕候へ者とて、餘慶なと候樣ニ被御思食候、□熱田殿存知事候、彼社家方毎々六惜儀共被申、可直務仕之由覺悟候共、連々石黒次郎右衞門殿憑入之由承候間、御心得無子細候者、已前如

文明十八年五月二十八日

請文可執沙汰仕候由、態社家へ可相屆候、若又御邊行被遣候て可然ニて候ハヽ、御返事ニ示給候て可得御意、尚々此□知行方ハ新治部少輔相賀と申候、

〔松尾神社文書〕二〇山城

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀令退轉云々、太不可然、所詮任由緒之旨、早全領知、可被專神役之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年六月十一日　　（假居宗勝）沙彌（花押）

（假居茂綱）肥前守（花押）

當社（相鄉）神主殿

當社權（相冬）神主殿

〔松尾神社文書〕四〇山城

松尾社領越中國松永庄事、爲日供料所之處、權禰宜相賀令退轉間、被返付當社神主相鄉、權神主相冬等訖、早可被去渡代官職之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明十八　六月十一日　　宗勝（花押）

齋藤次郎（基守）左衞門尉殿

爲脩（花押）

越中國利波郡松永庄內松尾社領事、任去六月十一日御下知之旨、可被沙汰付當神主幷權神主代之由候也、仍執達如件、

文明十八　九月十六日　　（附箋）「齋藤次郎左衞門尉松（基）長代官」

基守（花押）

（附箋）「越中國同處代官」

直秋（花押）

遊佐新右衞門尉殿

尚々、當御年貢事度々申下候、定近日可到來候、然者卽可社納申候、

〔出典裏書〕「松永庄ヲ催促之時、代官齋藤二郎左衞門尉」

松永庄御綿事、度々御催促通國へ堅申下候處、相賀御時より爲請切申合候、御綿不納申候由、返事仕候、當社も御照覽候へ、於拙者非難澁候、南方邊事一途候者申談候て、如先々可致了簡候、恐々謹言、

十月二日　　齋藤二郎左衞門尉基守（花押）

（附箋）「越中國松永南方代官」

文明十八年五月二十八日

狩野正信筆ノ佛像ヲ徵ス
五大尊像
四十人ノ人夫ヲ以テ運ブ

二十九日、癸酉義政、東福寺、建仁寺等ノ涅槃像ヲ徵シテ之ヲ見ル、

〔蔭涼軒日錄〕五月廿九日、不參、天快晴、自東府東福寺涅槃像、其外處々涅槃像、可被供台覽之由被仰出、乃遣一行建仁、東福傳命、當寺無之、每年借崇禪院涅槃像以掛之、又狩野大炊助所筆佛像有之者、可獻之由有命、愚所持五大尊一幅、以棕子先獻之、

六月三日、不參、天快晴、〇略中東福涅槃像今日東府江進上、以四十員人夫運送之、月建和尙戲言、如蚿足相似云云、

七月廿二日、天快晴、〇略中自東府建仁、東福涅槃像如何掛之哉、子細相尋可白之命有之、乃遣僧於兩寺尋之、

愛染明王御供養
公敦周防ニ潛居ス
和泉堺海會寺ニ寓センストス
住吉ニ寓ス

六月乙亥朔、御祝、

一日、〔御湯殿上日記〕〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收六月一日、あさ御いわいつものとし、なんぢのとく御くやうありて、なふも御しやうまんなり、御まゐりのあいさつ、いよひの御さゝ月いつものとし、

前右大臣轉法輪三條公敦、高野山幷ニ粉河寺ニ詣デントシテ、周防ヨリ攝津住吉ニ至ル、是日、住吉ヲ發シテ、周防ニ歸ル、

〔蔗軒日錄〕地四月廿一日、晴、〇略中此日申刻一僧佩防之保壽惟參（照首）東堂之狀而至、狀云、三條右大臣（公敦）號龍□（翔）寺、近歲潛居于防州、今將詣于高埜、十日之間寄宿於當寺云々、百計辭之、予以爲尊貴之客寓于敞（海會寺）寺、以爲可媿、且亦非比丘之法云々、使者頷而出、如何々々、

廿五、〇略中印首座至話云、三條右大臣入道殿性空今寓住吉村庵、

廿七日、晴、〇略中三條右大臣寓住吉扇僧廬、

五月六日、雨少晴、作狀寓銷翁首座、通徵信於防之龍翔、□左右□侍者投以高麗所產串柿十枝、味妙、〇略中使充子往住吉而通信于龍翔三條公、公有復命、不

印銷公敦ト詩歌ヲ贈答ス　藤原氏南家將家　住吉社家公敦ヲ遇ス

受所送之薄物、印銷老將料理之云々、

十日、〇中略印銷翁至、去七日呈小樽於龍翔、々々賞之云、予聆而喜之、翁以詩呈龍翔、端午之日也、龍翔以歌答之、予出紙求書、翁書之、翁曰、昔冬嗣憂藤氏衰微、而建南圓堂、々成日有歌云、補陀洛ノ南ノ岸堂立テヽ、今ソサカフル北ノフチ波、南家ト云ハ攝政關白之正統一義也、將家ト云ハ日埜等諸藤氏庶流也、冬嗣ノ后大榮者、御堂ノ關白、其后一々家又道家公有榮、名于天下、古人主□越之者云々、西園寺殿先代之傳奏也、是以至今有領地云々、轉法輪三條號公敦、公此家ノ先、今ヨリ五六代先有名人、號公實房、慕其人、故一代號公某、一代號房（實カ）某云々、

〔蔗軒日錄〕　人

五月廿日、〇中略此日住吉右府龍翔院使至、見謝去六日之徽志、使者宗次郎、作保壽返答云々、〇中略鑑上主自龍翔飯、語村居之閑寂、飯舟在近云、詩筵、〇中略鑑上主往住吉龍翔之旅床、此日可□開廿四、〇中略午後秀書記云、此日飯寓於向上先廬云々、因知龍翔院殿住吉社家待厚、〇中略龍翔拜一休之眞、改其名云、在防依洞上之人云、

六月三日、〇中略龍翔院今月初一喚飯舟云、不獻鳳章爲恨也、

公敦三條西實隆ニ書狀及ビニ物ヲ贈ル母ニ對面ノ爲メ上洛　俗姓ハ源氏、先祖ハ攝津野間莊主　建仁寺五葉庵ノ文璞ニ就ク　玄承ニ嗣グ　鶴鴒ノ畫　景三ノ詩　行狀

〔實隆公記〕　九

五月六日、庚戌、〇中略自龍翔院有書狀、鈎物一被惠之、〇中略抑入道右府爲母堂向顏上洛、在住吉云々、近日高野、粉川等參詣、其後則可下□、尤向顏有其望、每事難事行、爲之如何、

〇公敦、窮困ニ依リ周防ニ下ルコト、十一年四月十九日ノ條ニ同地ニ薙髮スルコト、十三年二月十五日ノ條ニ見ユ、

二日、丙子、義尙、景三橫川ヲシテ、扇子ノ畫ニ贊ヲ書セシム、

〔蔭凉軒日錄〕　六月七日、不參、天快晴、〇中略今朝召小補齋之、〇中略去初二日、自小河御所命小補、贊扇子畫、鶴鴒、其詩曰、

隻影翩々原草香　恰如歸鴈落斜行　將軍白羽雪姑雪　一扇淸風天下涼江雪

前妙心寺住持宗深雪江寂ス、

〔佛日眞照禪師語錄〕　行狀

勅謚大道眞源禪師東陽（英朝）和尙撰

師諱宗深、雪江其字也、嗣義天（玄承）、攝州人、俗姓源氏、其先野間侍中、早以勇聞、等持院贈大相國尊氏公開運初、以羽檄招致于麾下、賜食邑於野間莊、遂以家居焉、師生而穎利、齠齔有出塵氣質、稍長辭親、親不割愛、竟逃趨京、途逢一僧、偕行及第五橋、僧顧而問子欲安之、師因伸依附之情、僧乃相攜歸建仁五葉菴、付文璞

正深ト名ク

尾張瑞泉寺ノ宗舜ニ從フ養源院ニ入ル

宗深ト改メ雪江ト號ス

玄承ニ再ビ從ヒ瑞泉寺ニ赴ク

玄承ニ寺ニ入ル

丹後ノ興寺ニ入ル

請ハレテ養源院ニ歸ル

細川勝元ノ信任セラル

勝元ノ請ニ依リ龍安寺ニ住ス

玄祥玄朔ノ門下皆龍安寺ニ集マル

大德寺ニ住ス

勝元山名持豐ト共ニ擁護ス

玄承ノ例ニ從ヒ三日ニシテ退ク

一條兼良ニ應仁亂中ノ詩ヲ寄ス

和韻ス

勝元再ビ龍安寺ニ請ジ參禪ス

禪師、禪師一見器許、名曰正深、撫憐經年、一日西歸省親、鄉邑有藥師堂、頗有靈驗、師詣之默禱、但願頓發明心地、既而再還東山、晨鐘暮鼓、一一無不發參玄奧矣、於是拜辭本師、適尾陽、在瑞泉日峰和尙席下、自從參堂、啖辛嚙苦者年舊矣、峰入洛亦從之、妙心寺再興後、峰自營小院而居、號曰養源院、院計枯淡、諸役乏人、師自請維那者三年、不喫常住飯、先是日峰住靑龍山之日、旣以臨濟正脈付屬承藏主、義天、至是祥侍者、雲谷、朔藏主桃隱、亦相次受印可去、師旣罷參、未蒙印證、而峰每向人稱、正深維那必也在一方、接人去矣、仍諱改宗深字稱雪江、一日勸諭曰、子姑從承藏主去、時義天赴瑞泉看院也、師稟慈旨相隨而東、再入師兄鑪韛、旭鍛嘿鍊、艱難備嘗者亦有年矣、義天之風、孤硬難當、不輕許可人、每請益但遭呵咄耳、及住龍安、請師爲養源塔主、師在養源、猶以寅夕往復於龍安、入室參詳、混衆孜孜、後學弗之知、竊謂院主機不薦也、兩師叔聞之、時復爬痒、然師面無慙色、一日偶動隱遁之興、潛入丹丘別院、掩關于南縣山中、州人小河丹後守力致供給、無何龍安遺專介堅請、不得已再歸養源、義天以喜、京兆源公勝元渴仰宗門、日扣龍安室、時復謁養源、擬執助發之交、師固拒之、不肯應接、然京兆尊師愈親切矣、義天臨示寂、付師法語曰、自從老虛堂付心印於大應、至先師第六世、紹繼綿綿不絕也、宗深座元久侍先師、參禪有年矣、山僧詰其所以、祖師全機證徹已至深奧矣、山僧又何言、書以爲印證焉耳、粤旬餘義天入滅、京兆便具禮請師、繼住龍安寺、歸敬不減先師、參詳亦如疇昔、先是雲谷桃隱相次遷化、而汾陽大樹竝絕其嗣、故三大老會裏參徒、悉皆輻湊於師席下、於是龍安門風益振湖海、雲衲日馳、邇而以來、洛之妙心、攝之海淸、河內觀音、尾陽瑞泉、丹丘龍興已下、大凡自門諸寺菴、唯師一統而住持焉、後來得法嗣四人、各以一院分付之、（芳、養源院英朝、餘寺院亦四人、徽笑菴景川、天授院悟溪、退藏院特輪次交代、周而復始、遺命如是）寬正三年之秋大德禪寺適虛主席、山門具狀請師、次日勅黃特降、鈞帖申命、以八月末入寺、勅使車駕入山、叢林龍象駢集江湖包笠趨風、源京兆勝元、源金吾（山名）持豐諸官員、擁衞法筵、化儀可觀矣、開堂罷詣闕、謝恩入對便殿、住三日而退、隨義天例也、應仁元年丁亥、天下大亂、雒中大小刹盡罹兵燹、大德妙心、龍安亦咸爲焦土矣、師屛居於丹之龍興寺、後成恩寺攝（一條）政兼良公作詩寄師曰、聞說龍興雲亦浮、雲龍變化卷潭湫、喝雷棒雨無途轍、天下蒼生蘇息不、師和答曰、喝雷轟起盡閻浮、解道龍興百丈湫、殿下仁風扇九野、等閒吹散陣雲不、文明初、京兆源公於城中、權建梵宇、迎師而居、亦扁曰龍安、公於干戈間、日日參禪、灼然透徹佛祖玄奧了、公法諱宗寶、義天所名、就師需道號、號

後花園上皇妙心寺玉鳳院ノ花園院御畫像ヲ徽猷ニ供養シテラル

妙心寺再興ノ詔ヲ賜フニ再興ニ努ム

貧窮ニ依リ寒暑一納ノミ

宗純ニ會ス

曰仁榮、一日俄病、盧扁拱手而退、師以清晨訪病閭、公曰、看涅槃、師曰、瞎、曰、正當與麼時如何、師曰、珍重、公合掌卒矣、實文明五年己巳五月十一日也、師每稱仁榮蓋夫裴相國、陳尚書、楊李二張之流亞乎哉、諒闇罷太夫人革府第、作精舍、築墳墓于寢所之跡、請師遷而居之、復用龍安爲額矣、京師陷兵已來、華蓋蒙塵有年于此、上皇偶聞華園玉鳳院有親筆尊容幀子、詔而迎之於行在所、七日供養、仍染宸翰贊曰、傳如來正法、坐玉鳳禪宮、稽首華園帝、萬年鎭日東、又題其後曰、依妙心住持雪江望書之、（後華園院御製也、）又開山塔有宸奎一函、上披緘叡覽大驚嘆、一日特降妙心寺再興之詔、左中辨藤兼顯（號廣橋、）所敷奏也、師感恩綸、日日作務、但專經度之功、不論營締之美、凡受檀施悉以充修造、堂舍舊趾蕪沒榛荊者、不暮年而大半作新、上達天聽、賜龍馬銀券、以伸叙賀也、師少而貧窮、首在瑞泉、寒暑唯一衲、或連紙染藍、綰爲手巾、然不爲飢寒撓志、頗有聲頭氣節、及日峰歸洛、掛錫養源、一日赴次第請、到土佐藤氏石窓居士家、純（宗純）一休（狂雲、）先在座上、師揖曰、金翅鳥王當宇宙、龍寶山裏龍如何出頭得、純拈起扇子、擬劈面打、師掣取而擲地、居士視愕然、由是崇重師、每致檀施、無復闕衣食資、遂以待奉日峯者十九年、又請益義天者十五年、前後凡三十霜、霜辛雪苦古今無比倫者也、且平生慕

其性褊急

中風ヲ病ミ起居ノ自由ヲ失フ

遺誡シテ死後直ニ埋メシム七十九歲法臘六十二

嗣法四人

蘭罵天之風、處處菴居、在尾陽曰妙喜、在丹丘曰洋嶼、在京曰衡梅院、皆用大慧機緣、以榜于楹間者矣、蓋師性素褊急、師叔大樹（之朔）和尚嘗以急性王事見于大慧年譜、至若熱喝雷奔迅機電掣、則天魔喪膽亡魂、高義秋潔、劇談春和、則闡提傾誠具信、加之大度雅量、得之天稟風韻才華殆乎夙薰、是故叢林名衲、江湖飽參、接武相見以晚爲恨也、以至文武尊官、貴介國太四衆群迷、瞻禮歸依不可勝計矣、己亥（文明十一年）暮春末、獨依北窓將書、俄置而倒、呼侍者扶起、起來稍甦、從是中風左腳跛矣、不得起者八年、謝事龍安、歸老法山、雖伏病床、四來應酬臨機無倦、嬉笑怒罵咸作佛事、時命肩輿以意行、不言遠近、每詣龍翔祖塔、命侍者代炷拜、視塔院弊漏、則奉經費以令修葺、多乘凉轎出於郊野通衢、行無緣慈爲樂、或提住包笠、辨其來由、或招呼負販、皆爲弟子、乃至雖異類、逢則安名、有時莊園貢產、召擔夫于階下、以酒食勞之、命椎髻赭肩、歌呼踏舞、縱意而遊、師觀之大笑絕倒、一日召侍者誡曰、我死便埋莫移刻、言訖泊然示寂、實文明十八年六月初二日也、世壽七十九、法臘六十二、諸徒以遺命、奉全身瘞於正法山西南衡梅院之塔、嗣師法者大心（宗隆）景川隆和尚、瑞龍悟溪（頓和）和尚、龍潭特芳傑（禪傑）和尚、堆雲英朝四人也、

〔延寶傳燈錄〕二十 八

大德義天玄詔禪師法嗣

京兆大德雪江宗深禪師、姓源、（野間氏、）攝州人、賦性俊邁、僅過齠年、欲脫塵縶、父母不許、竊遁泝洛、途遇一僧、告以素志、僧乃誘引、至建仁五葉菴投文瑛璵、卽爲剃染、注志此事、徧參山中老宿、謁日峯舜於尾之瑞泉、服膺留侍、及峯再興妙心、師自任悅衆、三年不喫常住飯、峰常稱曰、深也器度宏大、他日多接人去矣、指隨義天于瑞泉、每有請益、遭天呵罵、師不退屈、四威儀中、單提一著、已徹源委、天移龍安、命師守養源之塔、天臨遷化、乃付法語以印證焉、右京兆源勝元、聘請補龍安、雲谷桃隱、相次順世、二師參徒皆歸師會、尋住妙心、管帶攝之海清、河之觀音、尾之瑞泉、丹之龍興、奉勅遷大德、天使入山、右京兆源勝元、右金吾源持豐（山名氏、）率士護筵、開堂畢、詣闕謝恩、三日告退、上堂、古來參學衲子、或句到意不到、或意到句不到、或意句俱到、或意句俱不到、意句俱不到者、恰如牛毛、意句俱到者、如牛雙角、汝等諸人、善自委悉、結制上堂、擧釋迦老子曰、無上法王、有大陀羅尼門、名曰圓覺伽藍、諸禪德今日以大圓覺、爲我伽藍、安居禁足、平等性智底一句、還委悉麼、良久曰、芳草渡頭韓幹馬、綠楊陰裏戴嵩牛、亡僧上堂、擧永明潛禪師因僧問、亡僧遷化、向什麼處去、明日上座豈非是適來、從廊下來、珍知客遷化、向什麼

處去、只如石霜和尚道休去歇去、冷湫湫地去、一念萬年去、寒灰枯木去、古廟香爐去、一條白練去、則入地獄如箭、瀉山和尚道、向山下檀越家、作一頭水牯牛、卻較些子、畢竟如何、早起不審、夜寢珍重、示衆、古德云年閏餘也不知、月大小也不知、是爲衲僧行李、將爲顢頇僊侗、自代曰、不見道可中有個漢、牙如劒樹、口似血盆、一棒打不回頭、東陽出衆曰、三月懶遊花下客、一家愁閉雨中門、師曰、是爲衲僧行李、爲顢頇僊侗、陽曰、恁麼也得、不恁麼也得、師曰、三千里外摘楊花、示衆、毘盧愛飮彌勒酒、文殊醉倒普賢扶、且道、賣弄本地風光、契當本分田地、一僧曰、此地無金二兩、俗人沽酒三升、一僧曰、蘇州有、常州無、拈來塞斷衲僧口、師曰、道得三十棒、道不得三十棒、示衆、雪覆千山、爲什麼孤峯不白、代曰、臨濟掌黃檗、應仁元年天下大亂、大德、妙心、龍安、皆罹兵燹、師避亂於龍興、文明九年、後土御門帝賜妙心再興之綸旨、師感皇恩、竭力修營、未至暮年、具體而成、帝大悅、賜龍馬幷銀券若干、師晩得風痺、左足不支、投老於法山衡梅院、一日召侍者曰、我死便埋莫移時、言訖脫去、文明十八年六月二日也、報齡七十九、坐夏六十三、諸徒奉全身、藏于衡梅之塔、師出四神足、景川隆悟溪頓、特芳傑東陽朝、共爲大宗師、是謂妙心四派也、永正二年秋、勅謚佛日眞照禪師、

〔本朝高僧傳〕 二四十 京兆妙心寺沙門宗深傳

釋宗深、號雪江、攝州人、源姓、其先野間侍中某爲大將軍尊氏源公之麾屬、以雄武聞、食邑野間、因家居焉、深生質穎利、早有出塵之志、稍垂髫舞勺、辭膝下養、親鍾愛不許、深竊遁入洛、途遇一僧、與之偕行、及第五橋、僧曰、子將何往、深告素志、僧誘至東山、投五葉菴文瑛璞公、瑛佛源禪師之孫、一時英衲也、一見器稱、專攻習業、剪薙納戒、請問耆德、以明心地常爲急務、聞日峰舜和尙盛化、乃往尾陽參于瑞泉、一承提示、服止著精、及峰再興妙心、平居枯淡、衆不堪其憂、深任綱維者三年、不喫常住飯、峰每向人稱、深維那器度宏大、佗日多接人去矣、指依義天于瑞泉、天風骨孤硬、不輕許可、深每請益必遭呵罵、深不屈抑、倍鍛倍鍊、密得罷休時、天已默識、命守養源之塔、乃臨遷化、付法語而印之、細川京兆勝元崇深道貌、延請補龍安、會雲谷桃隱相次順世、二叔參徒皆歸鎚下、號令廣衆、恢興宗猷、亡何遷妙心、至攝之海清、河之觀音、尾之瑞泉、丹之龍興、皆以深一入權之、上堂古來參學衲子、或句到意不到、或意到句不到、或意句俱到、或意句俱不到、或意句俱不到者、恰如牛毛、意句俱到者、如牛雙角、汝等諸人善委悉、結制上堂、舉釋迦老子曰、無上法王有大陀羅尼門、名曰圓覺伽藍諸禪德今日以大圓覺爲我伽藍、安

居禁足、平等性智底一句、還委悉麼、芳草渡頭韓幹馬、綠楊陰裡戴嵩牛、示衆、古德道、年閏餘也不知、月大小也不知、是爲衲僧行李、將爲顧預儱侗、自代云、不見道可中有個漢、牙如劍樹、口似血盆、一棒打不回頭、東陽出衆曰、三月懶遊花下客、一家愁閉雨中門、深曰、爲是衲僧行李、爲顧預儱侗、陽曰、恁麼也得、不恁麼也得、深曰、三千里外摘楊花、寬正三年、大德寺虛席、深奉勅入寺、天使入山、龍象駢闐、源京兆勝元、源金吾持豐俱率士屬、擁衛法筵、實一時盛事也、開堂罷詣闕謝恩、三日解印、應仁元年、天下大亂、妙心、龍安悉罹兵燹、深避亂於龍興、攝政兼良藤公寄詩曰、聞說龍興雲亦浮、雲龍變化卷潭湫、喝雷棒雨無途轍、天下蒼生蘇息不、深和答曰、喝雷轟起盡閻浮、解道龍興百尺湫、殿下仁風扇原野、等閑吹散陳雲不、文明初、源京兆權建龍安於城中、迎深而居、九年丁酉、帝勅左中丞藤兼顯、廣橋、賜妙心再興之詔、深感皇恩隆至、日務修營、未周期年土功奏成、帝大悅、賜龍馬幷銀券若干、晚年得風痺左腳不支、投老正法山中衡梅院、雖在病牀、酬對不倦、一日召侍者曰、我死便埋莫移時、言訖脫去、實文明十八年六月初二日也、報齡七十有九、坐夏六十有二、諸徒奉全身藏于衡梅之塔、深志操剛介、饑寒不撓、奉日峰者十九年、侍義天者十五年、前後三十餘禩、始終如一、攻苦食淡古

急性菩薩　來鮮矣、然賦性急率、師叔桃隱、以急性菩薩呼之、凡所居院菴、牓曰妙喜、洋嶼、衡梅、嘉蘭大慧杲之風也、及提綱振領、森嚴不可觸犯、其播和氣、則闡提歸降、以故英衲達官、瞻禮無虛日、路傍兒卒無不望風而拜焉、勅謚佛日眞照禪師、

師變ノ贊　贊曰、關山國師壁立家風、不依文字之伎巧、直示本分之宗乘、雪江深公正統六世、荷一縷之重寄、而廼祖之禪道一跌跌蹈焉、接出景川隆、悟溪頓、特峰傑、東陽朝四神足、雷同于寰中、雨澤于塞外、方今妙心宗派、瓜瓞綿綿、蕃衍天下者、自雪江師而副之也、

宗頓ニ天授院ヲ附ス　〔心宗禪師紀年錄〕中（文明）十八年丙午、妙心輪差七十一歲、六月二日、雪江和尙遷化、遺命以天授院付於師、（宗頓）天授院者授翁和尙之塔頭也、

法系　〔大雲山誌稿〕一編年　文明十八年丙午夏六月二日、雪江祖衡梅ニ寂ス、歲七十九、

〔龍寶山誌〕四橫岳派

大德世九　義天玄承　土州人、舊明承、改玄承、十五歲依本州天忠寺義山和尙薙髮、寬正三年三月十八日化、七十、謚大慈慧光禪師、

大德四十一世　雪江宗深　攝州人、文明十八年六月二日化、七十九、謚佛日眞照禪師、

大德五十二世　悟溪宗頓

大德五十三世　東陽英朝

大德一五十一世　特芳禪傑

大德四十六世　景川宗隆

〔大雲山誌稿〕十二大雲山龍安禪寺住持籍

大德義天玄承　大德住持籍卅九世、文明十八丙午六月二日寂、七十九歲、塔衡梅、

大德雪江宗深　大德住持籍四十世、文明十八丙午六月二日寂、七十九歲、塔衡梅、

仁榮居士

大德玉衡惠璠

大德東陽英朝

大德特芳禪傑

大德悟溪宗頓

大德景川宗隆

〔大雲山誌稿〕二大雲山龍安禪寺住持籍　第二世、雪江和尙、諱宗深、攝津人、嗣法義天承、出世大德住本寺、兼管妙心、應仁之兵革移本寺於洛下、師尋住焉、文明十八年六月二日、寂於衡梅院、

妙心寺九世 尾張瑞泉寺ニ住ス 入寺法語

山城龍安寺ニ住ス 入寺法語

〔妙心寺住持次第〕〔佛日眞照禪師語錄〕

○山城第九世雪江深和尙

住尾州青龍山瑞泉禪寺語、

師以應仁元年丁亥三月二十六日入寺、

據室、拈杖云、吾這丈室、革故鼎新、卓一下云、棒頭敲出玉麒麟、拈衣、大度嶺頭提不起、緣甚歸上座手裏、頂戴云、洛陽牡丹新吐藥、兩開山無因、日峰、拈香、凌滅吾宗兩祖翁、猶留惡跡稱龍峰、到今帶累兒孫去、惹著衲衣荊棘叢、共惟、開山無因(宗因)和尙大禪師創建本寺、日峰(宗峯)和尙大禪師叢林眼目、亂世英雄、雲門三字禪、脫賺五湖雲衲、瑞泉一滴水、沒溺四海衆龍、或底好勤巴鼻苴、笑罵天褊急、或底學密菴懶拙、讚松源耳聾、至厥活底手段、七擒八縱、逼釋迦達磨、生陷那洛迦、鞭狸奴白牯、立爲紫金容、直得整頓楊岐命脈、振起林際宗風、不肖今日作恁麼爲讚揚、全非報恩酬德、擧香云、只將這箇勘破虎穴魔宮、揷香云、寶薰周徧三千界、

住京兆大雲山龍安禪寺語

入寺日示衆云、記得、佛性泰禪師示衆云、無隔宿恩、可盡臨濟宗、有肯諸意、難續楊岐派、泰禪師恁麼垂示、現前一會諸位禪師如何理會、試下一轉語、代云、三冬

鐵樹滿林花、六月黃河連底冰、

示衆云、記得、圓悟禪師上堂、擧僧問雲門、如何是諸佛出身處、門曰、東山水上行、若是天寧卽不然、如何是諸佛出身處、薰風自南來、殿閣生微凉、大慧聞得打破漆桶、諸人試道、打破漆桶底、來看、代云、雖是善因、却招惡果、

示衆云、記得、僧問乾峯和尙、十方薄伽梵一路涅槃門、未審路頭在甚麼處、乾峯以拄杖劃云、在這裏、僧後請益雲門、門拈起扇子云、扇子跳上三十三天、築著帝釋鼻孔、東海鯉魚打一棒、雨似盆傾、此僧問處已一般、二大老答處爲甚麼、大不同、諸人試甄別二大老優劣、代云、斬新日月、特地乾坤、

開爐示衆云、這裏今日無俊機妙用與諸人湊泊、怕寒只是要說火爐頭話、諸人且道、喚甚作火爐頭話、衆語下師云、諸人下語、珠回玉轉、山僧代語、卒打一偈、黃葉北山寺、開爐隨令辰、欲燒無木佛、側聽有禪人、晚節菊英殿、小春梅蘂新、灰寒還浩笑、舊話得重陳、

十月十五日、示衆云、記得、古德僧問如何是冬來事、德云、京師出大黃、密菴和尙頌曰、有問冬來事、京師出大黃、貧他一粒米、失却半年糧、諸人指出端的、來看、代云、辨王庫刀、振塗毒鼓、

示衆云、記得、古云、狼煙一掃盡、萬里賀太平、諸人今日如何唱太平歌、代云、唵齒臨、唵部臨、

仲冬十五日、示衆云、雪覆千山、孤峰爲甚麼不白、代云、臨濟掌黃檗、

冬夜示衆云、諸方堆槃滿飣、我這裏荒凉無可供養、只有些子五祖鐵酸餡楊岐栗棘蓬、拈來撒向諸人面前、諸人如何下觜、代豎起拳頭云、囉邏招、囉邏搖、囉邏送、

人日、示衆云、記得、雲門因僧問、古人面壁意旨如何、門云、念七、雲門答處如何領會、代云、唵蘇嚕蘇嚕、

示衆云、記得、臨濟一日同普化、赴施主家齋、次濟問毛呑巨海、芥納須彌、爲是神通妙用、本體如然、普化踏倒飯床、濟云、太麤生、普化云、這裏是什麼所在、說麤說細、濟來日又同普化赴齋、問、今日供養何似、昨日、普化依前踏倒飯床、濟云、得卽得太麤生、普化云、瞎漢佛法說什麼麤細、濟乃吐舌、山僧昨日赴施主家齋、今日又赴施主家齋、諸人不墮普化途轍、如何擧揚、代云、坐熱鐵床喫熱鐵、石頭南嶽下兒孫、

示衆云、記得、德山因廊侍者問、從上諸聖向什麼處去、山云、作麼作麼、廊云、勅點

飛龍馬、跛鼈出頭來、山休去、德山休去、端的在那裏、代云、藏天下於天下、

四月十四日、示衆云、張得如來禁網、欲擁人天魚、這裏還莫有裂破禁網擘出頭角底麼、代云、踏蹶大海趯倒須彌、

示衆云、記得、木平和尚示衆偈云、東山路窄、西山低、新到莫辭三轉泥、嗟汝在途經日久、明明不曉却成迷、代云、移花兼蝶到、買石得雲饒、

示衆云、霏霏梅雨洒危層、五月山房冷似氷、莫道乾坤乖大信、未明心地、是炎蒸、此是雪竇和尚題迷悟相返一首寶伽陀、這箇一落索、且置霏霏梅雨時節、試拈出明心地底消息來看、代云、直饒現前好消息、爲他間事長無明、

示衆云、睡眠放逸我家精進幢、禪定熏修自劫功德賊、古德恁麼語、諸人如何甄別、代云、珊瑚枕上兩行淚、半是思君半恨君、

閏六月十五日、示衆云、不知月大小、不知歲閏餘、是爲懵懂底、爲伶俐底、代云、茶堂裏喫茶去、

示衆云、古人云、據虎頭收虎尾、第一句下明旨、如何是第一句、代云、不是不是、解夏、示衆云、昔有老宿、一夏不與師僧說話、有僧自歎云、我只恁麼空過一夏、不敢望和尚說佛法、得聞正因兩字也得、老宿乃云、闍黎莫誓速、若論正因一字也

無、道了扣齒云、適來無端與麼道、老宿扣齒意旨如何、代云、欲把枯腸盡底傾、出門不覺又叮嚀、

示衆云、與敎壽禪師在天台韶國師會中、普請次聞墮薪有聲、豁然契悟、乃作頌云、撲落非他物、縱橫不是塵、山河幷大地、全露法王身、虛堂和尙拈云、大似窮儒登群玉之府、無不稱心滿意、只是中間有一字子未穩、既是壽禪師、因此一頌相承於韶國師、虛堂因甚麼道、中間有一字子未穩、諸人試指出未穩底一字子來看、代云、青出於藍青於藍、氷生於水寒於水、

示衆云、慈明圓禪師一日於方丈內、安一盆水、上橫一口劒、下著一雙草鞋橫按拄杖而坐、見僧入門便指、僧擬議卽便棒、未審意旨如何、代云、修羅掌內擎日月、夜叉足下踏泥龍、

記得、黃面老人云、無上法王有大陀羅尼門、名曰圓覺、諸人卽今住持圓覺伽藍、安居平等性智底一句作麼生道、代云、芳草渡頭韓幹馬、綠楊陰裏戴嵩牛、

示衆云、古德有頌云、人言不是面通紅、此病傳來從劫空、拈起洞山三頓棒、慈明老漢接黃龍、諸人且道、此病從何處起、代云、孜孜矻矻底、鬼神莫測其由、奘奘奠奠底、佛祖辨他不出、東陽出衆云、謗此是、讚此是、師云、喚爲佛病、喚作禪病、陽云、

咄咄、

元宵、示衆云、今宵家家燒燈祀上帝、且道、眼到燈邊、燈來眼裏、諸人於此定當看、代云、關蚌含明月、兎子懷胎、師又云、眼到燈邊、燈來眼裏、東陽云、一合相不可得、

示衆云、趙州示衆云、人皆被十二時辰使、我不被十二時辰使、山僧使得十二時辰、被十二時辰使、且置使得十二時辰底消息、諸禪德一一呈似來、代云、高高山頂立、魔外不能窺、深深海底行、鬼神無得測、

示衆云、古德云、年閏餘也不知、月大小也不知、是爲衲僧行履、爲瞞預儱侗、諸人試定當看、代云、牙如劒樹口似血盆、一棒打不回頭、東陽出衆云、三月懶遊花下路、一家愁閉雨中門、師云、可謂瞞預儱侗、陽云、恁麼也得、不恁麼也得、師云、三千里外摘楊花、

示衆云、昨夜金雞飛到我山、打是響如鯨哮、諸人且道、是誰神力、代云、劫石有消日、洪音無盡時、

示衆云、古德云、毘盧愛飲彌勒酒、文殊醉倒普賢扶、且道、爲賣弄本地風光、爲契當本分田地、諸人試定當看、東陽云、此地無金二兩、俗人沽酒三升、

示衆云、蘇州有、常州有、拈來塞斷衲僧口、代云、道得三十棒、道不得三十棒、

文明十八年六月二日

示衆云、古來參禪衲子、或句到意不到、或意到句不到、或意句俱到、或意句俱不到、意句俱到者少、意句俱不到者如牛毛、謹白參禪人、能自委悉、

記得、寒山子云、我心似秋月碧潭、清皎潔無物堪比倫、教我如何說、諸禪德如何定當、一一呈見解來、代云、諸禪德非不具其機用、但是不及馬大師道唯有普願、獨超物外、又不如仰山道師叔大似箇大蟲、畢竟如何錯錯、

示衆云、古人云、菊爲重陽冒雨開、喚作瞿曇境界得麼、喚爲達磨境界得麼、諸人試甄別看、代云、不見道貶眼、十萬八千里、

住丹州米山龍興禪寺語

米山今日開爐、如趙州道火爐頭無賓主、諸人如何支遣、代云、毘盧愛飲彌勒酒、文殊醉倒普賢扶、

示衆云、記得、溈山問仰山、仲冬嚴寒年事、暑運推移事若何、仰山近前叉手而立、師云、我也知汝答這話不得、却顧香嚴、嚴云、某甲偏答得這話、師蹋前問、嚴亦近前叉手而立、師云、賴遇寂子不會、且道、如二大老作略、明什麼邊事、代云、動容揚古路、不墮悄然機、

示衆云、慈明冬日出牓僧堂前、作此相、○○二二二三几申酉未、若人識得、不離四威儀中、首座一見乃謂衆云、和尚今日放參、衆中還有識得底麼、代云、慈明出牓、俊哉俊哉、恰似十七八歲少年狀、元及第相似、首座一見理會、快活快活、譬似七八十老人白衣、拜宰相相似、

因雪示衆云、圓通秀禪師云、上等僧一向坐禪、中等僧倚窓吟雪詩、下等僧圍爐談食、上中下等且置、這裏還有作家衲僧麼、出來相見、代云、老倒疎慵無事日、安眠高臥對青山、

臘朔、示衆云、達磨大師十月初五、於熊耳山入滅、今日復於片岡山示寂、還有異同麼、代云、寰中天子勅、塞外將軍令、

正珍知客遷化、示衆云、永明潛禪師僧問、亡僧遷化、向什麼處去、答云、上座適來、豈不是從廊下來、敢問諸人、正珍知客遷化未審、向什麼處去、諸人若道休去、歇去、冷湫湫地去、一念萬年去、寒灰枯木去、古廟香爐去、一條白練去、則入地獄如箭射、若道向山前檀越家、作一頭水牯牛去、則却較些子、畢竟如何、早起不審、夜間珍重、

示衆云、乾峯示衆云、擧一不得擧二、放過一著落在第二、雲門出衆云、昨日有人從天台來、今朝却往南嶽去、雲門道著底諸人如何定當、代云、孜孜矻矻底、鬼神

莫測其由、奚奚嶽嶽底、佛祖辨他不出、

六月朔、示衆云、教道長期百二十日、中期百日、短期八十日、今日夏期半過、諸人行履作麼生、代云、扇子跼跳上三十三天、築著帝釋鼻孔、東海鯉魚打一棒、雨如傾盆、

示衆云、僧問古德云、世界恁麼熱、如何廻避、古德云、向鑊湯爐炭裏廻避、如古德答處、諸人如何行履、代云、君看快活自在處、鑊湯裏面翻筋斗、

示衆云、杜順和尚頌法身境界云、懷州牛喫禾、益州馬腹脹、天下覓醫人、灸猪左膊上、杜順和尚端的意旨、諸人如何定當、代云、觀音菩薩將錢來買餬餅、放下手元來是饅頭、

示衆云、記得乾峰和尚僧問、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審、路頭在什麼處、峰以拄杖劃一劃云、在者裏、僧又擧似雲門、門拈起扇子云、扇子跼跳上三十三天、築著帝釋鼻孔、東海鯉魚打一棒、雨似傾盆、二大老答處是一是二、代云、千鈞之弩、不爲鼷鼠發機、

示衆云、通身是眼、眼蓋乾坤、通身是耳、氣吞佛祖、通身是口、舌覆大千、通身是心、良久據坐、若無眼作麼生見山色夕陽時、無耳作麼生聞泉聲中夜後、無口作麼生鑒黃金鑄出鐵昆崙、

〈衡梅院文書〉（山城○）

雪江　氷花飄亂凍風寒、汚水渡頭行路難、一色明邊點不立、看來盧老激波瀾、

宗深上人求別稱、援雪江二字、作偈以證云、

文安第三丙寅仲冬日　養源日峰（宗舜）叟八十歲書（印文日峰）　印

〈正法山誌〉（二山城）

義天和尚與雪江和尚印狀

自從老虛堂付心印於國師大應、至先師第六世、繼紹綿綿不絕也、宗深座元久侍先師、參禪有年矣、山僧詰其所以、祖師全機證徹、已至深奥矣、山僧又何言、書以爲印證耳焉、

寬正三年仲春廿二日　前大德義叟（玄承）　押印印

〈佛日眞照禪師語錄〉（法語）

與景川

臨濟正宗、自百丈黃檗闡大機、發大用、脫羅籠、出窠臼、虎驟龍馳雷轟電激、卷舒擒縱、皆據本分、綿綿的的、從松源正到山僧、其正脈已十一傳了也、如宗隆藏主、多年入余室中、晨參暮請闡大機、發大用、大徹大悟、領略得從上祖師嶮峻一著子、可謂吾家眞種草也、宜荷擔正法、建此大法幢、然此大法炬、而化導群盲、以振

宗舜ニ雪江ノ號ヲ受ク

玄承ニ印狀ヲ受ク

宗隆ニ印狀ヲ與フ

起臨濟正宗者必也、思之、珍重、

寛正五年佛成道日、雪江叟宗深於龍安室內書之、以爲證明而已、

與悟溪

三頓棒下、豁然大悟、未是活衲僧、一掌機前、忽然大徹、豈夫惡寃家、只如宗頓首座、參禪喫辛苦年久也、所以大悟大徹、豁開正法眼、透過向上關、實吾家眞的子也、宜長養聖胎畢、而後古帆高掛、濟度群迷者也、與麼則是令不慙稱臨濟慈明之嫡傳、爲大應大燈之嫡孫也、可謂黼黻吾門惡寃家、整頓叢規活衲僧矣、珍重、

旹應仁元年六月鬼宿

正法主雪江老漢宗深書此法語、付悟溪座元、以爲證明而已、

〔龍安寺文書〕 ○山城

古來作家宗匠、非千人之傑也、如禪傑首座、晨參暮請、隨侍年久、道眼明徹、機關透徹了也、宜慧海浮慈航、濟度群迷、以嗣興天源正脈、振起臨濟正宗矣、謂斯千人之英、萬人之傑者也、旹文明五年龍集癸巳九月上吉雪江老漢書之、付屬禪傑首座、爲作家宗匠、爲人之體裁而已、祝祝、

(印文雪江) (印文宗深)

印

禪傑ニ印可ヲ與フ

宗頓ニ印可ヲ與フ

英朝ニ印可ヲ與フ

眞蹟美濃大仙寺ニ在リ

四院ヲ四子ニ付ス

〔佛日眞照禪師語錄〕 法語 與東陽

臨濟正法眼、輝騰今古、松源黑豆法、震驚佛魔、活卓卓峭巍巍、如英朝首座、天然蘊卓識奇姿、累年入老漢室、晨參暮請、百鍛千鍊、商略多少諸訛、參得許多公案、謂之透徹活祖禪、亦名如來大道大悟直得、豁開正法眼、明得黑豆法、所以龍馳虎驟、星飛電激、卷舒擒縱、皆證本分、宜將此從前大悟大徹之一著子、建法幢、立宗旨、攝得四海禪流、振起法雷、擊法鼓、開示十方迷徒者、足報老漢深恩焉、

正法山主雪江宗深書之、付屬東陽英朝首座畢、爲大法證明而已、珍重、吾門今得器、且喜大法今得人、正好傳臨濟正宗、至祝堪繼松源正脈、

旹文明十年正月初吉 微笑塔下

〔正法山誌〕 二 ○山城

雪江和尙與東陽和尙印狀 ○本文前揭佛日眞照禪師語錄ニ同ジキヲ以テ略ス、

右雪江和尙眞蹟、在濃州賀茂郡細目郡和智村、大仙寺、予得大春和尙所寫、而寫之、

寶永五年戊子五月六日 道忠識

〔正法山誌〕 九 ○山城

雪江以四院付四子、

雪江和尙以四院、附與四弟子、以微笑菴附與景川、以天授院附與悟溪、以龍安

寺附與特芳、以養源院附與東陽、

東陽派絕エ特芳派ニ合ス

微笑付景川故、後年景堂建龍泉時、移微笑爲龍泉、故其舊微笑之柱一二本、在今之龍泉庫司、

養源付東陽後、次天陰和尚（嗣東陽、）住焉、次南叔座元（嗣陰、）天住焉、次孝首座（南叔弟子、）住焉、孝之後不續矣、至此東陽派絕、自此養源爲特芳派也、

〔正法山妙心禪寺記〕（原書）○城山

妙心寺記ヲ撰ス

文明年中、先師在都下、撰妙心寺記、洎開山行實記、英朝居於丹之米嶋、遠寄來見示、且命曰、得間校正、別謄一本來、毋謙讓、惟幸弗免、謹如教矣、粤明年春、師忽中風、諸子倉皇參覲、某亦趨庭下、而師在病床嬉笑怒罵、都無別事、唯痛嘆宗綱已墜而已、旋涉膠劑、尊候有間、遂捃摭四世緒餘、目成一藁、留在骨董箱中、恰似待後世子雲者、先師去世後、特芳法兄在龍安、兼領法山席、住持事繁、偶視遺藁、欲囑累於余、余時感沉痾、手戰於筆、眼眩於書、以故固辭矣、延德初、幸奉綸命、猥董蒞茲山、一日檢校衡梅書籍之次、無端撞著這未了公案、寔殃及兒孫者哉、猶豫間華園三霜之期滿矣、懷之歸老濃陽、菴居閑適無事、便漫賣弄青氈以償舊債焉耳、於是先師行實未曾有記者、夫奈蜂桶羊何、竊思居常茶話餘、多談出世

英朝ニ校正セシム

始末、聞所不聞、見所不見、何況一棒一喝、中毒知毒、此皆先師實錄也、仍記概略、以系于第六世、目曰正法山六祖傳、此外上堂、小參偈頌、小佛事見于語錄、皆明應五年丙辰春壬正月日、嗣法小師英朝炷香百拜、謹書于岐山之下、

〔龍安寺文書〕○城山

寶德二年先師在世時、龍安寺殿樣御寄進狀成給候處、注文者粉失（紛平、同之）候、其卽（節カ）粉失狀之御判成給候、特被記置寺領之捺目錄、被令淸備（久定）前守封續目、現在于今、

文明八年仲冬日　　宗深（花押）

〔衡梅院文書〕○城山

定

衡梅院敷地之叀

四至　東者限大道、（西宮小路）　西者限大垣、　南者限柴辻地、　北者限大遇菴垣、

右所定如件、

文明十二年庚（丑）子八月十四日　　院主宗深（花押）

〔龍安寺文書〕○城山

於龍安寺行叀之時撞鐘者、圓福寺堂前之鐘也、於以後圓福寺再興之時、從龍

文明十八年六月二日

安寺合被還者也、圓福寺者錦小路大宮北面也、前住南禪雪堂和尙、龍安寺被借者也、爲後證書之、

文明十三年菊月十三日、　　前龍安雪江誌焉、

（花押）

〔衡梅院文書〕　○山城

文明丙午之結制節、小子慧健喝食成沙彌、叨唱山喝一章而以賀落髮云、至祝不盡、蓋是馮（憑）仰山舊規也、元是風標美少年、學窓勳業似坡仙、相期西髮拂來後、合會祖翁林際禪、

前大悳鶴菴老衲七十九歲而題焉、（印文春江）

（印文宗深）　印

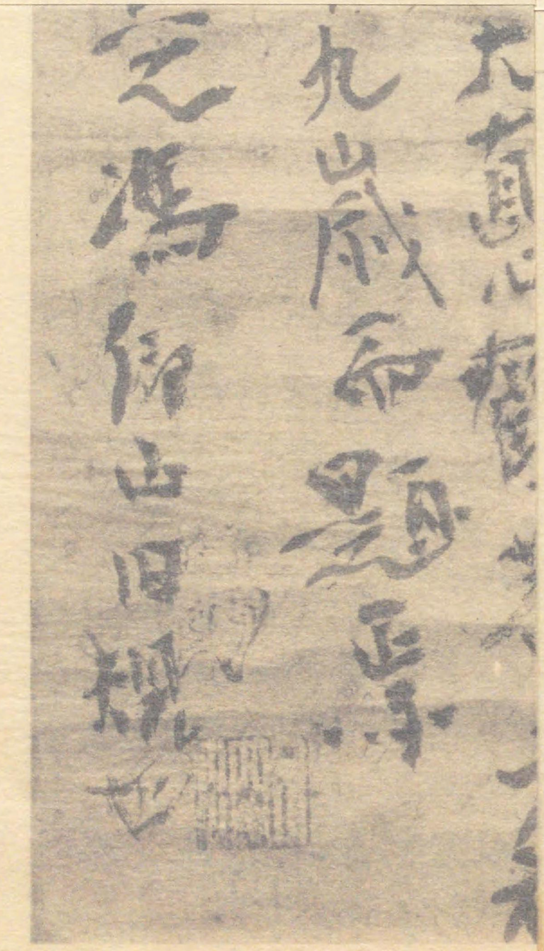
慧健ノ落髪ヲ賀ス

〔龍安寺文書〕　○山城

如案文書調候て、明白菴之傳達候、定可有返事候、巨細御參洛之時可申入候、祝々、

仲冬初四　　宗深（花押）

龍安寺兩奉行謹前



所藏

原寸　縦〇・二九四米　横〇・三九四

宗源山 本頭 京都市 妙心寺内

第十 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宗深 江雪 筆蹟 京都市 妙心寺靈雲院所藏

原寸 縦〇・二九四米 横〇・二九四米

宗深　雪江筆蹟

京都市　妙心寺衍梅院所藏

原寸　縦〇・二九四米　横〇・三九四

宗深 雪江 筆蹟

京都市 妙心寺衡梅院所藏

原寸 縦〇・二九四米 横〇・三九四

達磨贊

〈花園遺臭錄〉達磨大師贊

鐵作心肝、隆準龍顏、超海越漠、遠來普通眞丹、擊齒服毒屢破婁至疑團、挽九年弓、射落神光臂、携一隻履、遙還萬里葱山、夫斯謂之、熊耳山中婆羅門壁觀乎哉、

小子宗林上座持初祖尊像來請贊、書之以塞厥來命云旹文明乙巳三月十八日、前龍寶山主鶴菴老衲拜書、

宗深印

自贊

〈佛日眞照禪師語錄〉自贊

無辨龍蛇眼、無撿虎呪機、胡爲拈起竹篦子、容易塔著金縷衣、指槐罵柳、將是作非、凌滅宗猷賭長老、不知何處振全威、唉、

宗頓首座繪余幻質而需贊、述之以塞厥請云、旹應仁初元仲秋日前龍寶山主雪江老漢書之、

叢社妖孽、愚癡狹劣、入海算沙、接竹點月、屈辱天源、鈍置咸傑、何握黑蚖、亂打聖哲、咄、

□□首座繪余陋質需贊、述之以塞其請云、旹文明五年十一月吉日、雪江叟書于雲臥菴、

文明十八年六月二日

宗頓宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

自贊

某宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

英朝宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

眞蹟ハ讚岐玄要寺ニ在リ

弟子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

無明郎主、貪愛魔王、高臥慈眠、無衲僧氣息、顚言倒語、欵作家商量、不提中峰破砂盆、以何顯家法、不拈松源生苔帚、以何振宗綱、開三毒地裁荊棘、甘五濁世恣荒唐、順吾者引之而入魔界、背吾者引之而陷鑊湯、肩上金襴兮寔其耐、手裏竹篦兮那識舉揚、咄、

英朝首座畫余幻質請贊、述之以應其需云、旹文明十年戊戌仲春廿五日、

〈正法山誌〉（二〇山城）　雪江和尚自讚（東陽語錄ニ同ジ、〇本文前掲佛日眞照禪師請、以テ略ス、）

此墨跡在讚州玄要寺、予正德辛卯七月八日觀帚字錯字點墨、首座字傍書加之、蓋起艸也、紙下破脫者多、又無頂相、

〈雪江和尚畫像〉（〇山城梅院所藏）

這（贅）贋浮圖、簸社妖孽、耐紫衣以粧蒙體、慚愧金襴以掛陋質、剩拈起竹篦、漫打祖亦打佛、別々老來高臥慈眠、微笑宗猷堪凌滅、咦、

小子等畫原幻容而乞贊老漢、書之以塞來命（〇來命ノ二字、佛日眞照禪師語錄、其請ニ作ル、）云、

旹文明甲辰季夏十二日、正法山中衡梅老衲七十七歲製焉、

〈雪江和尚畫像〉（〇山城龍藏安寺所藏）

這（贅）贋浮圖、簸社妖孽、耐紫衣以裝痴頑慚愧金襴以纏陋質、剩拈黑蚖、打祖打

弟子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

宗深雪江畫像 京都市 養安寺所藏

眞蹟ハ讃岐玄要寺ニ在リ

弟子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

此墨跡在讃州玄要寺、

加之、蓋起艸也、

〈雪江和尚畫像〉

這贊浮圖、鑿社妖、

祖亦打佛、別々老、

小子等畫原、

旹文明甲辰、

〈雪江和尚畫像〉

這贊浮圖、鑿社妖、

眞蹟ハ讃岐玄要寺ニ在リ

弟子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

此墨跡在讃州玄要寺、予正德辛卯七月八日觀、帚字錯字點墨首座字傍書加之、蓋起艸也、紙下破脫者多、又無頂相、

〔雪江和尚畫像〕○山城衡梅院所藏

（贊）這贋浮圖、簸社妖孽、（孽）尉耐紫衣以粧蒙體、慚愧金禰以掛陋質、剩拈起竹篦、漫打祖亦打佛、別々老來高臥慈眠、微笑宗猷堪凌滅、咦、

小子等畫原幻容而乞贊老漢、書之以塞來命（○來命ノ二字、佛日眞照禪師語錄、其請ニ作ル、）云、

旹文明甲辰季夏十二日、正法山中衡梅老衲七十七歲製焉、

〔雪江和尚畫像〕○山城龍安寺所藏

（贊）這贋浮圖、簸社妖孽、尉耐紫衣以裝痴頑、慚愧金禰以纏陋質、剩拈黑蚖、打祖打

宗深 雪江 畫像

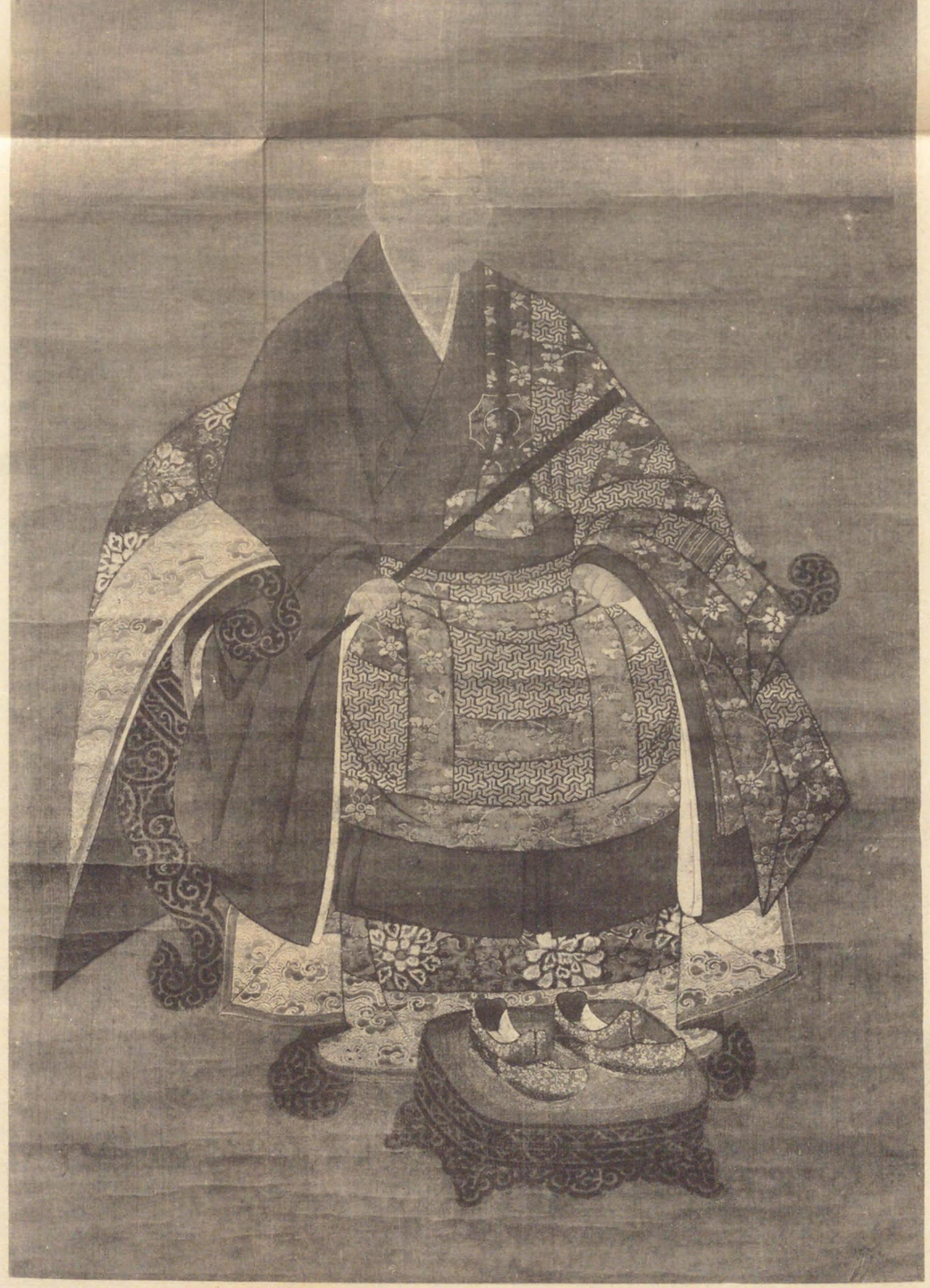
京都市 龍安寺所藏

原寸 縦 一米・二二 横 〇・五七〇

此墨跡在讃州
加之、蓋起艸也
〔雪江和尚畫像〕
（賛）這賛浮圖、叢社妖
祖亦打佛、別々老
小子等畫原
嘗文明甲辰
〔雪江和尚畫像〕
（賛）這賛浮圖、叢社妖

華子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

教諭ノ要ニ在リ



縦 一尺一二
横 〇尺五七〇

弟子等宗深ノ像ヲ圖シテ贊ヲ請フ

岐玄要寺ニ在リ

此墨跡在讚州玄要寺子正德辛卯七月八日親帝宇錯字監寫書痒字恍書加之蓋起艸也紙下破脫者多又無頂相

〔雪江和尚畫像〕○山城衡梅院所藏

這贋浮圖簸社妖孽厠耐紫衣以粧蒙體慚愧金禰以掛隨質剩拈起竹篦漫打祖亦打佛別々老來高臥慈眠微笑宗猷堪凌滅哉

小子等畫原幻容而乞贊老漢書之以塞來命

曾文明甲辰季夏十二日正法山中衡梅老衲七十七歲製焉

〔雪江和尚畫像〕○山城龍安寺所藏

這贋浮圖簸社妖孽厠耐紫衣以裝痴頑慚愧金禰以經陋質剩拈黑蚖打祖打

（来命ノ二字、佛日眞照云、ト作ル、照ハ諱歟、其請ニ

同

佛、別々老來高臥對青山、微笑宗猷堪凌滅、

小子等寫予幻質乞贊、書以塞厥請、旨文明乙巳（十七年）夷則上澣、前大德雪江老衲自訐、□

〔妙心寺文書〕

○十山城

當寺住持職叓、承續開山和尙命脈、稱宗匠者限三十六ヶ月、輪次合致燒香者也、接待四來衲子之外、宜以修造爲念矣、珍重、

文明七年季春六日　　妙心住持宗深（花押）

諸位堂頭

遺誡

（謂老漢之嗣法輩也、）

慧玄像ノ贊

〔佛日眞照禪師語錄〕

像贊　關山（慧玄）國師

這老和尙者、龍寶開山國師（宗峯）之上足也、文保（花園）天皇在位後、居花園離宮、時國師示微恙、上皇遣勅使詔曰、國師今付大法者既是多、其內誰是尤得大機大用者、速合承的旨、朕曾參國師禪、雖得大休歇之旨、未敢能發格外玄機、國師百年後須扣其奧、國師曰、有玄關山者、老漢室中所接出、第一神足也、實承當得松源之骨髓矣、天然以風顚故、居處不定、吾滅後宜尋出以商略向上宗乘也、上復詔國師

云、朕捨離宮欲爲禪宮、伏賜山號寺號、特請關山、以令爲住持、國師卽應詔、而山云正法矣、寺名妙心矣、蓋夫準梵王昔獻花日、大迦葉破顏之故事、兼所以請師兄貴正脈者也、使還奏上皇、上皇大悅也、國師入滅後、上皇亦遣勅使、請斯和尙於濃之山村、而住本山、參徒亦隨侍、室內只棒雨喝雷耳、於此上皇亦山中掬玉鳳院、而居之、以旦夕問道、叡信增厚、竟爲開山祖、住世八十四年間、開作家鑪鞴、下惡辣鉗鎚底大宗匠也、臨示寂、屬嗣法的子弼(宗弼)授翁曰、吾遽然後、汝但以本分事、接四來衲子、專合振起臨濟正宗、切莫寫余頂相、授翁謹任遺屬、開山祖塔號微笑、塔中只建牌也、滅後七十年後、到第四世嫡孫舜日峯、再興斯宮寺、而住院時、謂諸徒曰、吾祖禁頂相遺屬一代奇範也、雖然末代兒孫以甚爲憑據、但須命畫師令圖大方尊宿之體裁也、矧其繪佛與菩薩形像、何敢憑其模範以爲必哉、須是以相好甚嚴爲最也、今現半身、應來學之尊像者、從嫡孫自由三昧應現也、夫這是謂妙心開山關山和尙者也哉、旹文明癸巳(五年)孟秋日、正法山主宗深九拜謹記祖師大略以爲贊、皆是門下所傳語也、

龍興寺僧堂ヲ開ク

〔佛日眞照禪師語錄〕 偈頌

半身像

龍興寺開僧堂

珍重龍興選佛場、彫梁畫棟映丹陽、依俙徑塢千僧閣、彷彿浮山大徹堂、百億須彌皆露柱、萬重劫石幾禪床、中央發現室光塔、照破南閻盡十方、

宗頓ノ大德入寺ヲ賀ス

賀悟溪住大德寺、

吾家生得瞎驢兒、意氣衝天瑞世時、龍寶夜來歸手裏、靈光燦爛照坤維、

玄稟ノ病床ニ侍スルヲ謝ス

小子玄稟上座自今月一日侍老漢病床、其志合喜、今日仲冬及歸之次漫賦山偈一絕以謝勞云、

宗珙ノ紅梅ヲ贈レルヲ謝ス

少室宗猷自稟承、惜哉未敢得輝騰、看不千古定上座、一掌機前繼祖燈、

謝宗珙喝食惠紅梅、

慧璠ニ玉衡ノ號ヲ與フ

鷲界飛來姑射仙、丰姿窈窕帶春妍、老懷今旣奈芳惠、香影朦朧昏月前、

〔佛日眞照禪師語錄〕 宇誤 玉衡號說

崑山片玉異寶叢邊之權衡也、得之者爲夜光、祕之者爲世遺重也、慧璠侍者承當此旨、宜其寶祕之莫忽莫忽、則箇文明十一白閏菊月吉日、大雲山主雪江道人書于古帆軒下、

玄承病中宗深ニ詩ヲ寄ス

〔佛日眞照禪師語錄〕 附錄

病中寄雪江、二首、　義天

山僧近日不安時、壓倒江西馬大師、日面佛兮月面佛、不教院主問如之、

何如今雨有來人、白髮懷情黃鳥春、風景隔山花未落、經過從此可頻頻、

宗深和韻

〔佛日眞照禪師語錄〕偈頌　奉和義天老師病中被寄尊韻、

高格清標宜主人、相迎啼鳥落花春、兩翁唱和新詩句、不識連宵風雨頻、

玄朔宗深ニ次韻ス　次雪江韻、　桃隱

〔佛日眞照禪師語錄〕附錄　次

眼掛流星面刮霜、文殊靠倒淨名床、打醺不二舊公案、一首貫華字字香、

阿波ニアリ　時在阿州、　同

又

慈明手段異諸方、醜陋任嫌吾豈藏、村酒醉來臥牛背、老婆燒葉粥鍋傍、

龍澤宗深ニ和韻ス　同

寄雪江、

短衣銀鹿扣吾廬、報謂明朝赴上都、爲君欲寄紙三幅、近日清貧紙又無、

〔翰林五鳳集〕二十七　露宿不餐塞不衣、亂離艱苦似吾稀、越山聞說雪飛下、書信須憑春雁歸、

和雪江韻、　天隱

宗熙宗深ニ和韻ス

〔春浦錄〕和酬　依雪江和尚寄溫泉之韻、

治病浴溫水、書音到我邊、鼓聲鳴遠瀨、塔影落晴川、恩渥千鈞重、鮮新五字篇、來言蒙藥誨、白梅赴溫泉、

〔佛日眞照禪師語錄〕附錄　次韻衡梅師翁移梅、

禪傑宗深ニ次韻ス

英朝宗深ノ法衣ヲ付スルヲ謝ス　特芳

紅白闘妍爲孰開、暗香彷彿正時哉、若無鼻孔指南旨、爭識黃昏有此梅、

同黃柑ヲ贈レルヲ謝ス　老師和尚付法衣作偈奉謝焉、　東陽

正法山頭雲一縷、半肩搭起重千鈞、歎翁不受瞎翁囑、今日劣孫難效顰、

衡梅老師和尚頒賜黃柑二十顆、有玉偈兩篇、後篇辱慰趺座擁葉之寒乞也、鴻恩難荷、謹和尊韻、呈上猥床下、伏望慈悲改抹、

同和韻　同

壓倒永嘉三寸黃、樹頭蜜果槩山陽、不堪淸賞劈開看、毒氣嚢入寒似霜、

凍雲鎖月一間房、冷笑靑銼誇鐵腸、趺坐夜來寒徹骨、滿牀風葉半吹霜、

奉和微笑堂上老師元旦示衆尊偈、　同

法山千仞聳、住世幾椿年、萬象須彌筆、三春大雅篇、宮花含露拆、園蓼帶晴妍、四海齊欽仰、古今妙喜禪、

奉和微笑堂上老師大和尚尊韻、并敍、　同

七月念三日所賜玉偈、淹滯干濃陽不達山中、及九月晦日有一僧持來、遂拜受披閱、驚而且告言、是吾至寶也、何自懈于傳達、致令吾謝答、失時耶、其僧口

不絕罪過、孔夫子曰、既往不咎遂有之去、既而圭復有日、適得鴻便、謹汚尊韻、無以遲晚之責萬幸、

故國卻殊方、花園杏帳望、三山一蓬島、十夢九梅陽、雅量包天地、風規動廟堂、何時侍猊側、四海德惟香、

龍興寺佾堂落成　龍興僧堂落成、同

宗深一條兼良ニ次韻ス　米嶠新開龍象場、幷呑臨濟與韶陽、溫公嘆服禮三代、王氏問來僧滿堂、香氣暗凝秋雨被、鐘聲時殷月明牀、主山歡抃安山舞、萬衲趨風傾四方、

〈佛日眞照禪師語錄〉　偈頌　次攝政兼良（一條）公見寄韻、

喝雷轟起盡閻浮、解道龍興百丈湫、殿下仁風扇九野、等閒吹散陣雲不、

〈佛日眞照禪師語錄〉　附錄　源京兆（細川）勝元參雪江和尙、

源京兆勝元居士嘗叩妙心義天禪師之室、創建龍安龍興二剎、延天爲開山祖、天遷化後、繼參雪江和尙、江一日謂曰、慈明和尙丈室中、一盆盛水、上面橫一口劍、下面著繩草鞋、有僧入來、明指曰、會麼、僧擬議、明便打趕出、京兆如何領會、士呈所見、江曰、如璨隱山向莫齋居士曰、公之所見只合入佛不可入魔、又且如何、士擬開口、江便喝出、數日後悟入、徑趨入山、江見其來卽曰、且喜京兆今日大事了畢、士一喝拂袖出去、江嘗曰、京兆實裴相國、陳尙書之流亞也、及士臥病、江往問候、士起坐問曰、和尙還看涅槃一路麼、江曰、瞎、士曰、正與麼時如何、江曰、珍重、士泊然便逝、年四十四、文明五年五月十一日也、

宗隆ノ宗深三七忌香語　二七尊忌香語

〈龍泉劍〉　坤　雪江和尙三七尊忌香語

以香指像云、鉗鎚惡辣幾傷人、果入泥犁受苦辛、設覓出離難得出、快哉萬刼不翻身、埋怪埋怪、一回遭脫賺這惡情悰、無端喪却吾獨朗天眞、咦、酬恩全不是、結冤也未親、擧香云、信手焚此爛柴片、咬牙切齒當香薪、喝一喝、便揮香、

〈心宗禪師語錄〉　上　雪江和尙忌　二首、

年光影裏似奔輪、憶著曾遭痛棒頻、今日冤讎何以報、兜樓一炷展炊巾、七年、

宗頓ノ宗深七回忌偈　宗門妖孽作家冤、眼似流星口血盆、滅卻大燈燄光了、惡聲難掩盡乾坤、十三年、

同十三回忌偈

〈少林無孔笛〉　一　雪江先師忌拈香云、一生惡辣逞威雄、殃害叢林滅祖風、珍重梅陽三尺土、活埋洋嶼罵天翁、

英朝ノ宗深忌日香語

〈佛日眞照禪師語錄〉　附錄　金寶山開山勅謚佛日眞照禪師木像安座點眼　同（悟溪）

宗頓宗深ノ木像ヲ衡梅院ニ安置ス

宗深ノ七回忌ヲ迎ヘントシテ未ダ甕堂ナシ

宗頓衡梅院ヲ建ツ

從來無形本寂寥、不須命工彫頂相、普化筋斗似顛狂、大潙又手猶鹵莽、山僧誤憶著先師、其奈被惑亂一上、咬牙展炊巾、悔欠連腮掌、安座一座須彌高幾萬丈、點雙眼云、左眼半斤右眼八兩、

呈瑞龍悟溪和尙、　同（泉陽）

正法山頭三祖師之塔品立、而衡梅院獨未搆甕堂、晨香夕燈風吹日炙者半紀矣、明年當七周忌、亦恐使人白地炷拜也、劣弟薄福、住山百計無補、每瞻禮自以愧赧、蓋開山中興兩塔共是瑞龍法兄禪師攸作新也、今於先師一塔何不顧之耶、嗚呼鐘之在筍簴也、待撞以鳴、不可不勸發焉、仍作拙偈、呈上猊牀下、所望遙垂高鑑、特出隻手、一莖草上忽現瓊樓玉殿、不亦盛哉、

梅陽一塔聳雲端、無殿無廊香火寒、業債難償七年雨、止啼黃葉掃堦看、

悟溪和尙建立衡梅方丈梁牌記曰、

大日本國山城州平安城西正法山妙心禪寺衡梅院立柱上棟、　明應七年戊午四月十又六日

守塔比丘宗頓　　大工藤原家繼

悅（謁）按、明應七年戊午距雪江和尙示寂十三年、時悟溪和尙守塔、新建立方丈矣、

英朝助緣ヲ謝ス

集九英朝ノ化緣小偈ニ和ス

英朝之ニ謝答ス

衡梅院ノ塔ヲ移ス

宗深全身無壞龕中ニ端坐ス

奉呈金寶堂上大和尙、謝衡梅甕堂助緣、用去冬題畫燕韻、

東陽

喜師一諾義尤眞、立向東風斫額頻、佗日華堂燕應賀、黃金纔上柳條新、

呈龍光堂頭猊側、奉謝衡梅甕堂助緣、用曾呈瑞龍韻、

同

東風吹喜上眉端、早覺貨泉排遣寒、輪奐功成若歸去、半窓春雨借山看、

去冬梅菴（集九）漆桶老人、觀余化緣小偈於金寶山中、輒和一章、今春得東來之信、又用前韻謝答、

無邊刹界一毫端、雲在萬年松頂寒、爭識湘南又潭北、先師塔樣少人看、

遷衡梅塔

天澤東胤錄云、雪江六世孫正統老人、曾語余曰、妙心昔適移衡梅塔、全身無壞、端坐龕中、唯爪髮太長耳、因鳴大鐘、告報合山、老僧時十四歲、隨衆禮拜、夫非戒根清淨定力堅固、則奚能至于斯哉、可尙、

宗深瑞泉寺妙喜庵ヲ建ツ
周麟詩ヲ賦シテ春波丹後ニ歸ルヲ送ル
弟子春波

文明十八年六月二日

悦按、慶長九年甲辰衡梅中興天秀和尚再興方丈、是時遷塔於今處、故塔處今爲甕堂東南柱下也、距雪江和尚示寂一百十九年也、

〔瑞泉寺由緒書〕

瑞泉寺塔頭　妙喜庵　法地

無領地

一當庵之儀、最初ハ永享十戊午年、本寺第六世義天大和尚之弟子雪江大和尚之建立開基ニ御座候、

〔翰林葫蘆詩集〕四

春波源侍者、乃前龍安雪江翁含飴也、爲人敦實、好學無倦、寓几硯於予左右者有日、然而一言半句、無以益之、豈不愧于心乎、丙午藟月辭歸丹之先廬、其志不可奪、詩送其行云、

告別忽々留不住、寒鴉飛盡暮山幽、人間白髮三千丈、夢裏丹丘十二樓、寧媚仙家燒藥竈、莫添村校讀書油、風饕雪虐保軀好、春向洛陽花下遊、

○宗深、大德寺住持トナルコト、寛正三年八月二十二日ノ條ニ、細川勝元ノ需メニ依リ、道號ヲ授クルコト、應仁二年十一月是月ノ條ニ、再ビ大德寺住持トナルコト、文明五年十二月二十一日ノ條ニ、勅ヲ奉ケテ

妙心寺ヲ再建スルコト、同九年閏正月二十六日ノ條ニ、妙心寺敷地ヲ宗隆ニ付屬スルコト、同十三年五月五日ノ條ニ、佛日眞照禪師ノ諡號ヲ賜フコト、永正二年八月二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

釋家之部　宗深

〔印章彙纂〕

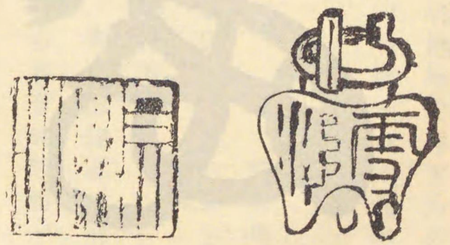
釋家之部　宗深

文明十八年六月二日

○汾陽寺文書（美濃）

文明十六年菊月二日書狀

印章



〇妙心寺文書（十山城）
文明十三年付嘱狀

〇龍安寺文書（山城）
與特芳法語

〔官報〕

昭和十年四月九日　第二千四百七十七號　火曜日

證本源圓通國師　四月八日　宮内省

叙任及辭令

雪江

三日、丁丑、山名政豐ノ部將田公豐職、但馬日光坊ニ、同國小佐郷恒富内漆田名、住吉名等ノ年貢ヲ安堵セシム、

〔日光院文書（舊稱成就院文書）〕　下　〇但馬

但州養父郡小佐郷恒富内漆田名、住吉名、并壹色三ヶ所年貢、如先規致其沙汰、人夫諸公事等之事者令免除候、彌於御祈念者奉憑候也、恐々謹言、

文明十八　六月三日　　豐職（田公肥後守）

日光坊　進之候、

四日、戊寅、延暦寺六月會ヲ停ム、尋デ、之ヲ行フ、

〔御湯殿上日記〕　〇京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收

八月三日、權の介六月ゑの前そうし（雨ふる、のふひて）こう、

〔大乘院寺社雜事記〕　百四

八月三日、雨下、

一中御門書狀到來、明日六月會ニ參向云々、昨日被來、他行之間不見參、

五日、己卯、義政ノ執奏ニ依リ、故從四位下大内教弘ニ從三位ヲ贈ル、

〔後法興院政家記〕　十一

六月九日、癸未、晩景夕立如昨日、〇中略大内亡父贈從三位事、去五日宣下云々、此事聊爲家門有申入旨、東山殿御執奏也、

〔後法興院政家記〕　十二

文明十九年正月廿日、辛酉、晴、〇中略大内故左京大夫上階贈位事競望間、自東山殿依御執奏、去年秋比有勅許、内儀以伯民部卿自家門

人夫諸公事等ヲ免除ス

中御門宣秀前奏

近衞政家モ白川忠富ヲ以テ

敎弘ノ贈位ヲ執奏ス　大内政弘ニ政家ニ二千疋ヲ贈ル　政弘ノ禮狀　政家ノ返書　一文字太刀ヲ贈ル

申入畢、雜掌僧文首座內々依有申子細也、於彼家者、上階今度之儀始云々、今春公武申御禮云々、今日家門（江）有音信、二千疋進之、雜掌僧書狀到來、自尼崎近日可上洛、其時大內書狀可持參云々、

廿七日、戊辰、晴、風吹、○中略　大內雜掌文首座持來左京大夫書狀、令對面、書狀如此、故入道贈位勅許、面目之至、更不及言上候、仍御太刀一腰（金覆輪）二千疋御本所ゐ進上仕候、表御禮計候、以此旨可令披露給候、恐惶謹言、

十月十三日　　左京大夫政弘（上名字ノトヲリノ裏ニ判アリ、如何、）

進上　進藤筑後守（長泰）殿

三月廿九日、己巳、降雨、午刻止、去正月廿七日大內書狀返報、今日書遣之、愚狀如此、遣太刀、一文字也、

誠故入道贈位事、勅許、家之眉目不可過之候、自愛令推察候、就其不思寄音信懇志之至、喜悅無比類候、祝言計太刀一腰進之候、向後細々可申承候也、仍狀如件、

三月廿九日　　（花押）

大內左京大夫殿

御禮ニ三百疋進上　白川忠富政弘ヨリ折紙ヲ贈ラレシニ依リ酒饌ヲ獻ズ　御賞翫アラセラル　政弘執奏ノ禮爲メ鄰瓦硯及ビ十萬疋ヲ義政ニ進ム

〔雜事要錄〕十　自所々禮物

（長享元年）正月廿日、二千疋大內左京大夫進之、父贈位禮也、

〔長興宿禰記〕下　六月廿七日、辛丑、晴、○中略　是日聞、去十九日故大內左京大夫（教）政弘贈三位事被宣下、所申請無例之由及御沙汰、東山殿御執奏、勅許云々、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　文明十九年二月七日、○中略　おうち（白川忠富）そう位の事よつきて、三百疋ゐいらするよし、ひんろし山殿より御申あり、十七日、みん部卿、おほちおうろゐいらせらるゝ、

〔實隆公記〕十一　文明十九年二月十七日、戊子、晴、○中略　及晩有召參內、民部卿進上御櫃御賞翫也、地下美聲有之、民部大輔忠□舞曲非無其興、御扇被下之者也、

〔蔭涼軒日錄〕文明十九年二月三日、天快晴、○中略　晚來謁東府、○中略　自相公被出鄰瓦硯一面曰、此瓦硯東坡銘在之、賜橫川可傳之、愚敬白、橫川定可忝存云云、堀川殿語云、大內敎弘被任贈三位、爲禮謝獻此硯、副以十萬疋云云、及昏刻、以悰子贈瓦硯於崇壽而傳台命、乃取拜受折紙來、